151　(楡沢平)赤城神社〔(ねりざわたいら)あかぎじんじゃ〕

表151－1

神社名	茶臼神社	所在地	桐生市黒保根町下田沢楡沢平
旧社格	無格社	所有者・管理者	区長
主祭神	大己貴命、足利惡嗣	神事	
創立・沿革	由緒は不詳であるが棟札によると、元は現在地より東三十間程の畑の中にあったが、遷座されたものである(享保20年(1735)９月)。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図151－１、写151－１）

桐生市黒保根町下田沢楡沢に位置している。主要地方道沼田大間々線、峠の茶屋前から西に林道を600mほど入ったところにある。南側の道路から石段７段を登ると境内。

境内の平坦部分は約18m四方とかなり小さい。その北東部に南南西を向いて覆屋の中に本殿を安置している。本殿裏手西側に四基の石宮、その西にも三基の石宮、その南に石垣で囲んだ石宮もある。南側道路からの石段を上がったすぐ右に石碑がある。

東光寺廃寺跡東方300mに鎮座するのが赤城大明神。これに忠綱大明神が合祀されている。

図151－１　配置図

写151－１　境内全景

由来および沿革

由緒は不詳であるが棟札によると、元は現在地より東三十間程の畑の中にあったが、遷座されたものである。享保20年(1735)９月当地に境内を移し、神域を造立し元文元年(1736)本殿を建立した。

本殿（図151－２、表151－２、写151－２～151－７）

建造年は棟札より元文元年(1736)である。本殿は二柱の神様を一つの祠に祀る二間社流造で、切妻造

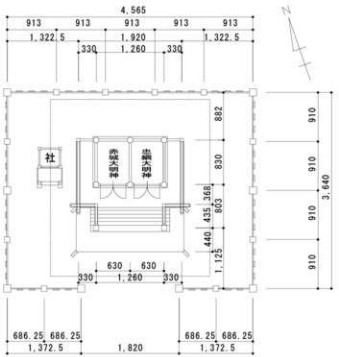

図151－２　平面図(本殿)

表151－2　本殿

建造年代／根拠	元文元年(1736)／棟札	構造・形式	二間社流造柿葺、正面1.26m、側面0.83m、向拝0.80m、覆屋あり
工匠	[大工]山田孫右衛門　田部井平七　下野国足利郡名草邑　遠藤喜三郎　下野国足利郡彦間邑	基礎	切石基礎
軸部	丸柱　角柱、土台、海老虹梁、水引虹梁、向拝　水引虹梁	組物	身舎　出組(支輪あり)、向拝　三斗　手挟
中備	蟇股(彫刻付)	軒	二軒繁垂木、蛇腹支輪
妻飾	軒支輪　虹梁大瓶束　笈形　拝懸魚	柱間装置	正面：板戸、板貼
縁・高欄・脇障子	登高欄・刎高欄　脇障子	床	板張
天井	鏡板	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	朱塗、榧彩色唐草(手挟、木鼻)	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	不明
彫刻	虹梁　高欄　蟇股　拝懸魚　木鼻		

写151－2　正面

写151－3　向拝1

写151－4　向拝2

写151－5　高欄 大床 階 浜床

写151－6　向拝海老虹梁 手挟

写151－7　妻面 懸魚 虹梁 大瓶束 笈形 蟇股

り鉄板葺きの覆屋（昭和３年11月建造）の中に鎮座している。本殿は壁・脇障子に彫刻を施していないため質素に感じるが、手挟や蟇股に立派な丸彫彫刻を用いている。向拝柱上部の獅子鼻・象鼻、妻部の虹梁・海老虹梁・水引虹梁などは簡素ではあるが彫刻が施され、大床には刎高欄、本体上部は出組で軒支輪が設けられ、小さいがとても整っている社である。華美すぎない彫刻、簡素な若葉がよく巻込んでいる渦などの建築様式より棟札の年代に建造されたものと推定する。

なお、棟札にかかった大工は山田孫右衛門、田部井平七、下野国足利郡名草邑、遠藤喜三郎、下野国足利郡彦間邑であった。

まとめ

本殿は二柱の神様を一つの祠に祀る二間社流造。和洋を基調にした唐草混じりの折衷様式で小規模ながら、装飾化が進む前の時代の落ち着いた意匠の社殿である。旧黒保根村、最古の神社であり、18世紀前半の地方神社における木造建築の意匠を知る上で貴重である。

（荻野　浩）

【参考文献】

『黒保根村誌　別巻三　黒保根の民家・社寺建築』黒保根村誌刊行委員会　昭和63年

152　冠稲荷神社〔かんむりいなりじんじゃ〕

表152－1

神社名	冠稲荷神社	所在地	太田市細谷町1
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　冠稲荷神社
主祭神	宇迦御魂神	神事	縁結び幸福祈願祭、宮の森春の花祭り、宮の森新緑祭り、宮の森紫陽花祭り、冠稲荷紙園祭、木瓜の実収穫祭、他多数
創立・沿革	天治２年(1125)／社伝　新田義重の父である源義国によって創建されたと伝えられる古社。承安４年(1174)源義経は奥州下向の途中、冠の中に奉持してきた伏見稲荷大明神等の御分霊・神札を社に収めた故事により、冠稲荷大明神と呼ばれる様になったとされている。		
文化財指定	冠稲荷神社の本殿並びに聖天堂(市重文　昭和47年９月)、冠稲荷神社の拝殿(市重文　平成２年３月)、最上流算額文化十一年銘(県重文　昭和51年５月)、細谷冠稲荷の獅子舞(市重無民　平成６年３月)、冠稲荷のボケ(県天記　昭和30年１月)		

位置・配置（図152－１、写152－１）

太田市の国道407号線を熊谷方面に向かうと西矢島で国道354号線の東毛広域幹線道路と交わる。ここを右折し伊勢崎方面に向かう、やがて蛇川を渡り、細谷地区に入ると左に冠稲荷の大鳥居が見える。

境内は南北に長く大変広大で四周を道路が囲んでいる。拝殿・本殿はほぼ南を正面とし境内の中心部より北側西よりに鎮座し、その東側に社務所を配置している。境内の入り口は東、南、西北の三方にあり、それぞれ道路に面して鳥居を立てている。南の鳥居から参道がまっすぐ北に向かっている。石の鳥居をくぐると手水舎や県指定天然記念物の木瓜の木がある。右の小高い所には市指定重要文化財の聖天堂があり、左には旧神楽殿と厳島社などがある。拝殿は左右の楠と金木犀の古木に守られるように正面にあり、裏側には本殿が鎮座している。

写152－１　境内全景

図152－１　配置図

由来および沿革

社伝によると、源義家の孫に当たる新田義重を始祖とする新田氏の守り神として、父の義国が天治２年(1126)に創建したと伝わる。承安４年(1174)源義経が奥州に下向の途中、冠の中に奉持してきた伏見稲荷大明神の御分霊を収めた故事により冠稲荷大明神と呼ばれるようになった。

また、元弘３年(1333)に新田義貞が鎌倉へ軍を進める途中に戦勝祈願をしたところ偉功を上げることが出来たので重箱獅子を奉納すると共に金木犀一株を植えて記念とし、神領も寄進したと伝わる。

降って江戸時代には、細谷に知行地を持つ大久保・赤井氏の旗本を始め、武州岡部藩主阿部摂津守らが当神社を厚く信仰し、御供米の寄進や社殿の改築、修理に奉仕したという。

拝殿内には天井に新田道純の龍の墨絵の他、市指定重要文化財の最上流や関流の算額、市指定重要無形民俗文化財の獅子舞の獅子頭なども置かれている。

本殿（図152－２、表152－２、写152－２～152－７）

本殿は正面３間（2.74m）、側面２間（1.70m）、向拝１間（2.74m）、三間社流造といわれ正面に千鳥破風、向拝は軒唐破風の造りになっている。向拝柱は几帳面取の角柱で水引虹梁、海老虹梁、中備は蟇股、手挟は牡丹の籠彫でそれほど大きくはない、木鼻は正面が獅子で横が獏であるが獅子は後補の物である。前方に浜縁・浜床を設け、身舎の四方の大床跳高欄、正面の階の両側には擬宝珠付きとしている。胴羽目には中国故事を高肉透彫、脇障子は昇降の龍としてある。妻飾は二重虹梁大瓶束の笈方を始めとして全体に彫刻を施し、彫刻には極彩色で彩られ、大変見事な造りになっている。

本殿には建造年の他、複数の棟札が保管されており、平成２年度(1990)の外部の塗装の塗替えの時、外壁の高肉透かし彫りの彫刻板を外したところ、背

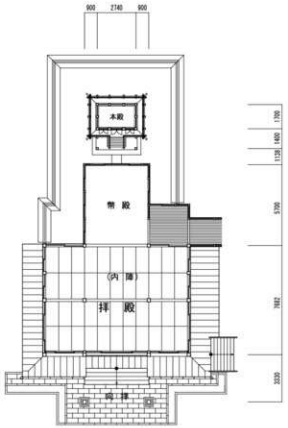

図152－２　平面図(本殿・拝殿)

表152－２　本殿

建造年代／根拠	享保７年(1722)／棟札	構造・形式	三間社流造(2.74m)、側面２間(1.70m)、千鳥破風付向拝１間軒唐破風、銅板瓦棒葺(当初檜皮葺)
工匠	[大工]樋口次郎兵衛・樋口半左衛門、邑楽郡館林領佐貫庄大工次良兵衛　[彫工]前原藤次良・松島文蔵他(明和４年)、飯田仙之助藤原義棟(文化12年)／墨書	基礎	自然石切石(亀腹状)
軸部	[身舎]丸柱、地覆長押、切目長押、内法長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[身舎]三手先、尾垂木　[内部]出組　[向拝]変形連三斗実肘木付
中備	[身舎]蟇股(植物)　[向拝]蟇股(植物)	軒	二軒繁垂木
妻飾	二重虹梁大瓶束笈方付、蟇股、懸魚(無・六葉)	柱間装置	[正面]両開唐桟戸　[背側面]板張
縁・高欄・脇障子	刎高欄・登高欄擬宝珠付、脇障子(彫刻)	床	不明
天井	不明	須弥壇・扉子・宮殿	不明
塗装	朱塗、極彩色(胴羽目彫刻、蟇股、木鼻、尾垂木等)	飾金物等	高欄、扉、長押(金色金物)
絵画	なし	材質	不明
彫刻	[向拝]柱(几帳面)、水引虹梁(絵様)、蟇股(植物)、海老虹梁(絵様)、木鼻(獏・獅子)　[身舎]蟇股(植物・狐・兎)、尾垂木(龍・唐)、木鼻(獅子・狐・羊・兎)、胴羽目(中国故事)、脇障子(龍)、持送(波)		

写152－2　本殿全景

写152－3　胴羽目背面

写152－4　胴羽目側面

写152－5　向拝の木鼻

写152－6　向拝の蟇股

写152－7　海老虹梁

面の彫刻板の裏には明和４年(1767)前原藤次良他３名の名が記されていた他、向かって右側の２枚からは文化12年(1815)石原吟八藤原義武、同吟八藤原明義　門人飯田仙之助藤原義棟と書かれた墨書が発見された。建造年は水引虹梁の唐草絵様や蟇股の彫刻からも棟札通り享保７年(1767)と推定できる。建造年の享保７年は関東の彫刻の祖といわれる高松又八が亡くなっていることや大工との関係から初代の石原吟八郎の作品であると推定できる。当初年には胴羽目に彫刻がなく、46年後に吟八郎の弟子の前原藤次郎が手掛け、さらにその50年後に飯田仙之助が手掛けたのではないかと考えられる。作品を見ると、両脇の４枚と後ろの３枚は明らかに時代が違うことが分かる。また、蟇股は当初のものである可能性が高いが、向拝の獅子頭等は明らかに後補の作である。したがって本建物は、18世紀前半から中半さらに19世紀の彫刻の流れが分かる複合的な遺構で他に類を見ない貴重なものである。

拝殿（図152－２、表152－３、写152－８～152－13）

拝殿は正面（10.18m）、側面（7.64m）入母屋造の平入で正面に千鳥破風、向拝は軒唐破風としている。背面には正面（4.54m）、側面（5.70m）の切妻の幣殿を設け、本殿とは接続はしていないが、社

表152－３　拝殿

建造年代／根拠	寛政11年(1799)／棟札	構造・形式	正面(10.18m)、側面(7.69m)、入母屋造、千鳥破風付、平入、向拝１間軒唐破風付、銅板平葺(当初草葺屋根)
工匠	[大工]中村兵部大夫嘉道(山田郡神之郷)・田中治助幸長(武州幡羅郡小暮村)	基礎	自然石の玉石
軸部	[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁　[身舎]角柱、地長押、内法長押、頭貫	組物	[身舎]平三斗　[外陣]出組　[向拝]出三斗
中備	[向拝]嵌込彫刻　[外部]大瓶束	軒	二軒繁垂木
妻飾	二重虹梁大瓶束、笈形、蟇股　[懸魚]無	柱間装置	ガラス戸、舞良戸
縁・高欄・簀障子	大床三方(切目板)	床	[内陣]畳　[縁]板張
天井	板天井・一部鏡天井(絵画)	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	朱塗、金箔押(虹梁下)、極彩色(彫刻)	飾金物等	向拝柱、垂木小口、隅木鼻、破風、格天井
絵画	[格天井]花鳥図　[鏡天井]龍の墨絵(新田源朝臣道純画)	材質	不明
彫刻	[向拝]角柱(几帳面・地紋彫)、虹梁(絵様)、嵌込彫刻(龍、唐子)、木鼻(獅子)、兎毛通(龍)、持送(波)　[身舎外部]虹梁(絵様)、木鼻(獅子、籠彫牡丹)、大瓶束(牡丹籠彫)、持送(波)　[内部]大虹梁(絵様)、持送(牡丹籠彫)、嵌込彫刻(唐子遊)、支輪(波・植物)		

写152－8　拝殿正面

写152－9　向拝の龍

写152－10　兎毛通の龍

写152－11　欄間の唐子彫刻

写152－12　天井の墨絵の龍

写152－13　虹梁と大瓶束

殿として権現造に準ずる形態を示している。棟札は寛政11年(1799)となっている。細部の様式は全てを角柱とし、内外とも平三斗組にして中備を設けない落着いた仕上げにしている。向拝の柱は几帳面・地紋彫りとし、中備や兎毛通の龍の彫物を施し、木鼻は獅子である。向拝を始めとして拝殿の彫刻は18世紀末から19世紀初期以降の物と思われ棟札の年代と一致する。大工は上州山田郡沖之郷村の中村兵部と武州幡羅郡小暮村の田中治助とあり、鯖尻の刎ね上げが見られるところから林兵庫の系統と思われる。棟札に彫工の名はないが、妻沼の聖天堂の影響を受けた「唐子遊び」が欄間彫刻に残されていることから花輪系の彫工である可能性が高く、場所、経歴からも飯田仙之助が拝殿も手掛けた可能性が高いと推定できる。

拝殿は築造当初は棟を境にし、北側を畳敷として礼拝所に利用し、南側は土足で礼拝できる板敷の空間とし、向拝として利用していた。このような平面形式は県内でも珍しく建築史上貴重な遺構である。また、屋内天井の中央部を鏡天井とし、新田氏ゆかりの絵師（新田道純）の龍の墨絵を残している。

聖天宮（図152－3、表152－4、写152－14～152－19）

聖天宮は正面（2.89m）、側面（3.88m）と比較的小規模な建物でありながら屋根が複雑で、四方入母屋造正面唐破風付という特徴的な造をしている。当初から日本瓦で葺かれており、棟札によると安政4年(1857)10月上棟で大工棟梁として「弥勒寺河内守藤原照房」となっている。これは境下渕名の弥勒寺音次郎の事で、大工でありながら彫工としても名を馳せている。

本建物の彫刻は内部天井の龍を始めとして大変質の高いものである。彫工は音次郎の息子「弥勒寺音八とその弟子の諸貫万五郎」である。弥勒寺音八は一時期飯田仙之助の養子弟子となった岸亦八の弟子となり、常陸の天引観音や笠間稲荷を手掛けるようになる。音八の名声は広く響き、明治に移るころ、音八は宮中に召し抱えられ賢所の玄関正面の菊の紋を彫刻した人物である。

図152－3　平面図(聖天宮)

表152－4　聖天宮

建造年代／根拠	安政４年(1857)／棟札	構造・形式	一間社四方入母屋造(2.89m)、側面３間(3.88m)、背面２間、軒唐破風付、瓦葺
工匠	[大工]棟梁　弥勒寺河内藤原照房　[彫工]弥勒寺音八、諸貫万五郎	基礎	自然石玉石
軸部	[身舎]角柱、地覆長押、地長押、内法長押、頭貫、水引虹梁	組物	[身舎]和様出組、実肘木
中備	[外部]嵌込彫刻　[内部]嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木、唐破風に茨垂木
妻飾	虹梁大瓶束笈方付、兎毛通(鶴)	柱間装置	[正面]両開戸、板壁　[側面]舞良戸(内障子)、格狭間(蝙蝠型)、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子(彫刻)	床	畳(縁付)
天井	格天井(彫刻、絵画)	須弥壇・扉子・宮殿	須弥壇
塗装	[外部]朱塗、榧彩色(嵌込彫刻、彫刻支輪、虹梁)　[内部]榧彩色(嵌込彫刻、彫刻支輪、組物、頭貫、台輪)、金箔(天井龍の彫刻)	飾金物等	なし
絵画	[天井]花鳥図	材質	不明
彫刻	[外部]兎毛通(鶴)、水引虹梁(波・菊)、木鼻(獅子)、脇障子・袖壁(人物)　[内部]天井(龍)、支輪(波・魚、植物・鳥)、嵌込彫刻(龍)、水引虹梁(絵様)		

写152－14　聖天宮全景

写152－15　前面の彫刻

写152－16　脇障子

写152－17　祭壇上の組物

写152－18　彫刻と天井絵

写152－19　内部の支輪等の彫刻

まとめ

本神社は創建も古く、新田源氏の守り神として、厚く信仰されてきたことから、建物のみならずその他の文化財も多く残されてきた。そればかりでなく地域とのつながりも古くからあり、聖天宮は古墳の上に鎮座しているという。建物には棟札も残されていて建造年代もはっきり分かり、携わった大工もはっきりしている。大工の多くは地元大工が多いが妻沼聖天堂を手掛けた林兵庫正清の影響も強く、利根川を挟んでの交流が深かったことも理解できる。

本殿の胴羽目の彫刻の裏から飯田仙之助の墨書が発見された。それには、石原吟八郎の初代と二代目の名が記されていたことから、18世紀から19世紀の花輪彫刻師の流れを知る上での手掛りとなった。さらに聖天宮の弥勒寺音八につながる彫刻師の流れが分かる様な神社である。

（下山　彰）

【参考文献】
『冠稲荷神社の建築』太田市資料　平成３年
『藪塚本町誌』(序章　藪塚本町の彫刻文化)

153 （世良田）東照宮〔（せらだ）とうしょうぐう〕

表153－1

神社名	東照宮	所在地	太田市世良田町3119-1
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　東照宮
主祭神	徳川家康公	祭事	初詣、除魔神事（1/4）、御祈祷始の式（1/5）、例大祭（4/17）、葵祭（4/第1日曜日）、七五三詣
創立・沿革	世良田東照宮は寛永16年(1639)天海大僧正は徳川家康公から御下命されていた長楽寺を臨済宗から天台宗に改宗復興。三代将軍家光公は日光東照宮奥社を移築し、本殿は新築する。徳川幕府がほろび、明治元年(1868)の神仏分離令により長楽寺と分離となり、明治12年(1879)に郷社になる。		
文化財指定	東照宮　本殿、唐門、拝殿(国重文　昭和31年6月)、太刀　銘了戒(国重文　大正10年4月　県立歴史博物館収蔵)、板面著色三十六歌仙図(県重文　昭和40年7月)、新田荘遺跡(東照宮境内)(国史跡　平成12年11月)		

位置・配置（図153－1、写153－1）

太田市南西部端の世良田町に位置する。隣には長楽寺・新田荘歴史資料館が存在し、国指定史跡の新田荘遺跡の一面を成している。境内は東武伊勢崎線世良田駅より南に約2kmにあり、太田市立世良田小学校にほぼ隣接する住宅地にある。境内の二方向（東南）は道路に面し、北面は長楽寺に隣接している。東面の道路より御黒門を入り、左手に手水舎を見る。参道を西に進み石鳥居を抜けると石灯籠があり、北側には国重文の鉄灯籠があり、右手に社務所・宝物館が位置し、参道正面に「拝殿」が東に向き、その奥に唐門が東に向き、透塀に囲まれた「本殿」が東に向く。

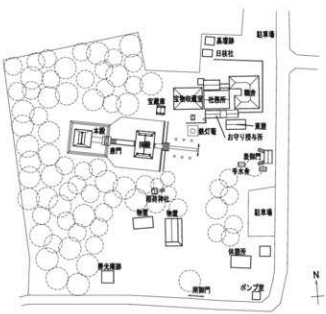

図153－1　配置図

写153－1　境内全景

由来および沿革

世良田東照宮は、寛永15年(1638)に世良田山長楽寺住職天海僧正によって同寺境内に勧請されたものである。社殿は、日光東照社が寛永13年(1636)に造替されたのちに、その旧奥社社殿を譲り受けて建てられ、寛永20年(1643)に一切を完了した。その後江戸時代に8度の大・小修理が行われ、明治以降は応急的修理のみ行われてきた。世良田東照宮は元和元

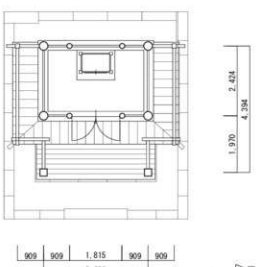

図153－2　平面図(本殿)

年(1615)造営時の日光東照社の旧奥社社殿であるとのことより昭和31年(1956)６月28日国指定重要文化財に指定された。昭和39年(1964)より国庫補助金にて大修理が施された(『東照宮社殿修理報告書』)。寛永16年(1639)天海僧正は徳川家康公から長楽寺を臨済宗から天台宗へ改宗復興する。明治元年(1868)の神仏分離令により長楽寺と分離・独立し、明治12年(1879)に郷社となる。

本殿（図153－２、表153－２、写153－２～153－７）

建造年代に関する史料により元禄９年(1696)、正徳４年(1714)、元文元年(1736)、宝暦13年(1763)、安永６年(1777)、寛政８年(1796)、天保15年(1844)の７枚の棟札が残るが、いずれも修復時のものである。建造年は寛永21年(1644)10月11日に正遷宮が斎行されたことにより寛永21年(1644)である。正面を東に向け、一間社流造銅瓦葺で、棟に１対の置千木と２本の堅魚木をのせる。軒は正面を二軒繁垂木とする。正面は三ツ割小間開板唐戸を置き、側面は板壁、妻飾は二重虹梁大瓶束である。大床を三方に回らし、脇障子を設ける。組物は身舎を出三斗、向拝を連三斗とする。中備は身舎、向拝とも蟇股である。海老虹梁はほぼ水平に架けられている。内部の軒支輪は二重で上部を彫刻板支輪、下部を蛇腹支輪とする。本殿は創建時に遒営された。

表153－２　本殿

建造年代／根拠	寛永21年(1644)／棟札	構造・形式	一間社流造(3.63m)、側面２間(4.39m)、向拝１間、銅瓦葺
工匠	不明	基礎	四周切石
軸部	[身舎]丸柱、地覆、足固貫(縁)、長押(腰、内法)、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[身舎]出三斗　[向拝]連三斗変形
中備	[身舎]蟇股　[向拝]蟇股	軒	二軒繁垂木
妻飾	二重虹梁大瓶束	柱間装置	[正面]三ツ割小間開板唐戸　[側面]板壁
縁・高欄・脇障子	三方大床切目縁、脇障子、登高欄付	床	[身舎内部]拭板張
天井	[身舎内部]格天井	須弥壇・扉子・宮殿	唐草須弥壇
塗装	朱塗、極彩色(彫刻)	飾金物等	[身舎]長押釘隠、唐戸定規縁出八双、高欄木口、地覆・平桁・架木散金具、垂木金具、屋根千木・勝男木木口金具、棟・箱棟帯金具、葵紋・唐草・巴漆箔押、地覆唄銅燻、扉構藁座金具焼漆仕上
絵画	脇障子	材質	不明
彫刻	[身舎外部]木鼻(龍４対)　[向拝]獅子、虹梁、組物、蟇股		

写153－２　正面

写153－３　側面

写153－４　妻飾：懸魚・虹梁

写153－５　向拝海老虹梁

写153－６　正面組物

写153－７　身舎：扉・蟇股

拝殿（図153－３、表153－３、写153－８～153－13）

社殿のうち拝殿は、寛永19年(1642)に元和造営の日光東照宮奥社拝殿を当地に移したものと伝えられている。徳川時代における建造物の修復は寛文４年(1664)から天保15年(1844)にかけて修理が施されている。その後、国庫補助を得て昭和39年(1964)10月工事着手、昭和41年(1966)９月工事完了（東照宮社殿修理工事報告書）。正面５間（9.89m）、側面３間(5.56m)、入母屋造平入、正面および背面軒唐破風付とする。屋根は現在銅瓦とする。唐破風（兎毛通付）。外部正面・背面の中央には外側両開桟唐戸、内側は三枚引分格子戸、その他の柱間は全て蔀戸で納められている。四周は跳高欄付の縁を廻し、高欄

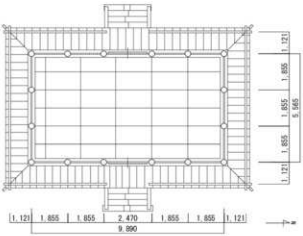

図153－３　平面図(拝殿)

表153－３　拝殿

建造年代／根拠	17世紀前期／建築様式	構造・形式	正面５間(9.89m)、側面３間(5.56m)、入母屋造、平入、正面及び背面軒唐破風付、銅瓦葺
工匠	不明	基礎	切石、自然石
軸部	丸柱、地覆、切目長押、内法長押、頭貫	組物	出三斗
中備	[正面・背面中央]蟇股　[内部]間斗束	軒	二軒繁垂木
妻飾	虹梁大瓶束	柱間装置	[正面・背面]中央両開桟唐戸、両脇蔀戸４ヶ所　[東西・側面]東西：蔀戸
縁・高欄・脇障子	四方大床、跳高欄付縁	床	畳敷
天井	小組格天井(菊花紋様入)	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	[外部]朱塗　[内部]黒塗　[頭貫上部]極彩色	飾金物等	内外釘隠六葉・軒裏甲隅・要所散金具、唐破風茨棟散金具・菖蒲桁木口金具・唐破風・同裏甲拝・尻金具・高欄木口金具・同散金具・妻千鳥破風・同裏甲拝・尻金具・他
絵画	天井絵：菊花文様	材質	不明
彫刻	兎毛通、懸魚		

写153－８　正面：東面

写153－９　背面：西面

写153－10　側面

写153－11　妻飾：懸魚

写153－12　外部：木鼻

写153－13　内部正面

の端部（出入口）には桃山時代に好まれたわらびの芽をかたどった「蕨手」が用いられている。内部の床は畳敷となっているが、昭和41年の修理工事時は拭床である。天井は小組格天井であり、小組の中には菊花紋入となって大変華やかな天井である。外部塗装は朱塗で、内部は黒塗となっており、頭貫上部は極彩色と内部天井とともに華麗な空間を奏でている。

唐門（図153－4、表153－4、写153－14～153－16）

建造年は寛永21年(1644)。正面を東に向け、切妻造平入、1間1戸の四脚平唐門、銅瓦葺、軒を木舞下地の一軒疎垂木、妻飾を虹梁蟇股とする。主柱を丸柱、控柱を角柱とし、地覆、腰貫、頭貫を虹梁形とする。門に付随し透塀が本殿を一周している。門は拝殿が移築された時に共に移されたとするが、確定する史料を残していない。

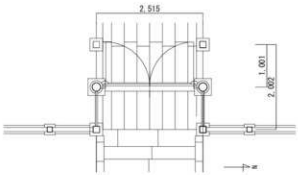

図153－4　平面図(唐門)

まとめ

東照宮は寛永年代に拝殿と唐門が日光より移築され、同時に本殿が建造されている。その配置は拝殿と本殿を別棟とし、本殿周囲を透塀で囲い唐門を潜って本殿に至る独特な形式となっており、日光東照宮の奥社の配置を模したものとなっている。江戸期の建築としての特徴が残っており、徳川家との深いつながりを物語る神社である。

（荘司由利恵）

【参考文献】
『尾島町近世寺社建築調査報告書』尾島町教育委員会　平成10年
『重要文化財　東照宮社殿修理工事報告書』重要文化財東照宮社殿修理委員会　昭和41年
『徳川氏発祥の地　世良田東照宮』世良田東照宮　平成31年

表153－4　唐門

建造年代／根拠	寛永21年(1644)／古文書	構造・形式	1間1戸四脚平唐門(2.51m)、側面(2.00m)、銅瓦葺
工匠	不明	基礎	切石
軸部	主柱：丸柱。控柱：角柱。地覆、腰貫、頭貫	組物	大斗実肘木
中備	虹梁	軒	一軒疎垂木
妻飾	虹梁蟇股	柱間装置	[正面]両開桟唐戸　[側面]板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	土間切石敷
天井	板張	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	朱塗	飾金物等	桟唐戸框金具・蕨座金具鉄製焼漆塗、鬼板・箱棟葵文漆金箔押、鬼板覆輪・軒巴・同唐草漆金箔押
絵画	なし	材質	不明
彫刻	木鼻(拳鼻)、肘木(刻線彫)、虹梁(絵様)		

写153－14　正面

写153－15　側面

写153－16　木鼻

154 （阿久津）稲荷神社（(あくつ)いなりじんじゃ）

表154－1

神社名	稲荷神社	所在地	太田市阿久津町102
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人　稲荷神社
主祭神	宇迦之御魂神	神事	初午（２月初午日に近い土又は日）、春祭（３月末の土又は日）、疫神除（７月第１週土日）、秋祭(11月第３週土又は日)
創立・沿革	創建は不明である。明治11年(1878)の新田郡神社明細表によると由緒として、「稚産霊命、天児屋根命ハ古来ヨリ相殿トス、然レトモ年記不詳」と記載されている。		
文化財指定	阿久津の獅子舞(市重無民　昭和50年10月)		

位置・配置（図154－１、写154－１）

この地は南に早川と利根川、北に石田川が流れる。早川が貫流し利根川と接する阿久津町（元地）から北東に少し離れた場所にある阿久津町であり、旧尾島町の中心市街地に位置する。境内南側は東国文化歴史街道（県道142号線(旧国道354号線)）、北側は正光寺境内、東側は正光寺参道に面している。街道沿いの境内南側中央に石鳥居と木製鳥居が並立し、参道両脇に狛犬と石灯籠が続く。拝殿、幣殿、本殿は南を正面として鎮座する。本殿は玉垣で囲まれ、覆屋がある。東側には阿久津会館があり、阿久津会館は東の正光寺参道より入り、拝殿と接続している。境内南側は街道に面して庚申塔や記念碑が整然と立ち並び、大国主神、湯殿山・月山・羽黒山、八海山神主、不動明王も祀られている。西側には石宮がある。石宮の後ろが敷地境界であり、昔は道として使われていた。北側は正光寺の板塀が並ぶ。

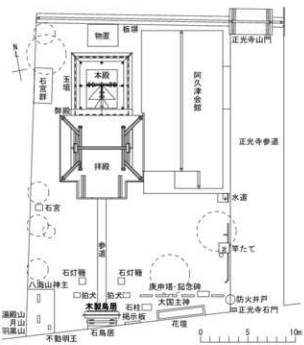

図154－１　配置図

写154－１　境内全景

由来および沿革

元和年間(1615～1624)の頃、度重なる洪水のため

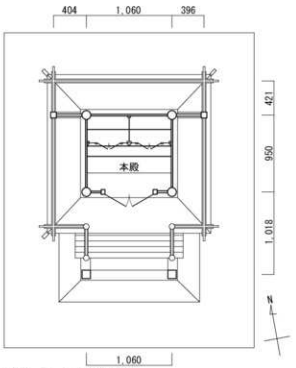

図154－２　平面図(本殿)

隣接する正光寺とともに現在地に移されたと伝えられている。明治21年(1888)の郡村史資料には、元和年中、利根川の大洪水により阿久津村全戸が岩松村の西域を譲り受け移住したと記されている。また、太田市指定重要無形民俗文化財である阿久津の獅子舞は、江戸時代初期から行われていたと伝わる。本殿には宇迦之御魂神、稚産霊命、天児屋根命が祀られている。

本殿（ほんでん）（図154－２、表154－２、写154－２～154－７）

建造年代は棟札より天保12年(1841)である。棟札裏面の追記より嘉永４年(1851)に銅瓦葺に葺き替えをした。棟梁は武陽南河原村の飯田大和正藤原兄殿ほか７名、彫物師は小林丑五郎ほか３名である。小林丑五郎は、「関東の名工」とか「熊谷源太郎」とも称された小林源太郎の高弟であり、後を継いだ人物である。小林源太郎は越後の名匠といわれる石川雲蝶とともに多くの名作を越後に遺し、榛名神社の

表154－２　本殿

建造年代／根拠	天保12年(1841)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.06m)、側面１間(0.95m)、千鳥破風付、向拝１間唐破風付、銅板平葺
工匠	[大工]棟梁　武陽南河原村　飯田大和正藤原兄殿　他７名　[彫工]彫物師　武陽玉ノ井村　小林丑五郎　他３名　[屋根師]武州河原明戸村　飯田冨右衛門　他２名　[木挽]上州神之村　加藤新五右衛門　[屋根葺師]武州埼玉郡野村　高橋友治郎　他１名／棟札	基礎	亀甲積基壇、布基礎石、亀腹石(浜床部除)
軸部	[身舎]丸柱、土台、長押(足元、縁、腰、内法)、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、二重虹梁、海老虹梁、長押(半、腰)、手挟	組物	[身舎]三手先組、尾垂木　[腰組]三手先組、隅挿肘木　[向拝]連三斗積上変形(斗・肘木が３段)
中備	[身舎]蟇股　[向拝]嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻、極彩色)
妻飾	[壁]二重虹梁蟇股、出組、彫刻板支輪　[破風]反り破風(眉欠２段)、懸魚(透彫の瑞雲)	柱間装置	[正面]桟唐戸、羽目　[側面・背面]布羽目
縁・高欄・脇障子	四方縁、勾高欄、登高欄付、脇障子	床	拭板張
天井	竿縁天井	須弥壇・扉子・宮殿	造付厨子(神像２体、神鏡)
塗装	全体的に素木、極彩色(軒支輪、唐破風太鼓羽目彫刻)、朱色(兎毛通鳳凰の口、水引虹梁上嵌込彫刻　龍の口)	飾金物等	垂木(木口金物　三つ巴紋章)、長押端部(入八双唐草紋様)、破風(破風拝み　入八双唐草紋様・宝珠紋章、中散らし　三つ巴紋章・唐草紋様、破風尻　入八双唐草紋様)、唐破風、脇障子冠木端部(入八双金物　唐草紋様、木口は三つ巴紋章)、桟唐戸(隅金物、一文字金物、平半分、宝珠紋章)、厨子扉(総八双唐草紋様)
絵画	なし	材質	欅、杉、銀杏
彫刻	[身舎外部]丸柱(地紋彫　瑞雲)、土台(地紋彫　紗綾形紋様)、蹴込彫刻(透彫　菊水、鳥・花、鳥・波)、腰組隅挿肘木(丸彫　松)、長押(地紋彫　松皮菱紋様、入子菱紋様、蜀江錦紋様、花菱紋様、錦繭紋様)、頭貫(地紋彫　花菱紋様)、蟇股脚内(透彫　鳥と花、牡丹、稲)、軒支輪(浮彫　菊水、鶴・瑞雲)、胴羽目彫刻(透彫三条小鍛冶、長坂坡趙雲救幼主、玉垣弾琴、唐獅子)、腰羽目彫刻(透彫　唐子遊び・竹馬、唐子遊び・魚獲り、唐子遊び・雪転がし)、脇障子(透彫　黄安、林和靖・梅と鳥)、脇障子柱(地紋彫　紗綾形紋様、入子菱紋様)、脇障子架木(地紋彫　花菱紋様)、木鼻(丸彫　獅子、獏、鳳凰)、尾垂木(丸彫　龍、波、象)　[向拝]向拝柱(地紋彫　紗綾形紋様・宝珠紋)、蹴込彫刻(透彫　波と花)、腰長押(地紋彫　算木菱紋様)、水引虹梁(刻線彫・沈彫　菊水)、水引虹梁上嵌込彫刻(透彫　龍)、二重虹梁(刻線彫・沈彫　唐草紋様)、海老虹梁(透彫　昇龍、降龍)、木鼻(丸彫　獅子、獏)、太鼓羽目(透彫　故事)、手挟(透彫　栗鼠と葡萄)、兎毛通(透彫　鳳凰)	

写154－２　全景

写154－３　側面

写154－４　背面

写154－5　海老虹梁

写154－6　妻面

写154－7　背面　胴羽目彫刻

双龍門でも腕を振るった。小林源太郎は中国故事の彫刻を得意としたが、本殿の彫刻にも受け継がれている。

規模は一間社流造で覆屋がある。大棟には一対の置千木、３本の堅魚木、鬼板を置き、千鳥破風の棟には１本の堅魚木と鬼板を置く。内部には造り付けの厨子がある。厨子は二室に分かれており、扉の前面に台が１段、内部にも台が１段ある。また、登り高欄内側に向拝柱から本殿正面の壁面まで壁が立てられており、渡殿と一室になっている。組物は外部が尾垂木付の三手先組、腰組が三手先組、向拝が連三斗積上変形で斗・肘木が３段ある。３段目は内外二斗の上に実肘木が乗る。中備は身舎が蟇股であり、その上段の通肘木上部には斗を並べ、二手目通肘木上部は彫刻板支輪がつく。向拝部が龍の透彫の嵌込彫刻である。軒は二軒繁垂木であり、前面は地垂木を打越垂木とする。全体的に素木造りで、部材の多くに彫刻が施されており、この地域の建造年代の特徴をよく示している。

幣殿（へいでん）（図154－３、表154－３、写154－８～154－10）

建造年代は棟札等がないが、神社明細帳、形態、古文書等から明治後半であると推定する。明治11年(1878)の新田郡神社明細表には拝殿は無しと記載されており幣殿の記載もない。本社の他は諸建物として間口１間半、奥行１間、萱葺きの斉殿の記載があるのみである。明治12年(1879)の新田郡神社明細帳には明治42年(1909)に拝殿と渡殿が追記されている。拝殿は、梁間３間１尺、桁行３間、向拝出６尺、幅８尺、渡殿は方１間であることが記されてい

表154－３　幣殿

建造年代／根拠	明治後半／建築様式	構造・形式	正面5.48m、側面2.19m、切妻造、鉄板横葺
工匠	不明	基礎	[拝殿側]切石　[渡殿]本殿の布基礎石
軸部	角柱、土台、長押	組物	なし
中備	なし	軒	大疎垂木
妻飾	板金張付	柱間装置	連子窓、引分ガラス戸、土壁(外側は化粧板金張付)、目板羽目、竪羽目
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	桁端部
絵画	なし	材質	杉、松
彫刻	なし		

写154－8　側面

写154－9　内部正面

写154－10　渡殿内部

る。当時は拝殿と幣殿は分けずにまとめて拝殿としていたと考えると、記載内容が現在の姿と一致する。また、幣殿の屋根の軒先の高さは脇障子の高さとほぼ同じであり、柱のす法の違いや、側面の柱の間隔の違いから、拝殿と同時に建築されたとは考えづらい。また、白石家の「一世日記」の拝殿建立新築の記載には拝殿の規模として二間三間御拝付と記載されている。現状の拝殿と規模が一致する。神社総代への聴き取り調査で幣殿の建造年が不明であることも含め、建造年代は明治後半であり、拝殿のあとに増築されたものと推定する。

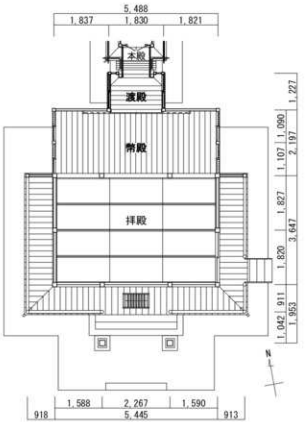

図154－３　平面図(拝殿・幣殿)

規模は正面5.48m、側面2.19m、切妻造、鉄板横葺である。平面は拝殿の続き間である。本殿側は渡殿とつながり境に引分ガラス戸がある。軸部には長押が足元と連子窓敷居部につく。渡殿は正面1.83m、側面1.22m、屋根は本殿の向拝部分を利用している。

拝殿（図154－３、表154－４、写154－11～154－13）

白石家の「一世日記」（明治12・13年）には、明治12年(1879)に西からの暴風により大杉が倒れ、鎮守御拝が大破損したので、速やかに氏子一同の集議による郡役所への鎮守営繕願いをして、明治13年(1880)の４月に盛大な上棟式がおこなわれたことが記されている。営繕費は白石家の全額寄進によったことも記されている。向拝柱の地紋彫、格間天井画、瓦屋根大棟に「白石家」の家紋を確認することができる。格間天井画に「辛巳(1881)」の墨書があり、建物が明治14年(1881)に完成したことが推定できる。棟梁は武州妻沼の林門作、彫物師は後に宮内庁彫物師になる尾島の高澤改之助である。

表154－４　拝殿

建造年代／根拠		明治13年(1880)／古文書		構造・形式	正面5.44m、側面3.64m、入母屋造、平入、向拝１間、桟瓦葺
工	匠	[大工]棟梁　武州妻沼村　林門作　[彫工]彫物師　尾島　高澤改之助／[白石家]「一世日記」		基礎	コンクリート基壇　[身舎]礎石(自然石、切石)　[向拝]沓石、礎盤
軸	部	[身舎]角柱、長押(切目、内法)、虹梁型差鴨居　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟		組物	[身舎]舟肘木(絵様肘木)　[向拝]出三斗
中	備	[身舎]舟肘木(中央間正面のみ)　[向拝]嵌込彫刻		軒	[身舎]一軒半繁垂木　[向拝]二軒半繁垂木
妻	飾	[壁]前包、須覆、竪羽目　[破風]反り破風(眉欠２段)、蕪懸魚、六葉、樽口		柱間装置	[正面]半蔀　[背面]建具なし建具溝あり　[側面]板戸、土壁、竪羽目
縁・高欄・脇障子		三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子		床	畳敷
天	井	格天井		須弥壇・扉子・賽銭	なし
塗	装	素木		飾金物等	繞る破風端部、隅木端部、擬宝珠、脇障子竪羽目高乱餝
絵	画	天井画(格天井格間　花、鳥、犬、獅子、魚、収穫物　等)		材質	欅、杉、銀杏
彫	刻	[身舎外部]虹梁型差鴨居(刻線彫・沈彫　唐草紋様)、絵様肘木(刻線彫　渦紋様)　[向拝]角柱(地紋彫　紗綾形紋・白石家家紋)、水引虹梁(刻線彫・沈彫　菊水、裏は唐草紋様)、手挟(透彫　瑞雲)、虹梁上嵌込彫刻(高肉透彫　狐の嫁入)、海老虹梁(篭彫　昇龍と降龍の胴体)、向拝柱側面懸鼻(丸彫　降龍胸部)、虹梁持送(篭彫　鳥・波)、降懸魚(浮彫　瑞雲)			

写154－11　正面

写154－12　懸鼻・海老虹梁（龍）

写154－13　天井

葺、１間向拝付である。平面は一室であり、床は畳敷で、天井は格天井である。格間には様々な花鳥動物が描かれていて、収穫物や霊獣も描かれている。北面は幣殿とつながっており建具はなく小壁のみであるが建具溝はある。組物は、身舎が舟肘木、向拝が出三斗である。中備は身舎が中央間正面のみ舟肘木であり、向拝が狐の嫁入の透彫の嵌込彫刻である。軒は一軒半繁垂木であり、向拝部は地垂木を打越垂木とする二軒半繁垂木である。全体的に彫刻は少ないが、それぞれの海老虹梁が竜彫の昇龍と降龍の組合せであり、向拝柱の側面懸鼻が降龍の胸部になっていて、非常に凝った造りである。全体的に素木造りで、彫刻は少ないものの、細やかな彫刻が施されており、明治前期のこの地域の建造年代の特徴をよく示している。

まとめ

本殿は棟札から、拝殿は世話人の日記より建造年代と工匠が明らかである。そのため古建築を調べる際の指標になり、工匠の系譜や建築文化の推移の解明につなげることができる。本殿は素木造で多くの部材に彫刻が施されていて、多様な題材や地紋彫が用いられている。一つ一つの彫刻は堅実であり、当時の実直な職人気質が伝わってくる。拝殿も素木造であるが、彫刻は少なく、人目につく向拝に集中させている。この時代に特徴的な細やかさがあるが、減り張りのある配置のため、自然に彫刻に目がいく。そして、海老虹梁と向拝柱側面の懸鼻の一体的な昇り龍と降り龍より、この時代の先進的な職人気質を感じることができる。江戸から明治にかけての建築文化の推移を堅実に伝えている。

（島崎重徳）

【参考文献】

『尾島町近世寺社建築調査報告書』群馬県新田郡尾島町教育委員会　平成10年

『上野国神社明細帳　16』丑木幸男編集　平成19年

『上野国神社明細帳　23』丑木幸男編集　平成19年

『甦る「聖天山本殿」と上州彫物師たちの足跡』阿部修治　令和２年（POD 版）

『日本歴史地名大系　群馬の地名』平凡社　昭和62年

158 （世良田）八坂神社（（せらだ）やさかじんじゃ）

表158－1

神社名	八坂神社	所在地	太田市世良田町1497
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　八坂神社
主祭神	素盞嗚尊（すさのおのみこと）	神事	春祭（4/15）、夏祭り「世良田祇園」（7月第4土日曜日）、秋祭（10/15）
創立・沿革	上野国新田郡園牛頭天王縁起によると、貞観18年(876)丙申に上野新田のほとり、当所に鎮め奉る。正保の頃(1644～1648)尾張国津島天王を勧請した。明治初年前は「新田天王宮」と呼ばれ牛頭天王を祀る。		
文化財指定	八坂神社の源頼義・清原・武則会議絵馬(市重文　昭和59年12月)、八坂神社の芭蕉句碑(市重文　平成3年4月)		

位置・配置（図158－1、写158－1）

太田市の西南、世良田駅から南に700mに位置する。

境内は南東面に道路、北面は水路と道路に接する。南西に駐車場、屋台庫3棟、駐車場入口北に、手水舎、鳥居と並ぶ、鳥居から北正面に社殿。西に社務所(一部に天王獅子を祭る)、北に向かって古札納所、御神木の覆屋、庫殿、神輿殿、永寿大明神、琴平社、縁結神。神輿殿には大小4台が奉納されている。北輿に上野十二社と上毛三山、出羽三山社、白蛇弁天社等が並び、北東に鳥居。東に鈴殿、額殿、南東に神楽殿と配されている。現在、鈴殿に鈴(鐘)は無い。額殿には、尾島町出身の高橋貴一が彫刻した大額がかかる。昭和34年(1959)7月7日、嵐で本殿北の杉大木が倒れ、本殿・拝殿の一部が壊れ修理をした改築記念石碑(昭和40年(1965)4月15日)がある。

図158－1　配置図

由来および沿革

上野国新田郡園牛頭天王縁起によると、貞観18年(876)丙申に上野新田のほとり、当所に鎮め奉った。

写158－1　境内全景

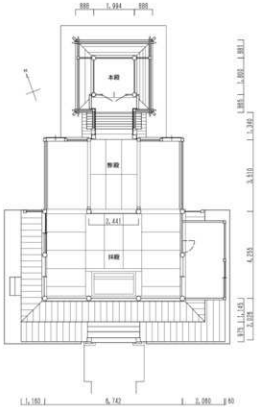

図158－2　平面図(社殿)

後醍醐天皇(1288～1339)の孫、尹長親王の御子良王の君は上野寺尾城にて誕生した。母は世良田政義の娘であった。良王君は後に尾張に移り津島の宮と称し、後追に津島天王社の神主となる。正保の頃(1644～1648)保泉氏が尾張の国津島天王の神像を遷座し勧請した。

明治初年前は「新田天王宮」と呼ばれ牛頭天王を祀る。八坂神社の祭神は素戔嗚尊で、その化身が牛頭天王である。牛頭天王の本地は薬師であることから、八坂神社の本地仏は薬師如来で別当寺は普門寺である。「上野名蹟図誌」には境内に薬師堂がある。また薬師であることから夏の疫病を防ぐ祇園祭となった。夏祭り「世良田祇園」は江戸の神田明神祭り、秩父の妙見祭りとならんで、関東三大祭りの一つとして親しまれており、屋台は1800年初頭にほぼ揃っていた。以前は夜通し屋台を巡航していたが交通事情等により、現在は一箇所に集めて華やかに行われている。

本殿(ほんでん)(図158－2、表158－2、写158－2～158－7)

建造年代は棟札より宝暦6年(1756)で、棟梁は林兵庫藤原正清(武州妻沼邑)他2名である。林兵庫

表158－2　本殿

建造年代／根拠		宝暦6年(1756)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.99m)、側面1間(1.80m)、向拝1間軒唐破風付、銅瓦葺
工	匠	[大工]棟梁 林兵庫藤原正清(武州妻沼邑)、中村丈八正道(山田郡沖之郷)、今村勘六正信(武州玉乃井村)	基礎	基壇(切石)、亀腹(人造砥出)
軸	部	[身舎]丸柱、土台、長押、頭貫　[向拝]角柱、海老虹梁	組物	[身舎]三手先　[腰組]四手先　[向拝]連三斗積上変形
中	備	[身舎]蟇股、側面・背面：嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木　[上]板支輪(彫刻)　[下]蛇腹支輪(彫刻)
妻	飾	二重虹梁大瓶束、笈形	柱間装置	[正面]板壁・扉　[側面・背面]板壁
縁・高欄・脇障子		四方縁、跳高欄、登高欄付、脇障子	床	拭板張
天	井	棹縁天井	須弥壇・扉子・宮殿	不明
塗	装	[身舎]素木、極彩色(軒支輪・笈形)、朱塗(柱・組物)、黒・金(正面扉)　[向拝]朱・黒・金(柱・海老虹梁)	飾金物等	垂木、扉、内法長押、腰長押、唄
絵	画	なし	材質	欅
彫	刻	[身舎]柱・長押・頭貫(地紋彫)。懸魚(波)、降懸魚(花)、笈形(波)、虹梁(波)、鬼毛通の痕跡、板支輪(波・花・雲)、蛇腹支輪(花)、尾垂木(獅・龍)、三手先(鳳凰・龍・象)、木鼻(獅子)、中備嵌込彫刻(龍、鶴・雲)、脇障子右(人・梅・鳥)左(人・松・雲)、階下三角部(獅子・牡丹)、階と腰組間(獅子・牡丹・獏)、腰組下段(扉・波)　[向拝]柱(地紋彫)。左海老虹梁上(鳳凰・雲)、右海老虹梁上(欠損)、海老虹梁(波)、木鼻(獅子・獏)		

写158－2　全景・側面

写158－3　背面

写158－4　向拝

写158－5　正面

写158－6　妻飾

写158－7　腰組

藤原正清は宝暦３年(1753)に他界しているが、棟札には正清との記載がある。

流造銅瓦葺、側面１間、向拝１間の本殿で棟に一対の置千木、３本の堅魚木がある。外部に数多く彫刻が配されている。左海老虹梁上には鳳凰の透彫があるが、左海老虹梁上の彫刻は欠損と推察する。妻飾笈形の波や板支輪、蛇腹支輪は極彩色で、神獣の尾垂木、中備の嵌込彫刻、腰組下段嵌込彫刻は素木である。蛇腹支輪の蛇腹の間には花の彫刻があり、組物の頭貫に鳥の彫刻が施されている。丸柱、向拝柱、頭貫、内法長押、地長押、腰長押、土台に地紋が彫られている。

幣殿（図158－２、表158－３、写158－８～158－10）

建造年代は、「神社明細帳」（明治11年編）の「幣殿間口一間二尺、奥行二間、屋根瓦葺」の記載と異なること、また簡素な造りから拝殿を下ると推察する。工匠も不明である。

表158－３　幣殿

建造年代／根拠	明治10年(1877)以降／建築様式	構造・形式	正面6.74m、側面3.51m、切妻造、妻入、銅板縦葺
工匠	不明	基礎	音石
軸部	角柱	組物	なし
中備	なし	軒	一軒大疎垂木
妻飾	なし	柱間装置	板
縁・高欄・脇障子	なし	床	[中央]畳敷　[両脇]板張
天井	[中央]板張(補強用格子)　[両脇]屋根裏表	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	杉
彫刻	なし		

写158－８　側面

写158－９　背面

写158－10　内部

表158－４　拝殿

建造年代／根拠	明治10年／棟札	構造・形式	正面３間(6.74m)、側面２間(4.25m)、入母屋造平入、向拝１間唐破風付、瓦葺(増築部屋根は銅板葺)。
工匠	[大工]棟梁 長谷川彌五平、中島亀次郎。柚取 高田半十郎。瓦師 笠原平吉。髙 茂木新三郎、西村清十郎	基礎	音石、礎石、基壇
軸部	[身舎]丸柱、長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組物	[身舎]一手先、挿肘木　[向拝]連三斗変形
中備	[身舎]なし　[向拝]なし	軒	二軒疎垂木、板支輪
妻飾	虹梁	柱間装置	[正面]部戸　[側面]板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子(板)	床	畳敷・一部板張(旧賽銭入部)
天井	格天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	素木、朱(軒の一部)、黒(格天井格子部)	飾金物等	腰長押
絵画	なし	材質	欅
彫刻	[身舎]懸魚(雲)、虹梁(唐草)、板支輪(波・花・雲)、挿肘木(獅子・象)、手挟(唐草)、海老虹梁(唐草)、木鼻(獅子・象)　[向拝]兎毛通(龍)、桁隠(雲)、水引虹梁(唐草)、海老虹梁(唐草)、手挟(唐草)、菖蒲桁(唐草)、木鼻(獅子・象)		

写158－11　正面

写158－12　向拝

写158－13　内部

写158－14　全景

正面３間、側面２間、切妻造、鋼板縦葺で本殿・拝殿に接続する。装飾や彩色は無い。

平成31年(2019)春、壁の内側に板張り、天井のたわみ補強に格子を設置した。

拝殿（はいでん）（図158－２、表158－４、写158－11～158－14）

建造年代は棟札より明治10年(1877)。工匠※は棟梁：長谷川彌五平、他５人である。

正面３間、側面２間、入母屋造平入、瓦葺、で素木造り。向拝の組物は変形した連三斗で６斗ある。虹梁や手挟は刻線彫り、板支輪の彫刻は（波・花・雲）で本殿の板支輪と同じ柄の彫刻となっている。

屋根、縁、東脇に部屋を増築（年代不明）。東脇の部屋には当初、獅子が入っていたが、現在は控室として使用している。床に賽銭入があったが、現在は板で覆われている。

外部内部に多数の額がかかる。

※工匠　棟札の現物未確認。『尾島町近世寺社建築調査報告書』の転写。村名は未記載の為、不明。

まとめ

本殿の棟梁、林兵庫藤原正清は歓喜院聖天堂のある武州妻沼邑出身である。向拝角柱は「網代文地に梅花文散らし」の地紋彫りで朱色に黒線と白色の梅の彩色であり、埼玉県妻沼の歓喜院聖天堂の奥殿(1735～1744　彫刻棟梁・石原吟八郎）の向拝柱と近い柄と彩色である。蛇腹支輪は古くから使われるが、頭貫の彫刻や海老虹梁の彫刻は建造年代の特徴がある。また、左海老虹梁上の鳳凰の透彫は緻密である。妻飾笈形の波や板支輪は極彩色の彫刻で、中備の嵌込彫刻や、腰組下段の犀と波の彫刻は素木である。

幣殿・拝殿共に素木造りである。幣殿は組物・彫刻などなく簡素な造りである。

拝殿は、海老虹梁の形状や、虹梁の唐草の刻線彫など時代をあらわしている。屋根を増築したことにより正面から見ると、軒の深い建物である。内部の多数の額中に、市重文の源頼義・清原・武則会議絵馬も見られる。

八坂神社の狛犬は、特徴から鎌倉時代後期と推測され、新田の荘歴史資料館に収蔵されている。

（伊藤美保子）

【参考文献】

『尾島町近世寺社建築調査報告書』群馬県新田郡尾島町教育委員会　平成10年
『尾島町誌　通史編　上巻・下巻』尾島町　平成５年
『上野国神社明細帳16　新田郡』群馬県文化事業振興会　平成19年

163 （上早川田）雷電神社〔（かみさがわだ）らいでんじんじゃ〕

表163－1

神社名	雷電神社	所在地	館林市上早川田町566
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人　雷電神社
主祭神	別雷神、倉稲魂命	神事	正月祭（1/1～3）、どんど焼き（1/15前後の土日）、春例大祭（5/15前後の土日）、秋例大祭（10/15前後の土日）
創立・沿革	雷電神社に関して記された史料はほとんど残されておらず、沿革は明らかとされていない。かつてこの地に落雷したためそこに雷神を祀ったのが始まりとの伝承がある。『封内経界図誌』上早川田村明細には村鎮守「雷電宮」とあり、同絵図にはその周囲に「大神宮・イナリ・念仏堂」が記されている。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図163－1、写163－1）

館林市の北部を流れる渡良瀬川の堤内に鎮座する。北に矢場川が流れ、南の堤上を東西にはしる道から下った先に境内が広がる。鳥居から北に延びた参道の先に拝殿・幣殿が南面して建つ。本社手前の石灯籠から参道が西に分かれ、本社の西に鎮座する稲荷社まで延びている。

写163－1　境内全景

由来および沿革

雷電神社に関して記された史料はほとんど残されておらず、沿革は明らかとされていない。かつてこの地に落雷したためそこに雷神を祀ったのが始まり

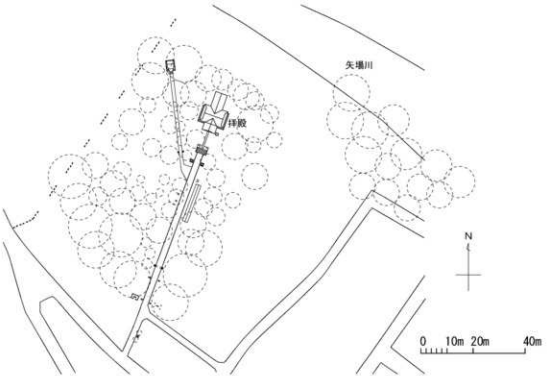

図163－1　配置図

表163－2　本殿

建造年代／根拠		18世紀中期／建築様式	構造・形式		二間社流造(0.99m)、側面1間(0.56m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風有、柿葺き
工	匠	不明	基	礎	なし
軸	部	[身舎]丸柱(室内側角)、土台、切目・内法長押、台輪　[向拝]角柱、木鼻	組	物	[身舎]出組(外部)　[向拝]連三斗変形
中	備	[身舎]墓殻　[向拝]斗組	軒		二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻	飾	妻虹梁、力鬼	柱間装置		観音開(唐戸)
縁・高欄・脇障子		三方縁、浜床有、浜縁有、脇障子(枠のみ)	床		板張
天	井	不明	須弥壇・扉子・宮殿		なし
塗	装	朱塗、黒塗、極彩色(組物・彫刻)	飾金物等		垂木先、唐破風尻、拝み
絵	画	壁嵌板に描画(中国古事)	材	質	欅
彫	刻	[身舎]木鼻(絵様)、軒支輪(波)、妻束(鬼)　[向拝]木鼻(獅子・獏)、手挟(絵様)			

写163－2　全景

写163－3　向拝獅子鼻・組物

写163－4　向拝茨垂木

写163－5　海老虹梁

写163－6　側面

写163－7　背面

との伝承がある。「封内経界図誌」上早川田村明細には村鎮守「雷電宮」とあり、同絵図にはその周囲に「大神宮・イナリ・念仏堂」が記され、寺社が集中した場所であった。大正2年(1913)9月8日に字西原の稲荷神社を合祀した。万延元年(1860)に奉納された浮世絵師北尾重光の白象図絵馬が残る。

本殿（図163－2、表163－2、写163－2～163－7）

幣殿内に安置される。正面2間（0.99m）、側面1間（0.56m）の二間社流造、柿葺きである。千鳥破風・軒唐破風を施し、1間の向拝を付す。向拝は角柱とし、身舎は全て丸柱である。丸柱は室内側を角のままにしている。軸部は足固め貫、切目長押、内法長押、頭貫で固め台輪を廻し組物を受ける。外側の組物は出組、室内側は出三斗となっている。正面に浜縁と木階5級を設け、三方に縁を廻す。高欄の痕跡がある脇障子枠のみ残す。妻束は鬼に細工さ

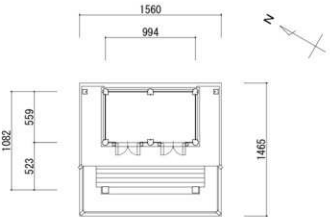

図163－2　平面図(本殿)

表163－3　幣殿

建造年代／根拠		19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.74m)、側面3間(5.98m)両下造、桟瓦葺き
工	匠	不明	基礎	コンクリート基礎の上に礎石(切石)据付
軸	部	[身舎]丸柱、切目・内法長押、台輪	組物	[身舎]外側：一手先挙付、室内：出三斗
中	備	蟇股(彫刻)一部脱落	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻	飾	なし	柱間装置	引違舞良戸
縁・高欄・脇障子		なし	床	板張り
天	井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	幣殿内に本殿置く
塗	装	素木、極彩色(彫刻)、朱塗(組物・支輪)、黒塗	飾金物等	垂木先
絵	画	なし	材質	欅
彫	刻	全柱に獅子頭、板支輪(波)、蟇股(十二支)		

写163－8　側面

写163－9　内部

れ、壁嵌め板に二十四孝を描いている。正面2間にそれぞれ両開きの唐戸を入れ、内部に二柱の神が祀られている。扉の外側に神明宮を合祀している。

幣殿（図163－3、表163－3、写163－8～163－9）

桁行3間（5.98m）、梁間1間（2.74m）で、拝殿北奥中央間からT字状に接続する両下造である。拝殿と棟高が異なるため棟木を拝殿の棟木より下に納める小屋組みとしている。身舎柱は丸柱とし、柱頭にはすべて獅子鼻を設ける。床は板張りで竿縁天井を吊り、竿を吹寄せている。北奥に本殿を安置する。奥の壁は改修されており、外側からはトタン波板が張られている。

拝殿（図163－3、表163－4、写163－10～163－12）

正面桁行3間（7.49m）、側面梁間2間（4.62m）、入母屋造で桟瓦葺である。正面には千鳥破風を設け、唐破風付の向拝を設ける。北奥中央間から幣殿に接続する。身舎柱は丸柱とし、柱頭にはすべて獅子鼻を設ける。北を除く三方に切目縁を廻し、内部は仕切りの無い一間である。床は板張りで格天井を吊る。虹梁や中備の蟇股、妻飾等を彫刻で華美に装飾している。虹梁に見られる波や梅の彫刻は浮き彫りになっており、立体的である。絵様付蟇股には十二支が彫られているが、脱落してしまっている

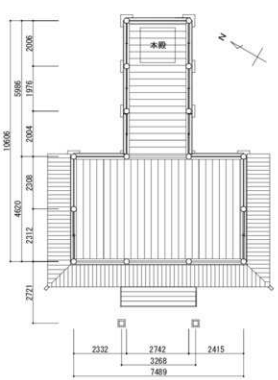

図163－3　平面図(幣殿・拝殿)

表163－4　拝殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面3間(7.49m)、側面2間(4.62m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、桟瓦葺、向拝1間、銅板葺、軒唐破風付
工匠	[絵師]北尾重光	基礎	コンクリート基礎の上に礎石(切石)据付
軸部	[身舎]丸柱、切目・内法長押、台輪　[向拝]角柱	組物	[身舎]外側：一手先拳付、室内：出三斗 [向拝]連三斗変形2段
中備	[身舎]蟇股(彫刻)一部脱落　[向拝]彫刻(龍)	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪　軒唐破風：菖蒲桁、茨垂木
妻飾	虹梁、大瓶束、懸魚(彫刻)	柱間装置	正面：部戸(格子)　側面：引違い舞良戸
縁・高欄・脇障子	三方切目縁	床	板張り
天井	格天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	素木、柿彩色(彫刻)、朱塗(組物・支輪)、黒塗	飾金物等	隅木・垂木先、破風板尻、拝み
絵画	白象図絵馬	材質	欅
彫刻	[身舎]全柱に獅子頭、板支輪(波)、蟇股(十二支)、虹梁・木鼻：絵様、懸魚(鳳凰)　[向拝]柱(寺紋彫)、水引虹梁(浮彫)、正面(龍)、木鼻(獅子、獏)、手挟(透彫-鶴)、虹梁下肘木(透彫-波)、兎毛通(飛龍)		

写163－10　全景

写163－11　向拝彫刻

写163－12　内部

蟇股がいくつか見られ全て確認することは出来ない。昭和6年(1931)に格天井改修、昭和60年(1985)に屋根改修が行われている。

まとめ

本建物は、拝殿と幣殿からなり、幣殿に本殿を安置する形式をとっている。周辺に残る史料として一番古いものは天保5年(1834)の手水鉢が残されており、木鼻の形状や発達した彫刻の細工から幣・拝殿はこの頃に建立されたものと推測される。幣殿背面の壁のみ縦板張りとなっており、小屋組の軒も背面の壁の位置より飛び出していることから、当初は幣殿の背面から接続する堂宇があった可能性が考えられる。本殿は建造年が異なるとみられ、虹梁の形状と簡素な刻線彫の絵様、木鼻に彫られた獅子、獏の特徴から拝・幣殿より遡ると考えられる。海老虹梁が柱頭に繋がり、欅材である事から18世紀中期頃に造られたと思われる。

(小島恵理子)

【参考文献】
『館林の寺社と史料』館林市史編さん委員会　令和2年
『館林市史　特別編第7巻』館林市史編さん委員会　令和3年

168　(阿左美)生品神社〔(あざみ)いくしなじんじゃ〕

表168－1

神　社　名	生品神社（いくしなじんじゃ）	所　在　地	みどり市笠懸町阿左美210
旧　社　格	村社	所有者・管理者	宗教法人　生品神社
主　祭　神	大穴牟遅命（おおなむちのみこと）、大国主命（おおくにぬしのみこと）	神　事	例大祭（4月中旬の日曜日）、歳旦祭（正月）
創立・沿革	創立についての明確な物がなく不明		
文化財指定	生品神社本殿（市重文　平成21年9月）		

位置・配置（図168－1、写168－1）

県道6号線、桐生伊勢崎線と県道78号線太田、大間々線の交差する阿左美下原交差点から南に向かって一つ目の丁字路を東へ向かった所にある。東に低い山並みと東武線に挟まれた都市化が進む地域内にある。境内入口より参道を行くと大きな木立が林立する中にはアスレチック広場があり、その先に進むと右手にある社務所を見ながら向拝の前に出る。拝殿幣殿本殿の一連の社殿の東には蚕影神社、その先に杓子稲荷が祀られている。

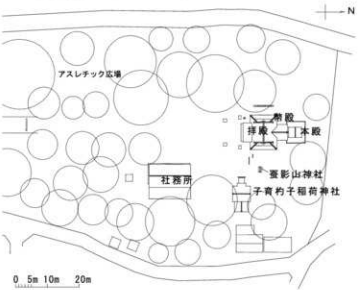

図168－1　配置図

写168－1　参道より境内

由来および沿革

新田義貞挙兵伝説地市笠懸町鹿の百品神社、太田市新田市野井に鎮座する生品神社や旧薮塚本町中原の生品神社、笠懸町阿左美の生品神社（当社）などが新田義貞挙兵伝説地として知られ、太田市富沢町にある石碑にそれらを生品三明神と記されている。また、境内に自生する、アラカシ、シラカシなど樹齢100年を超える大木の群生も市の修景美化地域指定となって保存されている。

本殿（ほんでん）（図168－2、表168－2、写168－2～168－8）

元禄7年(1694)建造と棟札にあると伝えられるが確認はできなかった。工匠は大工棟梁、田代勘右衛門とある。

明治12年(1879)同41年(1908)に大規模修理、昭和40年(1965)には台風被害を受けた部分の修理、平成18年(2006)、19年(2007)には、神楽殿を解体処理した。

構造は、正面1間、側面1間の一間社流造、当初板葺、現在は金属板（カラー鉄板）葺、向拝あり。

自然石の基壇に、軸部は身舎に丸柱、切目、腰、内法長押、小屋組は入ることが出来ず不明である。

向拝は角柱、水引、海老虹梁、蟇股、側面木鼻は象。組物は身舎が見られないため不明。向拝は出三斗、連三斗、絵様肘木、枠肘木。中備は身舎不明、向拝に彫刻蟇股があり、軒は二軒半繁、打越垂木

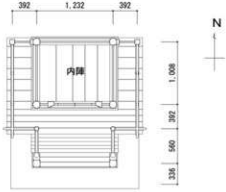

図168－2　平面図

表168－2　本殿

建造年代／根拠		元禄７年(1694)／棟札	構造・形式		一間社流造(1.23m)、側面１間(1.00m)、向拝１間、カラー鉄板葺(当初板葺)
工	匠	[大工]大工棟梁 田代勘右衛門	基	礎	自然石
軸	部	[身舎]丸柱、切目、腰、内法長押　[向拝]角柱、海老、水引虹梁、蟇股	組	物	[身舎]不明　[向拝]出三斗、連三斗、絵様肘木、枠肘木
中	備	[身舎]　[向拝]蟇股(彫刻)	軒		[身舎]二軒半繁打越垂木(飛燕垂木)
妻	飾	不明	柱間装置		[正面]桟唐戸　[側面・背面]不明
縁・高欄・脇障子		大床、浜床、登高欄、高欄、脇障子	床		板
天	井	竿縁	須弥壇・扉子・宮殿		なし
塗	装	素木、柿彩色(蟇股)	飾金物等		なし
絵	画	なし	材	質	不明
彫	刻	[向拝]蟇股、海老虹梁に錫杖彫、木鼻			

写168－2　拝殿

写168－3　全景(覆屋)

写168－4　本殿正面(幣殿より)

写168－5　本殿向拝木鼻

写168－6　本殿海老虹梁

写168－7　本殿内部

写168－8　水引虹梁　蟇股

(飛燕垂木) 妻飾も覆い壁のため確認できない。柱間装置として正面の桟唐戸は確認。大床、浜床があり、擬宝珠のついた組高欄が、登り高欄と共に三方を巡り、脇障子も付いている。天井は竿縁天井。

向拝の蟇股には塗装が見える。彫刻はその蟇股と海老虹梁には錫杖彫りが彫られている。以上建築様式から、建造年代は棟札にあるとおり17世紀末と考えられる。

まとめ

今回調査対象とされる本殿には覆壁が掛けられていて両側面と背面を確認することが出来ないため様子がわからない。ただ、正面の様子と向拝の軸組等は見ることが出来た。また棟札が確認できたため工匠は田代勘右衛門と確認できた。見ることが出来た部位が限られていたためこれ以上の詳細が述べられないがその棟札に元禄７年(1694)とあることからその時代の造り様を残す建築として保存したいものである。

保存のやり方として見ることができるような覆いの掛け方を研究したい。

（福田峰雄）

【参考文献】
『桐生伝健修習の会』報告書

173　金山神社〔かなやまじんじゃ〕

表173－1

神社名	金山神社	所在地	みとり市笠懸町西鹿田839
旧社格	旧村社	所有者・管理者	宗教法人　金山神社
主祭神	金山彦命、金山姫命	神事	元旦（1／1）、新入学児童交通安全礼順祭（4／）、春季例大祭（4／17）、秋季例大祭（10/17）、勤労感謝祭(11/23)
創立・沿革	境内に末社が4社あり、建立年代は判明している（「上野国神社明細帳16」）。琴平宮：文化6年(1809)8月建立。秋葉神社：文政6年(1823)11月建立。疱瘡神社：元禄6年(1693)12月建立。山神神社：天保9年(1838)3月		
文化財指定	金山神社の俳額(市重文　平成11年12月岩宿博物館収蔵)		

位置・配置（図173－1、写173－1）

みとり市の西部、上毛電鉄新川駅南2㎞県道境木島大間々間線から入った所に位置する。

駐車場のある低地と階段を上がった所に社殿があり、その西側に社務所が配置されている。社殿は拝殿、幣殿的な利用をしている北側の部屋（渡廊下）、その先の本殿覆屋から構成されている。

かつては現在より南西の字金山前にあったが、明治期に火災に遭い現在地に移ったとも言われている。

写173－1　境内全景

由来および沿革

俳額（市指定重要文化財）の奉納が天保14年（1843）であり、後述する建築様式からこの時には本殿はあったことになる。『笠懸村誌』では幕末頃と記述されている。

境内に末社が4社あり、末社の建立年代は判明している（「上野国神社明細帳16」）。琴平宮は、文化6年(1809)8月建立、秋葉神社は、文政6年(1823)11月建立。疱瘡神社は、元禄6年(1693)12月建立、山神神社は、天保9年(1838)3月建立である。

本殿（図173－2、表173－2、写173－2～173－7）

建造年代は、年代指標に欠けるが、縦横式の妻飾り、簡素な舟肘木から、江戸末期と推定される。

基礎はなく、土台の上に組まれている。軸部は向

図173－1　配置図

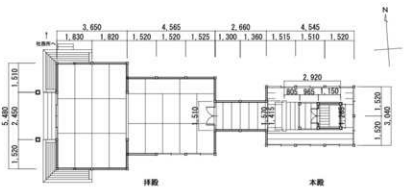

図173－2　平面図（社殿）

表173－2　本殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.26m)、側面(1.15m)、向拝1間、板葺、見世棚
工　匠	不明	基　礎	基壇、基礎なし、土台あり、礎盤なし
軸　部	[向拝]角柱　[身舎]角柱、切目・腰・内法長押	組　物	[向拝]なし　[身舎]なし　[舟肘木]あり
中　備	[向拝]なし　[身舎]なし	軒	一軒疎垂木
妻　飾	拝梅鉢懸魚	柱間装置	[正面]両開板戸、絵模様植物絵彩色　[側背面]嵌板
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天　井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗　装	素木(正面扉)	飾金物等	なし
絵　画	扉絵、絵師不明	材　質	欅、桧、杉
彫　刻	[向拝]なし　[身舎]なし		

写173－2　全景

写173－3　側面

写173－4　見世棚造

写173－5　梅鉢懸魚

写173－6　舟肘木、縦横式の妻飾り

写173－7　開戸

拝に角柱、切目・腰・内法長押が付く。組物、中備なし。軒は一軒疎垂木で妻飾は拝み位置に梅鉢懸魚、柱間装置は正面中央に両開板戸絵模様彩色であり、側面背面は嵌板である。大床一方縁で階高欄なし。拭板張で竿縁天井、正面扉絵の絵師は不明である。

金山神社本殿は「見世棚造」というもので、飾り気のない簡素な建築様式を伝えるものである。

まとめ

本殿は、「見世棚造」の簡素なつくりである。本来の「見世棚造」にはない階が付くのが特徴である。開戸に唯一の花の絵画が施されている。

天保14年(1843)奉納の俳額本体は、縦80㎝、横2m30㎝である。何れも装飾は無く、素木の素朴なものである。松尾芭蕉と推定される肖像画が描かれた珍しい俳額である。村々を超えた文化的な交流もみえてくる。

金山神社は、地域の人々のよりどころであったことがうかがえる貴重な文化遺産である。

（西村良子）

【参考文献】

『笠懸村誌（下巻）』笠懸村誌編纂室　昭和62年
『笠懸村誌（上巻）』笠懸村誌編纂室　昭和60年
『笠懸村誌（別巻三）』笠懸村誌編纂室　平成元年
『笠懸村誌（別巻二）』笠懸村誌編纂室　昭和58年
『上野国郡誌15』新田郡　群馬県文化事業振興会　昭和61年
『上野国神社明細帳16』群馬県文化事業振興会　平成19年

178　嵯峨宮〔さがぐう〕

表178－1

神社名	嵯峨宮	所在地	みどり市大間々町小平348
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人　嵯峨宮
主祭神	嵯峨天皇	神事	秋季大祭(10月中旬の日曜日)、大麻頒布及び埋蔵祈願式(12/15)
創立・沿革	口伝によると創立は嘉暦年間(1326～1329)の頃。棟札は元禄10年(1697)と、寛保３年(1743)２枚あり別当正福寺に保管されている。明治時代になり覆屋をかけるために本殿を南へ移動(現在地)。その後明治３年(1870)に覆屋の中仕切り部分より南を火災で焼失。その部分を明治５年(1872)に寄付を募り再建。絵馬が内部に、文書が町誌に残る。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図178－１、写178－１）

当社は、小平川沿い右岸に位置する。県道小平塩原線と小平川をはさんだ反対側には小平の里がある。朱塗りの木鳥居が県道脇にあり石造物が並んでいる。石段を上り、山へ向かい緩やかな坂の参道を90m進むと、急な石段下に至る。この上に覆屋に入った本堂が中腹のわずかな平地に南を向いて立っている。覆屋前の石段を上がり切ると両脇には大杉が２本立つ。敷地北側は覆屋より３mあたりで高さ４mほどの崖となり、山頂へ連なっていく。

図178－１　配置図

写178－１　参道入口・境内全景

由来および沿革

口伝によると創立は嘉暦年間(1326～1329)の頃。『山田郡誌』によれば、小平創立と共にある神社とされている。村人が祈願書を埋蔵しその上に神社を建立したという。この古事を現在の嵯峨宮世話人会が地域に呼びかけ再現、12月に埋蔵祈願祭を行っている。

本殿（図178－２、表178－２、写178－２～178－６）

一間社流造、基礎は自然石切石。軸部は身舎を丸柱とし、持送により四方の大床を支える。地覆・内法・腰長押に地紋彫。彫刻は、脇障子に笹と鳥、手挟は籠彫、軒支輪など、中備を蟇股とし、４面に四季の花と鳥の高肉透彫の彫刻を施し、壁面にはない。向拝は角柱几帳面で正面に地紋彫を施している。向拝柱頭の象頭、獅子頭には釘止めされた銅板の目が打たれ、全体的に丸みを帯び優しい印象である。中備は龍の彫刻である。向拝水引虹梁には絵様が波のように描かれ、海老虹梁は段違いに付けられている。これらは多くの彫刻を施すようになる前段

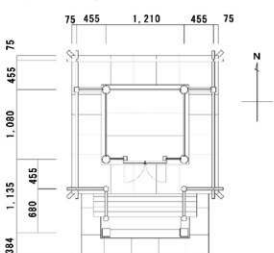

図178－２　平面図(本殿)

表178－2　本殿

建造年代／根拠		寛保３年(1743)／棟札	構造・形式		一間社流造(1.20m)、側面１間(1.08m)、向拝１間、柿葺
工	匠	[大工]武州幡羅郡長井庄妻沼町工　林兵庫藤原正清、内田清八、四月朔日条八、大塚淀八、江原磯八、林八十八	基	礎	コンクリート土間、亀腹石
軸	部	[身舎]丸柱、長押(床・内法)　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組	物	[身舎]二手先出組(尾垂木付)、腰隅角部に持送(絵様)　[向拝]二手先
中	備	[身舎]幕股　[向拝]彫刻	軒		二軒繁垂木
妻	飾	二重虹梁大瓶束、笈型付、桁隠、懸魚	柱間装置		桟唐戸両開
縁・高欄・脇障子		[大床]四方　[浜床]三方　[高欄]跳・登・擬宝珠高欄　[脇障子]彫刻障子	床		[身舎]拭板張　[大床]切目板張
天	井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿		なし
塗	装	素木、朱(妻虹梁・脇障子)、黒(垂木)	飾金物等		なし
絵	画	なし	材	質	柳、桧
彫	刻	[向拝]手挟(牡丹籠彫)、水引虹梁(絵様)、中備(龍彫刻)、木鼻向拝正面(獅子(目に銅板))、側面(象(目に銅板))、海老虹梁(絵様)、柱(几帳面、地紋彫)　[身舎]蟇股(四面四季の花と鳥の彫刻)、脇障子(左、笹・右、笹と鳥)、長押(地紋彫)、柱間装置(植物)、持送(絵様)			

写178－2　本殿

写178－3　背面・側面

写178－4　向拝水引虹梁

写178－5　海老虹梁・手挟

写178－6　向拝彫刻

階に位置すると考えられる。

棟札は元禄10年(1697)と、寛保３年(1743)の２枚あり別当正福寺に保管されている。本殿は後者棟札より林兵庫正清の手により再建されている。明治に入り覆屋をかけるため本殿を南へ移動。その後覆屋中仕切より南を明治３年(1870)の火災で焼失、明治５年(1872)に寄付を募り焼失部を再建した絵馬が覆屋内に、「拝殿庵寄附連名記」が『大間々町誌「基礎資料XI」大間々の社寺』に残されている。

まとめ

小平の旧村社として位置し、別当正福寺と共に小平地区の歴史を語るには重要な神社である。建造年代は再建棟札より寛保３年(1743)とした。その棟札には彫刻師の名は記載されていなかったが、山を越えたところは花輪地区であること、大工との関係から、彫刻は石原吟八郎一門ではないかと推測する。現在は嵯峨宮世話人会により運営され、地元の人々に愛され大切にされている。

（久保田眞理子）

【参考文献】
『大間々町誌別巻８　大間々町の建造物』大間々町誌刊行委員会　平成５年
『大間々町誌「基礎資料XI」大間々の社寺』大間々町誌刊行委員会　平成９年
『山田郡誌』山田郡教育會　昭和14年

186 （小夜戸）稲荷神社（（さやど）いなりじんじゃ）

表186－1

神社名	稲荷神社	所在地	みどり市東町小夜戸961
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人　稲荷神社
主祭神	宇迦之御魂命	神事	元日祭、初午（立春過ぎの初午頃の日曜日）、八坂祭（夏）、おくんち（秋祭、9／9頃）
創立・沿革	同所関口正雄家保管の文書により、宝暦８年(1758)正月二十一日、京都伏見稲荷大本山より「正一位稲荷大明神安鎮三事」と裁可文書		
文化財指定	稲荷神社(市重文　昭和58年３月)		

位置・配置（図186－１、写186－１）

みどり市大間々町中心を走る国道122号線を足尾方面へ、わたらせ渓谷鉄道中野駅の東、渡良瀬川の対岸の山際に鎮座する。境内は、三方を道に接している。南に正一稲荷大明神の額を掲げた石鳥居、その脇に対の庚申塔、正面に本殿覆堂がある。

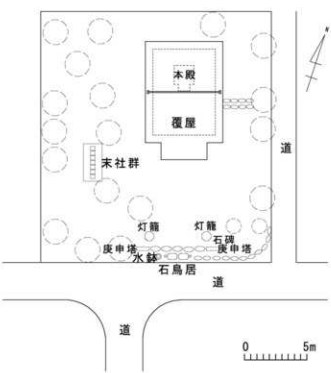

図186－１　配置図

写186－１　境内全景

由来および沿革

同所関口家保管の文書により、宝暦８年(1758)正月21日、京都伏見稲荷本宮「宮司羽倉摂津守宿祢信郷」より上州小夜戸村関口新左衛門宛の「正一位稲荷大明神安鎮之事」と裁可文書がある。

本殿（図186－２、表186－２、写186－２～186－７）

正面１間、側面１間、一間社流造、軒唐破風千鳥破風付、柿葺になっている。

社殿は、覆堂で保護されており、ほぼ建造当初の素晴らしい彫刻が現存する。覆堂は、大正時代に覆屋を造営（拝殿内礼による）、社殿の状態から大正以前から覆屋があった可能性がある。

棟札がなく、大工、彫刻師も不明であるが、社殿

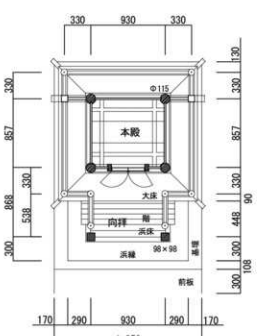

図186－２　平面図(社殿)

表186－2　本殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	一間社流造(0.93m)、側面1間(0.86m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風、柿葺
工匠	不明	基礎	自然石、基壇2段
軸部	[身舎]円柱、地長押、内法長押、頭貫　[向拝]方柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[身舎]三手先彫刻鼻付　[腰組]三手先　[向拝]変形三連三斗、実肘木
中備	[身舎]彫刻　[腰組]彫刻、馬彫刻、蟇股　[向拝]飛龍の彫刻	軒	二軒繁垂木
妻飾	一手先二重虹梁大瓶束笈形付金箔、兎毛通	柱間装置	桟唐戸
縁・高欄・脇障子	擬宝珠付き登り高欄、刎ね高欄　彫刻脇障子	床	拭板張り
天井	格天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	朱塗、檜彩色(彫刻)、黒塗(垂木、組物)、金箔(妻飾、笈形)	飾金物等	芳金物、丁番、長押端部、柱脚、垂木小口破風板端部
絵画	なし	材質	不明
彫刻	[身舎]虹梁(絵様)、頭貫木鼻(獅子)、胴羽目板、持送彫刻、腰羽目板、脇障子　[向拝]水引虹梁、海老虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子、獏)、手挟(牡丹籠彫)、兎毛通(鳳凰)		

写186－2　覆堂(拝殿)

写186－3　本殿

写186－4　向拝、虹梁

写186－5　胴嵌め彫刻

写186－6　彫刻

写186－7　柱彫刻

内の一部に嵌め込まれた彫刻の裏面に墨書があり、寛政3年(1791)と記されていることから、建造年(18世紀後期／建築様式)と思われる。

社殿全体が彫刻されている神社建築は少なく、美術工芸的にも評価が高いとされている。渡良瀬川上流部の黒川谷と呼ばれる地域は、寛政年間に、旧花輪村（小夜戸地域）を中心に様々な多くの優れた彫刻師を輩出とあり、群馬県内外の寺社にすぐれた彫刻を残していることから、この社殿彫刻も、こうした彫刻師達が係わったと推測される。

まとめ

（小夜戸）稲荷神社は、群馬県内外の神社仏閣建築においても珍しく、本殿全体が彫刻を施されている神社である。地紋彫という柱、梁の木面に彫る幾何学的紋様が沢山彫られている、その地紋彫の種類が数十種類ある。彫刻については、渡良瀬川上流部に黒川谷と呼ばれる地域があり、寛政年間に、旧花輪村（小夜戸地域）を中心に様々な多くの優れた彫刻師を輩出とあり、この社殿彫刻も、こうした彫刻師集団が係わったと推測される。歴史的にも重要な神社と思われる。

（みどり市教育委員会文化財課参考・引用）

（野口益一）

【参考文献】
『勢多郡東村誌通史編』勢多郡東村誌編纂室　平成10年

187 （板倉）雷電神社〔（いたくら）らいでんじんじゃ〕

表187－1

神社名	雷電神社	所在地	邑楽郡板倉町板倉2334
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　雷電神社
主祭神	火雷大神、大雷大神、別雷大神	祭事	新春初祈祷（1／1より）、館林・七福神めぐり（1／3～31）、節分祭（2／3）、雷電大祭（5／1～5）、名越大祓（6／第4日曜）、聖徳太子御尊像拝観／弁財天美卵奉献（7／第2日曜）、七五三詣(11/15)、新嘗祭(11/23)
創立・沿革	社伝によると聖徳太子の開基と称し、延暦20年(801)、征夷大将軍坂上田村麻呂が桓武天皇の詔を奉じ社殿を造営したと伝えられる。室町時代天文16年(1547)佐貫庄の飯野城主篠崎三河守が全神殿を造替える。ついで長尾景長、同新五郎顕長の父子が元亀４年(1573)に修理を始め、８月25日に遷宮したという。江戸時代徳川氏の加護が加えられ、延宝２年(1674)徳川綱吉館林領主時代に本殿、拝殿、鳥居等を修復し、その後も元禄11年(1698)、享保15年(1730)に修理が行われた。現在の社殿は拝殿が文政２年(1819)、本殿・幣殿は天保６年(1835)の再建である。		
文化財指定	雷電神社末社八幡宮稲荷神社社殿(国重文　明治41年８月)、雷電神社社殿(本殿・幣殿・拝殿・奥宮)(県重文　昭和59年12月)、雷電神社棟札(町重文　昭和55年４月)、高瀬舟絵馬(町重文　平成６年12月)		

位置・配置（図187－１、写187－１）

群馬県の南東端邑楽郡板倉町にある雷電神社の総本宮である。北に栃木、東に茨城、南に埼玉と四県の交わる利根川流域の平坦地にあり、特に当社付近は低地で、江戸時代にはしばしば利根川の氾濫により水害を蒙った所である。昔当地は伊奈良の里（沼は伊奈良の沼）と称したが、次第に転化して板倉村と称するに至ったといわれ、境内地の西にある「雷電沼」は伊奈良沼の名残である。境内地は、南方に国道354号が東西へはしり、町中央部にある板倉中央公園に隣接している。南から参道が延び、小高くなった境内の手前に鳥居が建つ。石段を上り、正面に本社が南面して建っている。本社の西から後方に進み、西北角に末社の八幡宮稲荷神社が建つ。本社の裏に奥宮が建ち、東と西に神馬を対に配している。

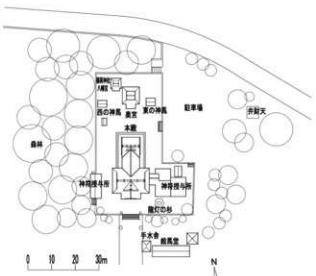

図187－１　配置図

写187－１　境内全景

由来および沿革

社伝によると聖徳太子の開基と称し、延暦20年(801)、征夷大将軍坂上田村麻呂が桓武天皇の詔を奉じ社殿を造営したと伝えられる。室町時代天文16年(1547)佐貫庄の赤井氏旗下、飯野城主篠崎三河守が全神殿を造替え、翌年９月に遷宮を行った。ついで長尾景長、同新五郎顕長の父子が元亀４年(1573)３月14日より修理を始め、８月25日に遷宮したという。江戸時代には徳川氏の加護が加えられ、延宝２年(1674)徳川綱吉が館林領主時代に本殿、拝殿、鳥居等を修復し、その後も元禄11年(1698)修復料を賜り、享保15年(1730)本社を修理したという。現在の社殿は拝殿が文政２年(1819)、本殿は天保６年(1835)の再建である。明治12年(1879)本殿・拝殿・幣殿の屋根銅板を葺替。昭和35年(1960)末社八幡宮稲荷神社社殿の保存修理工事が行われた。

本殿（図187－２、表187－２、写187－２～187－７）

桁行２間（3.46m）、梁間２間（2.96m）、向拝１間の流造。千鳥破風付で瓦棒銅板葺。前面を幣殿に接続する。身舎は丸柱、向拝は角柱で柱頭全てに獅子頭を付す。亀腹石を廻し地覆と地長押で固め、軸部に多種の地紋彫を施す。腰組は彫刻持送りとし、獅子拳鼻三手先を付す。束の間も彫刻を嵌める。身舎の組物は三手先で尾垂木は霊獣とする。向拝組物も三手先で拳鼻を鳳凰とし透彫の手挟を入れ、柱頭を浮彫の海老虹梁で身舎と繋ぐ。軒は二軒繁垂木、向拝は垂木を打越す。軒支輪は２段とし、下は吹寄せ菊花入、上は彫刻板支輪、中備も彫刻とする。妻は虹梁の上に出組斗栱をのせ二重虹梁とし、彫刻板支輪、重雲懸魚で飾る。正面、側面に両開戸を入れ、背面、向拝の間は板壁とし浦島太郎などの物語を彫り嵌込む。側面、背面に切目縁を廻し正面は浜

表187－２　本殿

建造年代／根拠	天保６年(1835)／棟札	構造・形式	二間社流造(3.46m)、側面２間(2.96m)、千鳥破風付、向拝１間、瓦棒銅板葺
工匠	[大工]三村和泉守　藤原春友(治朝)　[彫工]彫物師　石原常八(正信)	基礎	地覆石、亀腹石
軸部	[身舎]丸柱、地覆、地長押、切目長押、腰長押、内法長押、頭貫　[向拝]角柱、身舎：丸柱、各獅子頭付	組物	[身舎]腰組：彫刻持送り、三手先、獅子拳鼻付、柱上：三手先、尾垂木(霊獣)　[向拝]海老虹梁、三手先鳳凰拳鼻付
中備	[身舎]彫刻　[向拝]彫刻	軒	二軒繁垂木　向拝：打越垂木　軒支輪(板支輪：彫刻)
妻飾	出組斗栱、二重虹梁、板彫刻支輪、重雲懸魚、破風板	柱間装置	[正面、側面]両開桟唐戸　背面、向拝の間：板壁(彫刻嵌込)
縁・高欄・脇障子	四方切目縁。浜床、浜縁有。脇障子(透彫刻)、登高欄、平高欄、擬宝珠親柱(平桁、架木、地覆、斗束)	床	拭板張
天井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	不明
塗装	[軸部]素木　[垂木等屋根材]漆　[彫刻]極彩色	飾金物等	棟飾、破風板、屋根材、軸部等多数
絵画	天井絵	材質	欅
彫刻	腰持送(龍、波、亀、鯉)、腰組木鼻(獅子)、蟇・獅子頭、尾垂木(霊獣)、蟇股(鳥類)、手挟(鳳凰)、支輪板(菊)、板支輪(菊水)、脇障子・腰羽目板・胴羽目板(唐子、古事、雲水、動植物)。(地紋彫)頭貫に菱菊江に花、雲文入。外階段東に紗綾形文、地長押に菱形算崩、脇障子笠木に麻の葉文		

写187－２　全景

写187－３　背面

写187－４　背面

写187－５　背面：胴羽目彫刻

写187－６　腰組

写187－７　腰組持ち送り龍

縁を構え、木階を７級設けている。登高欄、平高欄、擬宝珠親柱（平桁、架木、地覆、斗束）透彫脇障子を付す。内部は内陣・外陣共２間構え、床は拭板張。格天井とし外陣は天井絵を入れる。天保６年（1835）の棟札と天保７年（1836）５月と記された野地板墨書に、大工：三村和泉守　藤原春友（治朝）、彫物師：石原常八正信とあり、建造年、工匠が判明している。

拝殿（図187－２、表187－３、写187－８～187－10）

棟札から文政２年（1819）の建造、工匠は本殿と同一である。桁行３間（11.49m）、梁間３間（6.70m）、入母屋造、千鳥破風付。正面に１間の向拝を付す。屋根は瓦棒銅板葺で向拝は唐破風付である。背面を幣殿に接続、再建当初は桟瓦葺で幣殿は無く独立していた。自然石に丸柱を建て長押、頭貫で固める。台輪の上に拳鼻の一手先組物をのせ柱頭全てに獅子頭を付す。向拝は角柱で地紋彫を施し海老虹梁で繋ぐ。木鼻は獅子、獏とし、出三斗で透彫の手挟を受ける。身舎中備に十二支を彫刻した蟇股を配し、向拝は浮彫の水引虹梁に龍の彫刻を嵌める。軒は二軒繁垂木で彫刻板支輪を廻す。向拝は垂木打越、菖蒲桁を入れ茨垂木を配す。妻を三斗組、虹梁、太瓶束、笈型で飾る。正面に両開戸、蔀戸を釣込、東西に引違戸を入れる。正面に木階３級を設け、四方に切目縁を廻し、登高欄、平高欄、擬宝珠親柱、脇障子を付す。内部の仕切りは無く全面を畳敷きとしている。丸柱を配し繁ぎ虹梁にて分け、前１間を外外陣、後２間を外陣としそれぞれ格天井を吊る。鏡板は北尾重光の天井画である。

表187－３　拝殿

建造年代／根拠	文政２年(1819)／棟札	構造・形式	正面３間(11.49m)、側面３間(6.70m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝１間軒唐破風付、瓦棒銅板葺
工匠	[大工]大棟梁　三村和泉守　藤原春友(治朝) [彫工]彫物師　石原常八(正信)	基礎	自然石
軸部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押、頭貫、台輪、各柱獅子頭付　[向拝]角柱、獏、獅子頭付、海老虹梁、手挟	組物	[身舎]一手先拳鼻付　[向拝]出三斗変形
中備	[身舎]蟇股(彫刻付)　[向拝]彫刻(龍)	軒	[身舎]二軒繁棰　[向拝]二軒繁棰、菖蒲桁、茨棰、打越棰
妻飾	[身舎]破風、三斗組、虹梁、太瓶束、笈型、錺付鏑懸魚　[向拝]二重虹梁、彫刻、懸魚　[千鳥破風]三斗組、虹梁、太瓶束、笈型、鏑懸魚錺付	柱間装置	[東側面３間]引違戸　[西側面前端間]引違板戸　[他の間]板壁　[間仕切、正面中央間]三ツ折桟唐戸両開　[正面両脇間]蔀戸釣込
縁・高欄・脇障子	四方切目縁。脇障子有。登高欄、平高欄、擬宝珠親柱(平桁、架木、地覆、斗束)	床	畳
天井	[内部]格天井、板支輪(彫刻)　[外部]軒板支輪(彫刻)	須弥壇・扉子・宮殿	扉子有(聖徳太子)
塗装	[軸部]素木　[垂木等屋根材]漆　[彫刻]極彩色	飾金物等	棟飾、破風板、屋根材、軸部等多数
絵画	天井画　絵馬(渓斎　北尾重光)	材質	欅
彫刻	獏、獅子頭、龍、手挟(牡丹)、兎毛通(鳳凰)、蟇股(十二支、植物)、板支輪(菊水、雲水)、向拝水引虹梁(松浮き彫)、軒唐破風妻飾(松と鶴)、虹梁、拳鼻(刻線彫)、向拝柱(寺紋彫(紗綾形文))		

写187－８　正面

写187－９　向拝海老虹梁

写187－10　内部

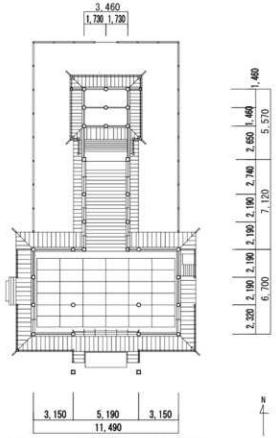

図187－2　平面図（本殿・幣殿・拝殿）

幣殿（図187－2、表187－4、写187－11～187－13）

天保6年(1835)の建造（棟札より）。桁行3間(7.12m)、梁間1間（3.46m）、両下造で、屋根を瓦棒銅板葺とする。前を拝殿、後を本殿に頭貫を湾曲させ接続している。切石に粽付丸柱を建て、柱頭に牡丹花彫刻付す。軸部には地紋彫を施す。拳鼻付一手先組物に彫刻板支輪を組込み、丸桁を受け軒を支える。二軒繁垂木の本殿側は湾曲させた丸桁に合わせ反らせる。両側に切目縁を設け、縁束に指肘木にて拳鼻付出三斗組を付している。内部は拭板張の1間で格天井を吊る。両側面に硝子入引違格子窓を入れる。

奥宮（図187－3、表187－5、写187－14～187－16）

桁行3間（3.64m）、梁間2間（3.64m）、入母屋造で正面に1間の向拝と、1間の後陣を付す。屋根は瓦棒銅板葺である。切石に円柱を建て、正面を虹梁、側面・背面を長押、頭貫で固める。台輪に拳鼻付二手先組物をのせ柱頭全てに獅子頭を付す。向拝は角柱で地紋彫を施し海老虹梁で繋ぐ。木鼻は獅子、獏とし、拳鼻付の二段連三斗で透彫の手挟を受ける。身舎中備に彫刻を配し、向拝は浮彫の水引虹

表187－4　幣殿

建造年代／根拠		天保6年(1835)／棟札	構造・形式	正面1間(3.46m)、側面3間(7.12m)、両下造、瓦棒銅板葺
工	匠	[大工]大棟梁　三村和泉守　藤原春友(治朝) [彫工]彫物師　石原常八(正信)	基礎	自然石(切石)
軸	部	丸柱、上部粽付。柱頭牡丹花彫刻付。切目長押、腰長押、頭貫、内法長押、台輪。	組物	一手先拳鼻付
中	備	なし	軒	二軒繁垂木
妻	飾	なし	柱間装置	両側全間窓、引違格子窓(硝子入)
縁・高欄・脇障子		両側に切目縁。縁束に指肘木、出三斗組拳鼻付	床	拭板張
天	井	格天井　[内・外部共]板支輪(彫刻)	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗	装	[軸部]素木　[垂木等屋根材]漆　[彫刻]極彩色	飾金物等	各長押(八双)、垂木先
絵	画	なし	材質	欅
彫	刻	柱頭(牡丹)、板支輪(鶴)(地紋彫)、柱に屈輪、切目長押に菱形算崩、腰長押に稲妻菱、内法長押に四ツ目菱、頭貫に菱蛸江に花、雲文入		

写187－11　側面：拝殿つぎ部

写187－12　側面：本殿つぎ部

写187－13　柱頭彫刻

梁に彫刻を嵌める。軒は二軒繁垂木で彫刻板支輪と透彫彫刻を２段で廻す。妻飾りは三斗組虹梁、蟇付二重雲形懸魚。正面と側面１間に戸を設け、他は横板壁とする。西側面にのみ透彫の彫刻を嵌める。四方に切目縁を廻し、正面に木階２級設ける。内部は拭板張、棹縁天井とする。中央間に虹梁、後陣に壇を設け、御神体を安置す。棟木・垂木の墨書より慶応４年(1868)４月建立、大工は三村正秀である。

表187－5　奥宮

建造年代／根拠		慶応４年(1868)４月／棟木・垂木の墨書	構造・形式	三間社入母屋造(3.64m)、側面２間(3.64m)、平入、向拝一間、後陣一間付、瓦棒銅板葺
工	匠	[大工]三村吉左衛門正常後裔　三村正秀	基礎	切石
軸	部	[身舎]丸柱　[獅子頭付向拝]角柱　[外部]切目長押　[側面・背面]腰・内法長押、頭貫、台輪　[内部]内法長押、頭貫、台輪　[正面３間]虹梁	組物	[身舎]二手先挿肘木　[向拝]連三斗変形二段挿肘木付
中備		[身舎]蟇股(彫刻)　[向拝]立体彫	軒	[身舎]二軒繁垂木　[向拝]二軒繁垂木、打越垂木
妻飾		三斗組虹梁、二重雲形懸魚蟇付	柱間装置	[正面(３間共)]上部吹抜格子戸、下部竪舞良戸　[側面]引違舞良戸、横板　[背面]横板
縁・高欄・脇障子		四方切目縁	床	拭板張
天井		棹縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	不明
塗装		素木	飾金物等	なし
絵画		なし	材質	欅
彫刻		柱寺紋彫、水引虹梁(浮彫)、向拝中備立体彫(龍、鳳凰、男女人物像)、獅・獅子頭、手挟(松)、虹梁下肘木(波・亀)、胴羽目彫刻(古事)、蟇股(鳥類)、板支輪(波・植物・鳥類)、挙鼻(刻線彫)		

写187－14　正面

写187－15　向拝獅子鼻

写187－16　側面胴羽目彫刻

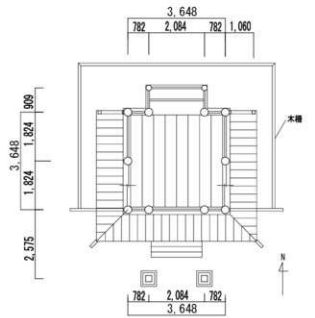

図187－3　平面図(奥宮社殿)

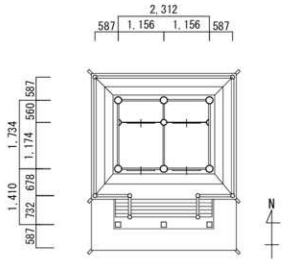

図187－4　平面図(末社八幡宮)

表187－6　末社八幡宮稲荷神社社殿

建造年代／根拠		天文16年(1547)／棟札	構造・形式		二間社入母屋造(2.31m)、側面1間(1.73m)、平入、向拝2間、銅板葺
工	匠	[大工]　飯嶋藤左衛門	基	礎	自然石
軸	部	[身舎]丸柱　[向拝]角柱、地覆、切目長押、内法長押、頭貫	組	物	[身舎]一手先　正面虹梁・背面拳鼻付　[向拝]出三斗変形　[繰束]持送実肘木、斗栱
中	備	蟇股(彫刻)	軒		[身舎]二軒繁垂木　[向拝]二軒繁垂木、打越垂木
妻	飾	蕪懸魚、豕叉首	柱間装置		[正面]両開板戸　[側面・背面]横板嵌
縁・高欄・脇障子		四方縁、浜床、浜縁　登高欄、平高欄、擬宝珠親柱(平桁、架木、地覆、斗束)	床		薄板二重張
天	井	不明	須弥壇・扉子・宮殿		不明
塗	装	(当初：榧彩色)後補材：松煙、紅柄、光明丹、黄土、胡粉	飾金物等		釘隠、扉廻
絵	画	なし	材	質	(当初材：不明)　後補材：台檜、桜、欅
彫	刻	蟇股(透彫)、木鼻・拳鼻(刻線彫)、海老虹梁(蝋杖彫)			

写187－17　正面

写187－18　側面

写187－19　向拝

末社八幡宮稲荷神社社殿(まっしゃはちまんぐういなりじんじゃしゃでん)(図187－4、表187－6、写187－17～187－19)

桁行2間(2.31m)、梁間1間(1.73m)、二間社入母屋造である。屋根は銅板葺で、2間の向拝を葺下している。自然石に丸柱を建て長押、頭貫で固める。組物は一手先で正面はゆるく湾曲した虹梁として延び、側面・背面は拳鼻を付す。向拝は角柱で出三ツ斗組をのせ水引虹梁を架ける。中備は肩の張った蟇股で薄い透彫の彫刻が施されている。軒は二軒繁垂木で向拝は打越垂木である。妻に豕叉首を入れ、蕪懸魚で飾る。正面は両開板戸、側面・背面は横板嵌である。四方にくれ縁を廻し正面は浜床、浜縁を構え、木階を5級設けている。向かって右が八幡宮、左が稲荷神社で、板壁で仕切って分離し、各々内陣と外陣に分かれている。棟札写しから天文16年(1547)建立。大工は飯嶋藤左衛門である。

まとめ

聖徳太子の開基と伝わる、雷電神社の総本宮で郷土の歴史を象徴する神社である。

雷の多い群馬にあり、古くから人々に崇敬されてきたと思われ、その時々の権力者の加護を受けてきた史実に表れている。建造物も崇敬に値する造りで、群馬県最古の神社建築である「末社八幡宮稲荷神社社殿」は室町時代の控え目ではあるが繊細で華やかな様相を残し、本・拝殿に名を連ねる、三村和泉守　藤原春友(治朝)、石原常八は数多くの素晴らしい作品を残した工匠で、建物随所に施された彫刻は目を見張るものである。当神社を含む、利根川・渡瀬川合流地域の水場景観が評価され、重要文化的景観として国から選定されている。今もなお人々の信仰の象徴となっており、後世に受け継がれる神社である。

(小島恵理子)

【参考文献】
『雷電神社社殿修理工事報告書』平成2年
『雷電神社奥宮社殿修理工事報告書』平成6年
『雷電神社末社八幡宮稲荷神社社殿修理工事報告書』昭和35年

188　高鳥神社〔たかとりじんじゃ〕

表188－1

神社名	高鳥神社	所在地	邑楽郡板倉町大字大高嶋1665
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　高鳥神社
主祭神	菅原道真公	祭事	元旦祭（１／１）、節分祭（２／３）、例大祭（２/25現在２月最終日曜日）、夏越の大祓（７月第３又は第４土日）、新嘗祭（10月第４土曜日）、他 文徳精励祈願、合格感謝奉告祭、七五三詣
創立・沿革	創建は不詳であるが同神社の縁起によれば、延喜元年(901)菅原道真が九州大宰府に左遷となったとき、臣で出羽国の人岩下勝之丞が、大宰府への随行を許されず、止むなく道真の自画像を賜り帰国した。のちに文暦元年春、後裔の岩下勝之進がその画像を携えて京都北野天満宮に参詣の帰途に投宿し鳥が飛来してやまない此の地に、一社創建を発願し国主に謂いて高鳥の地に建立し、公の自画像を安置したと伝えられている(『板倉町史通史下巻、上野国郡村誌17』)。		
文化財指定	高鳥天満宮社殿(町重文　平成12年６月)、高鳥天満宮太々神楽(町重無民　平成19年７月)		

位置・配置（図188－１、写188－１）

当社は群馬県東端、栃木県と埼玉県の境に位置する。南に利根川が沿い、北の谷田川は渡良瀬遊水地（谷中湖）に流れ、水源の豊かな地域である。南の道路から鳥居をくぐり、参道を進み階段を登ると正面に拝殿を望み、その奥に幣殿、本殿が連なる。社殿の東には授与所、参集所、社務所があり、南には神楽殿がある。社殿の北には浅間神社と六社合祀社を置き、北へ石段を下がると右手に70年ぶりに復元された天神の滝が、その先に心字池があり美しく整備されている。東に立つ社務所は埼玉から移築したと伝わり、明治34年(1901)の「上野名蹟図誌の絵図」に茅葺屋根の姿で描かれている。

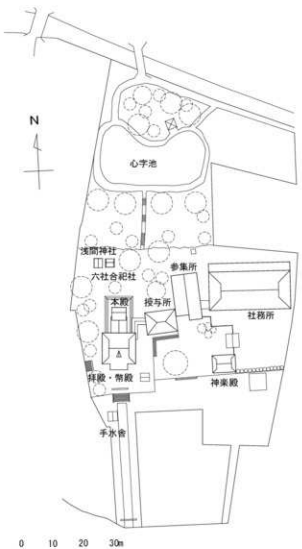

図188－１　配置図

由来および沿革

高鳥神社は菅原道真公を祭神とし、学問の神様として信仰されている。元旦祭は０時から斎行し、お神楽が奉納され、甘酒がふるまわれる。２月の例大祭は子供の額に朱印を押し、道真公に弟子入りする「お弟子ぺったん」が行われ、神主・総代の御練、太々神楽も奉納される。７月の夏越の大祓には、茅を束ねて作った直径３ｍの輪を鳥居にかけ、潜るこ

写188－１　境内全景

とで邪気を祓う行事を行い、夕刻には神楽殿で和太鼓や神楽、各種郷土芸能の奉納も行う。そのほかにも１年を通して多くの祭事が執り行われ、広域の人々に親しまれ信仰されている。

本殿（図188－２、表188－２、写188－２～188－７）

本殿は、一間社流造（1.65m）、１間向拝付、側面１間（1.61m）、瓦棒銅板葺である。自然石切石を４段積みにした基壇に切石基礎を敷き、亀腹石の上に土台を廻し、柱を立てる。三方に廻らす縁は、身舎の柱からの持送材が組物を受けて支えている。身舎と妻飾の中備の斗供蟇股は、素木の斗の美しさが映える。側面と背面の木鼻は彫刻の獅子とする。向拝の両側面に梅の刳抜きを施した板壁を設け、内部空間とし、南側正面を幣殿に繋げる。正面に木階６級を設け観音開の唐戸を付ける。正面は外部と異なり、中備や彫刻はなく素木の簡素な造りとしている。本殿は拝殿と同じ時期に建てられたと伝わるが、組物の肘木の形状、実肘木の彫り、虹梁の絵様の渦模様、木鼻の獅子の彫りに違いが見られる。本殿は棟札や墨書は確認できていない。『明治８年社寺便覧表』によると、本社は「嘉永年中(1848～1854)古宮大破に及び再建」と記す。また虹梁の絵様や獅子の木鼻より江戸末期の様式が伺える。よって拝殿と同様の時期に建造されたと考える。『明治８年社寺便覧表』によると、明治８年(1875)板葺屋根を銅に葺替えたと記している。

表188－２　本殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.65m)、側面１間(1.61m)、向拝１間、瓦棒銅板葺(当初板葺)
工匠	不明	基礎	基壇、切石基礎、亀腹
軸部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫、台輪　[向拝]角柱、海老虹梁、水引虹梁	組物	[身舎]挙鼻付出組　[腰組]挙鼻付出組、持送
中備	[身舎]挙鼻付出組　[向拝]なし	軒	二軒繁垂木
妻飾	二重虹梁、斗供、蟇股	柱間装置	桟唐戸観音開(正面)、板壁(背面・側面)
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、浜床、浜縁、脇障子(板)、擬宝珠高欄、登高欄	床	不明
天井	不明	須弥壇・扉子・宮殿	不明
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	欅
彫刻	腰組持送(波)、木鼻(獅子)、海老虹梁・虹梁(絵様)		

写188－２　側面

写188－３　背面

写188－４　背面　組物

写188－５　向拝

写188－６　腰組

写188－７　妻飾

拝殿（図188－2、表188－3、写188－8～188－10）

正面3間（6.53m）、側面3間（5.75m）、入母屋造平入、正面に1間の向拝を付ける。組物を出組、柱頭の木鼻は獅子・獏の彫刻を施し、中備も出組とする。縁を三方に廻し、腰組は縁束の上に台輪を置き出三斗組で支え、縁葛の下に詰組の斗を設ける。

内部は南から1間の通りに丸柱を立て虹梁を架ける。中備の蟇股は様々な花鳥の彫刻を施し、彫刻支輪は菊と波模様が流動的に彫刻され、一つとして同じ文様はない。天井は格天井とし、百人一首の天井画が99枚描かれている。絵師は上田正泉、小林悦道、堀江柳泉の名が墨書きされ、すべての絵に寄進者名が記されている。

拝殿は嘉永元年(1848)の棟札があり、棟梁、彫工が記されている。大工棟梁・仕手方は邑楽郡内の職人が中心となり建築し、彫刻は栃木市の渡辺喜平次宗信やみとり市花輪の彫刻師石原常八重信が手掛けている。向拝柱や水引虹梁の梅の浮彫は美しく、中備の龍の彫刻や手挟の篦彫、海老虹梁の丸彫龍は見事な彫刻である。

当社には、彫刻雛形帳が残っている。表紙に「弘化5年(1848)正月」と「天満宮拝殿　彫物雛形帳」の記載があり、同年（嘉永元年）拝殿建立時の彫刻雛形である。このなかに描かれているひな型絵も貴重であるが、寄進者名や寄進料が書かれた付箋が挟まれており、彫刻の価値を知る資料として重要であるとともに、寄進者の在所から当神社の信仰が広域であったことが伺える資料である。平成12年(2000)に社殿と共に、町の重要文化財に指定されている。室内には社殿を建築した時の様子を描いたとされる絵馬（天満宮本殿建築図）が飾られている。嘉永元年(1848)11月8日上棟と記されているという。現在、経年でくすみ、絵の詳細は確認できないが、上棟の職人の様子など細かく描かれた珍しい絵馬で、北尾重光作である。この絵馬は携わった棟梁などが、上棟を祝して奉納したものであると伝わる。

表188－3　拝殿

建造年代／根拠	嘉永元年(1848)／棟札	構造・形式	正面3間(6.53m)、側面3間(5.75m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、瓦棒銅板葺
工匠	[大工]大工棟梁 下五箇村　岡田近江藤原清規、脇棟梁 当所　橋本初佐　他13名記、木晩棟梁 麦倉村　新井善八　他4名記　[彫工]野州栃木石町　渡辺喜平治宗信　石原常八重信　他2名記	基礎	切石自然石、コンクリート基礎
軸部	[身舎]丸柱、長押、頭貫、台輪　[向拝]角柱、木鼻、海老虹梁、手挟	組物	[身舎]拳鼻付出組　[向拝]連三斗組二段　[腰組]出三斗組、上部詰組
中備	[身舎外部]拳鼻付出組　[身舎外部]本蟇股　[向拝]彫刻嵌込	軒	二軒繁棰木、板支輪(彫刻)
妻飾	[身舎]虹梁、出三斗組、力神	柱間装置	桟唐戸折戸、部戸(正面)、板壁、木組ガラス引違戸(側面)
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄。脇障子(板)	床	カーペット
天井	格天井、板支輪(彫刻)	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	素木、極彩色(向拝虹梁、手挟、彫刻嵌込、兎毛通)	飾金物等	擬宝珠
絵画	天井画(百人一首)、上田正泉、小林悦道、堀江柳泉(墨書)	材質	欅
彫刻	[身舎外部]本鼻(獏、獅子)、板支輪(波)、兎毛通(人)、懸魚、力神　[身舎内部]本蟇股(花鳥)、板支輪(波・菊)　[向拝]柱(地紋彫・梅浮彫)、水引虹梁(梅浮彫)、海老虹梁(龍丸彫)、拳鼻(刻線彫)、彫刻嵌込(龍)、手挟(鷹・獏・松)		

写188－8　正面

写188－9　側面

写188－10　向拝

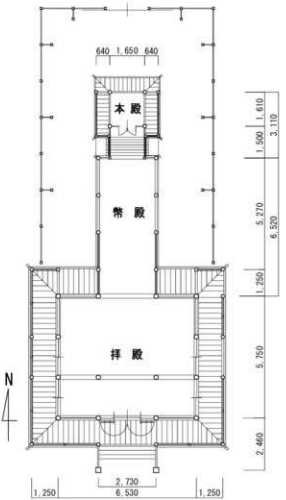

図188－2　平面図(社殿)

幣殿（へいでん）（図188－2、表188－4、写188－11～188－13）

桁行4間（2.73m）、梁間1間（6.52m）、両下造屋根瓦棒銅板葺、軒を一軒繁垂木とする。切石基礎の上に亀腹石を置き、土台の上に丸柱を立て、地長押、腰長押、内法長押で固め、平三斗の組物で丸梁を受ける。すべての柱頭に獅子の彫刻木鼻を付す。幣殿は南は拝殿、北は本殿に接続している。拝殿側の2間の東西は明障子を嵌め込み、側面は板張に梅のくり抜きを見せる。内部は1室であるが、中央に架る梁の下端に板幅程度の溝跡があり仕切りがあったと考える。幣殿の建造年を示す資料は確認できていないが、拝殿と組物の肘木形状や木鼻の獅子が同じであること、また建物を繋ぐ部分の納まりから同時期に建築したと考える。

六社合祀社（ろくしゃごうしし）（図188－3、表188-5、写188－14～188－16）

当社は長良神社、琴平神社、稲荷神社、厳嶋神社、八雲神社、多賀神社6社の合祀社である。一間社流造（1.07m）、側面1間（0.8m）、1間向拝付銅板平葺である。全体は朱塗であった痕跡が見られる。切石の上に土台を敷き丸柱を立て腰貫・頭貫で固め、切目・内法長押を廻す。正面に浜縁を置き木階5級を設け、縁を三方に巡らし、逆蓮柱の高欄を付ける。側面と背面に嵌め込まれた彫刻は、全体に

表188－4　幣殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.73m)、側面4間(6.52m)、両下造、瓦棒銅板葺
工匠	不明	基礎	切石基礎、亀腹
軸部	土台、丸柱(粽)、長押、頭貫	組物	拳鼻付出三斗
中備	なし	軒	一軒繁垂木
妻飾	なし	柱間装置	板壁、引違格子窓(硝子入)
縁・高欄・脇障子	なし	床	カーペット
天井	竿縁天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	欅
彫刻	木鼻(獅子)		

写188－11　側面

写188－12　側面

写188－13　側面　板壁・木鼻

力強い彫である。建物の特徴として、身舎の木鼻は単純な形状であり、虹梁の絵様は、渦と若葉の簡素な文様で、海老虹梁はほぼ水平に架けていること。また支輪を蛇腹支輪とし、蟇股の彫刻は外側に出ない。これらの特徴は古い時代の形式を示す。当建物は17世紀後期の特徴を残しながら、木鼻が漢や獅子の彫刻へと変わっていく過渡期の建物で18世紀前半頃の建物とみてよいであろう。壁の彫刻や向拝正面の唐獅子木鼻は後補と考える。

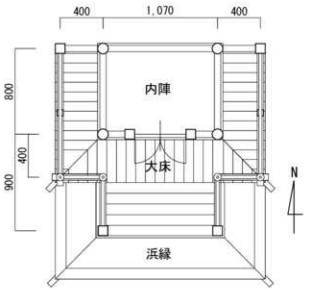

図188－3　平面図(六社合祀社)

神楽殿(図188－4、表188－6、写188－17～188－19)

神楽殿は正面2間（3.65m）、側面3間（5.80m）、入母屋造瓦葺妻入で、境内の南東に西向きに開いて建つ。西側に8畳間の舞殿があり、その奥に奥行1間の控間を板戸で仕切り、東に入口の階を付ける。基礎は自然石を並べ、その上に土台を廻し、

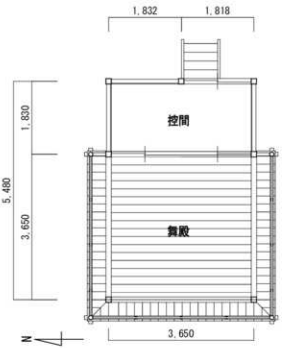

図188－4　平面図(神楽殿)

表188－5　六社合祀社

建造年代／根拠		18世紀前半／建築様式		構造・形式	一間社流造(1.07m)、側面1間(0.8m)、向拝1間、銅板葺
工	匠	不明		基礎	切石敷
軸	部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫　[向拝]角柱、海老虹梁、水引虹梁		組物	[身舎]出組変形　[向拝]出三斗変形
中	備	[身舎]本蟇股　[向拝]斗組		軒	[身舎]二軒繁垂木、蛇腹支輪　[向拝]二軒繁垂木
妻	飾	虹梁大瓶束の上に拳鼻付出三斗、蕪懸魚		柱間装置	桟唐戸親音開(正面)、板張
縁・高欄・脇障子		三方切目縁、登高欄逆蓮柱、浜床、浜縁、脇障子(彫刻嵌込)		床	不明
天	井	不明		須弥壇・扉子・宮殿	不明
塗	装	朱色(痕跡)、榱彩色(彫刻に痕跡)		飾金物等	長押角八双金物
絵	画	なし		材質	不明
彫	刻	水引虹梁(絵様)海老虹梁(絵様)、本蟇股、木鼻(獅子、獏)桁隠(貝)、彫刻嵌板(人物)			

写188－14　正面・側面

写188－15　妻飾

写188－16　向拝

表188－6　神楽殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3.65m、側面5.48m、入母屋造、平入、瓦葺
工匠	不明	基礎	自然石基礎
軸部	土台、角柱、差鴨居	組物	なし
中備	なし	軒	一軒疎垂木、せがい造
妻飾	板張	柱間装置	板戸、引違板戸
縁・高欄・簀障子	三方切目縁、擬宝珠高欄	床	板張
天井	竿縁天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	朱塗	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	杉
彫刻	虹梁(絵様)、持送(絵様)		

写188－17　正面

写188－18　側面

写188－19　軒

床を3尺ほど上げる。差鴨居で柱を固め、軒はせがい造にして庇を深く出す。彫刻は差鴨居に鴻と若葉と梅の木の絵様、縁の持送に施す。建造年を示す資料はないが『明治8年社寺便覧』に現神楽殿と同規模の建物を記す。また、『上野名蹟図誌』に、姿が描かれている。このことから、江戸末期に建てられていたと考える。

神楽殿では神話をもとにした「高鳥天満宮太々神楽」や、郷土色豊かな「里神楽」が、元旦祭や例大祭、夏越の大祓に奉納される。例大祭に舞う「高鳥天満宮太々神楽」は、町の指定重要無形民俗文化財である。神楽殿を保存し御神楽が継承されることは、歴史的文化を伝える上で非常に重要なことである。

まとめ

当社は高鳥天満宮と呼ばれ、人々に親しまれている。高鳥神社を訪れると正面の向拝に施された彫刻に惹かれる。拝殿は棟札により大工棟梁、彫刻師が明らかで、特に花輪（現みどり市）の彫刻師石原常八（2代目）が携わったことがわかっている貴重な建物である。彫物雛形帳は、当時の彫刻師が寄進者からどのように請負っていたかを示す貴重な資料である。また北尾重光の建築の様子を描いた絵馬も大変珍しい。拝殿の格天井の格間に百人一首の歌人の肖像と和歌を描いたものは非常に珍しく、学問の神様を祭る高鳥神社の信仰に因むものといえよう。境内には、嘉永年間に建てられた社殿の他、18世紀前半頃建築の六社合祀社や神楽殿も残し、歴史的にも、民俗文化的にも大変重要な神社である。

（小林則子）

【参考文献】
『板倉町史基礎資料第90号　板倉の民俗と絵馬　別巻八』
板倉町史編さん委員会　昭和58年
『明治8年社寺便覧』

191 （舞木）長良神社（（まいぎ）ながらじんじゃ）

表191－1

神社名	長良神社	所在地	邑楽郡千代田町大字舞木甲267
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人　長良神社
主祭神	藤原長良公	神事	節分祭、春・秋例大祭、夏祭（7/14）現在は日に近い日曜日、元旦祭
創立・沿革	天慶年中、藤原長良公の威徳を追慕して、社殿を建て公の霊を祭る。天慶元年(938)藤原秀郷(俵藤太)が朝敵征討の祈願をこの社に誇う。平将門を滅し、天慶３年(940)報告祭のため竜神棒石鹿玉を納め、これを霊石と称し今も存すると伝わる(『神社明細帳』、『千代田村誌』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図191－1、写191－1）

当神社は千代田町南西の利根川沿いに位置し、南西に開いて鎮座する。以前は利根川に沿って街道があり、東に行くと赤岩宿があった。現在は昭和に行われた利根川の大改良工事により土手が造られたため、街道は移動し境内も南を削られ、鳥居は昭和35年(1960)に新しく移動して作られた。東に150m行くと、承平年間(931～938)に藤原秀郷（俵藤太）が築城したと伝わる舞木城跡がある。

利根川の土手沿いの道から鳥居を潜ると広い境内が広がり、参道を進むと西に八坂神社、その奥に水天宮・戸隠社が並び、正面に社殿をみる。拝殿正面に天保11年(1840)と文久３年(1863)の年を刻む灯篭が両側に立ち、社殿は拝殿、幣殿と繋げ、その後ろに本殿を置く。拝殿左側には境内社が並び、右側には石碑群があり、さらに右手に神輿を収めた堂宇がある。境内は南に桜の大木が立ち並び、社殿奥には杉の木が生い茂り静寂につつまれている。

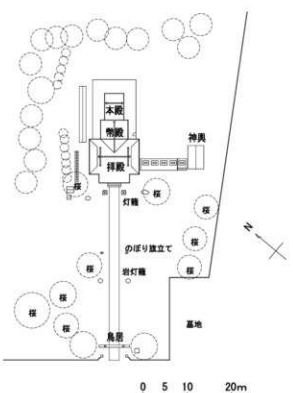

図191－1　配置図

写191－1　社殿全景

由来および沿革

千代田町には藤原長良の伝説がある。藤原長良が

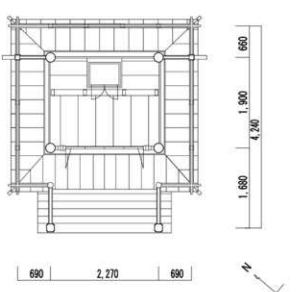

図191－2　平面図(本殿)

村人を苦しめていた大蛇を退治し18に切り、頭を瀬戸井の長良神社に、他を近郊17カ所に分け与えたという。これに感謝し長良様を祭るようになり「十八長良」の由来になった。当神社の行事は大総代（5人）、子総代（24人）が毎年行っている。夏の祭りは、今でも子供が神輿や山車を引いて舞木を練り歩くが、昭和40年(1965)頃までは、各地区で大人の喧嘩神輿が出て競い、最後に利根川に入水していたという。

拝殿は昭和21年(1946)に新築している。現在の拝殿の組物や蟇股は風食の状況から、前身の建物の部材を用いたものと考える。前建物の棟札が残ってて、文化８年(1811)３月、長良山別当 大光院秀高と記す。別当の大光院については、江戸時代の古文書（『千代田村誌』より）に本寺京都聖護院御門跡末 大光院と記されており、舞木にあった修験道である。境内外南に長良神社の宮司であった高階家墓地があり、慰霊曜に大光院の名を刻む。

本殿（ほんでん）（図191－２、表191－２、写191－２～191－７）

一間社流造（2.27m）、側面１間（1.90m）、向拝付瓦葺である。外部全体を朱塗りとし、蟇股の彫刻に極彩色を施す。身舎は軒を二軒繁垂木、蛇腹支輪とし、外部の組物を出組、中備に本蟇股を置き、妻

表191－２　本殿

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社流造(2.27m)、側面１間(1.90m)、向拝１間、瓦葺
工匠	不明	基礎	切石基礎(独立)
軸部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組物	[身舎外部]拳鼻付出組　[身舎内部]出三斗[向拝]連三斗
中備	[身舎外部]本蟇股　[身舎内部]板蟇股、撞束、彫刻嵌込　[向拝]本蟇股	軒	二軒繁垂木、蛇腹支輪
妻飾	二重虹梁大瓶束、懸魚	柱間装置	[正面]桟唐折戸　[側面]三方羽目板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁高欄付、擬宝珠高欄、登高欄、脇障子(枠のみ)	床	拭板張
天井	格天井	須弥壇・扉子・宮殿	銅
塗装	朱塗、榧彩色(彫刻嵌込、蟇股、手挟)	飾金物等	[身舎]桟唐折戸
絵画	なし	材質	不明
彫刻	[身舎外部]虹梁(絵様)、懸魚(猪目)、木鼻(獅子・獏)、本蟇股(鳳凰、玄武、鳥)　[身舎内部]虹梁(絵様)、彫刻嵌込　[向拝]海老虹梁(絵様)、水引虹梁(絵様)、木鼻(獅子・象)、手挟、本蟇股(龍)		

写191－２　側面

写191－３　背面

写191－４　向拝　虹梁

写191－５　妻飾

写191－６　身舎　中備蟇股

写191－７　内部　正面

飾は二重虹梁大瓶束である。大床を四方に廻らし、枠のみの脇障子を付ける。

内部は奥に２本の角柱を立て虹梁でつなぎ、格天井を出三斗組で受る。中備は正面に本蟇股、左右は蓑腰付撥束、外周部は撥束とする。奥は床を一段高くして祠を置く。

彫刻は虹梁や拳鼻に刻線彫、本蟇股内に野鳥や四神の鳳凰や玄武の彫刻。向拝正面の嵌込み龍や木鼻の象・獅子・獏などにみる。

本殿は建造年代を示す資料を残していない。本殿の年代を示す特徴として、虹梁の絵様が渦と若葉の単純な文様、象の木鼻、軒の支輪を蛇腹支輪としていること。内部の中備を撥束とし、外部の本蟇股は比較的脚が短く、彫刻は外側に膨らまない古い様式である。このような特徴から、本殿の建造年代は18世紀中期頃まで遡れると考える。なお、本殿内から棟札の一部が見つかり、「宮大工仙石村岩瀬石見正治房」と記すが、年代を示す部分は失われている。建造年や工匠については今後の調査を待ちたい。

まとめ

本殿は、虹梁の渦と若葉の単純な絵様や蛇腹の支輪、象の木鼻、内部の撥束、中備の蟇股の彫刻などに18世紀中期頃の様式を非常に良く残している貴重な建物である。

藤原長良公祭祀の長良神社は、群馬県邑楽郡近郊に多数存在し35社にもおよぶ。この地域で長良様の信仰が非常に厚かったことがうかがえる。伝説から生まれた「十八長良」は瀬戸井の長良神社をはじめとした18の長良神社で、本社もその一社であり、藤原長良信仰において歴史的にも重要な神社である。

（小林則子）

【参考文献】

『千代田村誌』千代田村誌編さん委員会　昭和50年

193 （篠塚）長柄神社（(しのづか)ながらじんじゃ）

表193－1

神社名	長柄神社	所在地	邑楽郡邑楽町篠塚甲2907
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　長柄神社
主祭神	事代主神（ことしろぬしのかみ）	神事	例祭（４/15、10/19）、どんど焼（１月第３日曜日）
創立・沿革	当社は1400年前、大和から邑楽郡に来て長柄郷を開発した長柄首氏が始祖事代主命を祭神として草創。上野国神明帳に「正一位長柄明神」と記された邑楽郡一ノ宮。元慶５年(881)に藤原長良公を合祀し、近郷の首社として崇敬された(「館林の寺社と史料」)。		
文化財指定	長柄神社本殿(町重文　平成10年２月)、長柄神社の桜「エドヒガン」(町天記　平成元年11月)、長柄神社の里神楽(町重無形　平成16年１月)		

位置・配置（図193－１、写193-１）

長柄神社は、邑楽町の南西に位置し、国道354号線の篠塚交差点より南に下った集落の外れに鎮座する。境内の南側を東西にはしる道路に面し鳥居が立ち、北の社殿へと参道が延びる。

参道の両脇には桜並木が20mほど続き、東に邑楽町指定天然記念物の「エドヒガン」桜がひときわ大きく存在する。参道の中ほど西に神楽殿が建つ。拝殿前に一対の狛犬を配し、南面した拝殿へと導かれ、幣殿・本殿へと続く。拝殿西側に浅間神社を祀り、東側に社務所、その奥に宮司宅を配している。

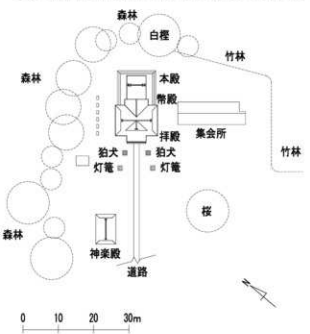

図193－１　配置図

写193－１　境内全景

「長柄神社之景　明治34年８月刷」には、境内内にうっそうと木々が生い茂る様子が描かれ、現在でも木々が茂り鎮守の森を思わせている。

由来および沿革

長柄神社は事代主命を祭神としており、大和国葛城郡を本拠地とし、八重事代主神を始祖とする長柄首氏に由来するものと考えられる。1400年前、大和から邑楽郡に来て長柄郷を開発した長柄首氏が始祖事代主命を祭神として草創。この長柄神社の存在が、やがて平安時代初めに実在した藤原長良を祭神とする、邑楽郡地域に特有の長良神社を生み出す礎になったと考えられる。藤原秀郷を祖とする佐貫氏が、長い伝統と格式をもつ長柄神社と「ナガラ」の音が共通することから、系統を同じくし、要職を務め子孫の繁栄が賞賛された藤原長良を荘園の鎮守として祀ったと推定される。上野国神明帳に記載された邑楽郡十五社の筆頭に「正一位長柄明神」と記されている。元慶５年(881)に藤原長良公を合祀し、近郷の首社として崇敬され、元弘３年(1333)篠塚城主・篠塚八郎伊賀守重広が新田義貞に応じ出陣に当たり武運を祈願した。明治５年(1872)11月石打・藤川・秋妻・上小泉・下小泉・吉田・篠塚七ケ村の郷社となる。明治41年(1908)に境内内及び近郊の社を合祀し、翌年に境内末社７社となる。

享保13年(1728)の宗源宣旨では「長良大明神」となっていたが、現在は由来の「長柄神社」に戻している。

本殿（図193－２、表193－２、写193-２～193－７）

一間社流造、側面１間、銅瓦葺で１間の向拝を付す。棟に３本の堅魚木をのせる。軒は正面と背面を二軒繁垂木とし向拝に透彫の手挟を付ける。南を正面とし、幣殿に接続している。浜縁と浜床、５級の木階を設け、四方に擬宝珠の縁と続いている。透彫の脇障子を設け、向拝と身舎を海老虹梁で繋ぎ、虹梁下の両側面を後補の嵌殺ガラスにて覆う。組物は身舎を三手先、向拝は変形させた連三斗をのせ、腰組は獅子頭の付いた二手先となっている。中備は身舎を蟇股、向拝は龍の彫刻を嵌める。彫刻板の軒支輪を二重に施し、妻飾も虹梁を二重に架け、妻壁面は全て彫刻で埋められている。床は畳敷、天井を格天井とする。彫刻を随所に用い、壁面に人物や花鳥の透彫を嵌め、尾垂木や木鼻は霊獣である。虹梁や向拝柱に浮彫、柱・貫・長押・桁に地紋彫を施している。支輪板や妻飾は極彩色に塗られ、軸部は朱塗りに金色の縁取りが施されている。

安永８巳亥年(1779)11月15日の建造、大工は龍前村（現太田市）の町田兵部と棟札から判明している。

拝殿（図193－２、表193－３、写193-８～193－10）

正面３間（8.34m）、側面２間（4.73m）の入母屋造、正面千鳥破風付で平入り、１間の向拝を付す。二軒疎垂木で屋根を銅板で葺く。正面に階を設け、三方に縁を廻らす。柱は身舎、向拝共に角柱で、身舎には三斗組、向拝は変形の連三斗を柱上におき海老虹梁で繋ぐ。中備は身舎が蟇股、向拝は龍

表193－２　本殿

建造年代／根拠	安永８年(1779)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.83m)、側面１間(1.65m)、向拝１間、銅瓦葺
工匠	[大工]龍前村　町田兵部(棟札による)	基礎	自然石
軸部	[身舎]丸柱、土台、地・内法長押、頭貫　[向拝]角柱	組物	[身舎]三手先、二手先拳鼻付(腰)　[向拝]連三斗積上変形
中備	[身舎]蟇股　[向拝]彫刻嵌込(龍)	軒	二軒繁垂木
妻飾	二重虹梁彫刻嵌込、懸魚	柱間装置	[正面]両開板戸　[側面]三方透彫板
縁・高欄・脇障子	四方縁高欄付・登高欄　脇障子：透彫	床	畳
天井	格天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	[身舎]朱塗、極彩色(軒支輪・妻飾彫刻)黒・金(組物・虹梁)　[向拝]朱塗、黒・金(組物)	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	欅
彫刻	[身舎]壁面、軒支輪、脇障子、木鼻、妻虹梁、柱(地紋彫)　[向拝]水引虹梁・海老虹梁(浮彫)、柱(地紋彫)		

写193－２　正面

写193－３　背面

写193－４　向拝虹梁

写193－５　向拝水引虹梁・中備

写193－６　腰組

写193－７　背面

表193－3　拝殿

建造年代／根拠	元治元年(1864)／棟札	構造・形式	正面3間(8.34m)、側面2間(4.73m)、入母屋造、平入、正面千鳥破風付、向拝1間、銅板葺
工　匠	[大工]江戸本所新町　大工　高橋卯吉／棟札	基　礎	自然石、基壇
軸　部	[身舎]角柱、地・内法長押、頭貫、台輪　[向拝]角柱	組　物	[身舎]平三斗　[向拝]連三斗積上変形
中　備	蟇股	軒	二軒疎垂木
妻　飾	木連格子、虹梁大瓶束、彫刻、彫刻懸魚	柱間装置	サッシ(正面部戸、左右引違戸)
縁・高欄・脇障子	三方縁、高欄・脇障子なし	床	畳敷
天　井	格天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗　装	頭貫・組物：朱、他：素木	飾金物等	破風拝、破風尻
絵　画	天井画：北尾重光	材　質	不明(針葉樹)
彫　刻	水引虹梁、海老虹梁、木鼻、妻飾		

写193－8　正面

写193－9　側面

写193－10　向拝

の彫刻である。妻飾は木連格子で千鳥破風は虹梁大瓶束と彫刻で飾る。正面中央間は蔀戸、両脇は引違、東・西側面の前方1間は引違戸を設け、北側を4本木製引戸にて幣殿と接続している。床は畳敷で、天井は格天井とし、鏡板は全て北尾重光筆の天井画となっている。向拝の木鼻に獅子・獏を彫り、水引虹梁に浮彫を施す。他の虹梁や木鼻の絵様は刻線彫である。頭貫と組物を朱で塗り他は素木である。

建造は元治元年(1864)、大工は江戸本所新町　高橋卯吉である（棟札より）。北尾重光(1814～1883)は江戸末期に活躍した館林の絵師で多数の作品を残し、館林市指定文化財の「館林城絵馬」等がある。奉納絵馬の「重輝」は「重光」の子である。

幣殿（図193－2、表193－4、写193－11～193－13）

正面1間（3.66m）、側面1間（3.47m）、背面3間の両下造とし、南側正面を拝殿と接続、北側背面を本殿と接続する。一軒疎垂木で屋根を銅板で葺く。板張りの一間で、棹縁天井とする。側面はアルミサッシ製の引違窓で、平成31年(2019)に修理されたもの。明治34年(1901)に描かれた「長柄神社之景」に「祝詞殿12尺方」として建物が描かれてお

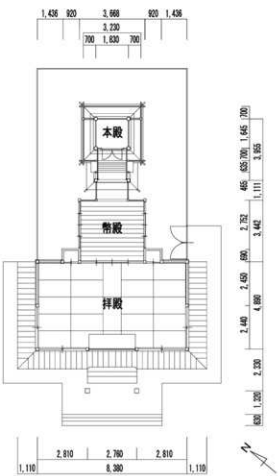

図193－2　平面図(本殿・幣殿・拝殿)

表193－4　幣殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3.66m、側面3.47m、両下造、銅板葺
工匠	不明	基礎	自然石、基壇：なし
軸部	[身舎]角柱、内法長押	組物	なし
中備	吊束	軒	一軒疎垂木
妻飾	なし	柱間装置	サッシ(引違窓)
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張
天井	棹縁天井	須弥壇・扉子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	不明(針葉樹)
彫刻	木鼻		

写193－11　幣殿入口正面

写193－12　幣殿北面

写193－13　幣殿木鼻

り、現在の幣殿とほぼ同じ大きさである。木鼻の形状や絵様が本・拝殿と異なり、風食から近年の細工と思われる。修理暦として昭和２年(1927)に本殿屋根の葺替を行っており、同時期に大改修されたか再建したと考えられる。拝殿と同時期に建造された可能性も残る。

まとめ

本殿は、柱や縁束・足固め貫まで施された地紋彫、腰組の間に嵌めこまれた彫刻板支輪、足固め貫の木鼻に施された獅子頭、身舎の透彫の壁面や妻飾りの二重彫刻板支輪、金色に縁取る塗など、近隣では見ることができない装飾が全面に施されており、大変貴重な建造物である。大工の町田兵部は桐生天満宮を手掛けており、長柄神社の丸みを帯びた霊獣彫刻の特徴が桐生天満宮にもみられ、同一の工匠の仕事の可能性があり、今後明確になる事を期待する。神楽殿では、邑楽町指定重要無形民俗文化財の長柄神社の里神楽を舞い、後世に残すべき価値ある神社である。

（小島恵理子）

【参考文献】

『上野国郡村誌17（長柄神社）』群馬県文化事業振興会　昭和62年

『上野名蹟図誌（長柄神社之景）』明治34年

『邑楽町誌』邑楽町誌編纂室　昭和58年

『邑楽町寺社建築報告書』邑楽町　平成10年

『館林の寺社と史料』館林市史編さん委員会　令和２年

4　（植野）稲荷神社（（うえの）いなりじんじゃ）

本殿、拝殿

神社名	（植野）稲荷神社	所在地	前橋市総社町植野字稲荷前1039-2
旧社格	村社	主祭神	宇迦之御魂神
構造・形式	［本殿］一間社入母屋造（0.82m）、側面1間（0.66m）、平入、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、柿葺　［拝殿］三間社入母屋造（5.69m）、側面2間（3.90m）、平入、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、瓦葺		
建造年代（根拠）	［本殿］明和7年（1770）／棟札 ［拝殿］元治元年（1864）／棟札	工匠	［本殿］棟梁：松本主水藤原榮貞、彫工：関口文治郎 ［拝殿］棟梁：篠原喜太郎信好

当神社は、JR群馬総社駅北方、利根川右岸の団地内に位置し、主祭神に宇迦之御魂神を祀る。

本殿は、明和7年(1770)に建造、一間社入母屋造柿葺。身舎柱は丸柱、組物は三手先で、地覆・腰・切目・内法長押、頭貫に地紋彫を施している。向拝柱は地紋彫角柱、組物は連三斗出三斗一体型とし、海老虹梁で身舎と繋ぐ。大工は箕郷和田山の松本主水榮貞、彫物は関口文治郎が担っている。

拝殿は、天保9年(1838)と元治元年(1864)の棟札2枚を残す。天保の拝殿は、風水害に依る損壊と伝えられているが、詳細は不明。現拝殿は『惣社町郷土誌』に元治元年遷宮と記され、三間社入母屋造瓦葺。身舎柱は丸柱、組物は二手先、内部格天井に天井絵が描かれている。向拝柱は地紋彫角柱、組物は出三斗連三斗積上変形。中備、兎毛通、海老虹梁、手挟、正面桟唐戸、脇障子に彫刻が施されている。

本社殿は、在郷の優れた大工、彫工により造られ、18～19世紀中期の神社を理解する上で価値がある。例大祭に奉納される市重無民の太々神楽は、地域で守り続けられている貴重な伝統芸能である。

（難波伸男）

5　二宮赤城神社（（にのみやあかぎじんじゃ）

本殿　舞台　十二天

神社名	二宮赤城神社	所在地	前橋市二之宮町886
旧社格	郷社	主祭神	笠懸野命をはじめとする26柱
構造・形式	三間社流造（2.73m）、側面2間（1.92m）		
建造年代（根拠）	［本殿］19世紀前半／建築様式 ［舞台］19世紀前半／建築様式 ［十二天］文政13年／棟札	工匠	［本殿］不明 ［舞台］不明 ［十二天］大工：内田伊兵衛依番、與一郎信武、剣持直吉則孝

前橋市東部の二之宮町に位置し、上武国道二宮神社前交差点を約200m北上すると境内に至る。

境内は中世における社地の形態を現代に伝える貴重な環濠遺構であり、市指定史跡である。鳥居をくぐり鐘楼横の参道を北上すると随神門、その先に拝殿、幣殿、本殿（覆屋内）が一直線に並ぶ。

建物は拝殿東に山王社、その北東に宝物殿、東に神楽殿、その南に舞台、参道はさんで西に十二天、社務所を配す。

創立年は不詳である。鎌倉時代の古文書に神社名の記載はあるが、戦火で焼失する。天正年間(1573～1592)大胡城主牧野康成が社殿を再建する。

本殿の建造年代は、建築様式から19世紀前半と推定される。本殿脇に天保12年(1841)扁額があり、建立当初のものと考えられる。

本殿は、三間社流造板葺正面千鳥破風、軒唐破風一間の向拝付で、腰縁、虹梁、手挟、軒支輪の彫物や組物に彩られている。舞台は文化9年(1812)の建築と伝わる。十二天の棟札の写真資料は、文政13年(1830)の上棟とあるが、二宮小学校付近からの移築と伝わる。移築理由、移築年は不明である。

三夜沢赤城神社への神迎え・神送りの「御神幸」は、現在も続く神事である。

（南雲啓二）

写4－1　本殿正面

写4－2　海老虹梁・木鼻・組物

写4－3　拝殿正面

写4－4　海老虹梁・手挟

写5－1　全景

写5－2　本殿出組

写5－3　拝殿水引虹梁

写5－4　十二天海老虹梁

6　春日神社〔かすがじんじゃ〕

本殿

神社名	春日神社	所在地	前橋市上佐鳥町368-1
旧社格	村社	主祭神	天児屋命
構造・形式	一間社流造(1.06m)、側面1間(0.94m)、銅板葺		
建造年代（根拠）	18世紀前半／建築様式	工匠	不明

前橋市南部の上佐鳥町に位置し、東に端気川が流下し、西に県道前橋玉村線が通る。市道に面する鳥居から北に向かって社殿、東側池の脇に神楽殿、その北に社務所、西に太々神楽衣裳収蔵庫を配する。社殿は南から拝殿、幣殿、本殿と続く。

弘仁年間(810～824)に興福寺の僧徳一法師が春日大明神を当地に移し、春日神社を建立した。興福寺を移して寺を建立し、西光寺とした。市指定重要無形文化財の春日神社太々神楽、市指定天然記念物の春日神社のケヤキがある。

春日神社は、上川淵1号古墳上に立地しており、古くからこの地域の人々に信仰されている。

本殿は一間社流造（1.06m）、側面1間（0.94m）の小さな社である。切石基壇に据えられた社は、全体を朱塗りとし、浜縁、登高欄付き階5段を設け、大床三方廻し脇障子を付ける。向拝柱は角柱で水引虹梁・海老虹梁の先に木鼻（獅子鼻）を設ける。身舎柱は円柱で柱上は出組とし、頭貫、組物、木鼻は拳鼻である。

拝殿屋根裏から延享2年(1745)、明治45年(1912)、大正15年(1926)の3枚の棟札が見つかる。自治会資料によれば、大正15年に本殿の改修が記載されており、棟札と一致する。

（南雲啓二）

写6－1　全景

写6－2　海老虹梁の絵様

写6－3　向拝柱の絵様

写6－4　拝殿棟札(延享2年他)

7　八柱神社〔やはしらじんじゃ〕

本殿

神社名	八柱神社	所在地	前橋市滝窪町457
旧社格	村社	主祭神	多紀理毘売命 以下8神
構造・形式	一間社流造(1.65m)、側面1間(1.65m)、鉄板葺(当初茅葺)平入		
建造年代（根拠）	19世紀前期／建築様式	工匠	不明

県道四ツ塚原の郷前橋線の北約200mに位置する。東側の表参道からは階段を上がって境内に入る。北西側の裏参道からは車で入る事ができる。境内には合祀された末社14社が祀られている。

本殿は、一間社流造、平入である。自然石基壇、切石基礎に据える。一方大床に脇障子、擬宝珠高欄、登高欄、階5級、四方浜床となる。本柱は丸柱、向拝柱は亀腹の角柱である。組物は、向拝に大斗肘木、出三斗があり、身舎は、舟肘木、大斗肘木、出三斗、出組となる。

水引虹梁上部の龍の彫物が異彩を放ち、極彩色であった彫刻は往時をしのばせる。また、身舎には、花と波の板彫刻がある。木鼻は拳である。

屋根は、昭和50年の改修で萱の上に鉄板を葺いている。棟木や桁が長く軒（二軒繁垂木）が深くなっており、ほかの流造の本殿とは異なり特徴的である。妻飾は、一重虹梁大瓶束　鰭付の蕪懸魚である。

境内にある開姫神社のお祭りは周辺地域では有名でかつての春と秋の祭りは賑わっていたという。

向拝虹梁の複雑な唐草模様と段違いで比較的に背の大きい海老虹梁から、建造年代は、19世紀前期と推定される。

（西村良子）

写7－1　全景

写7－2　側面

写7－3　海老虹梁

写7－4　本殿正面

8　大胡神社〔おおごじんじゃ〕

本殿

神社名	笂明神社	所在地	前橋市河原浜町615
旧社格	郷社	主祭神	天己貴命、豊城入彦命
構造・形式	正面1間(1.82m)、側面1間(1.64m)、入母屋造銅板葺、平入		
建造年代（根拠）	江戸末期／建築様式	工匠	不明

前橋市東部の河原浜町を流下する荒砥川右岸の河岸段丘上に位置し、南に大胡城趾、西には龍林寺がある。参道の階段を上りきると正面に拝殿、幣殿、本殿があり、東に社務所が配置されている。

寛永年間(1624～1644)に本殿・拝殿・社務所が焼失するが、寛永10年(1633)３月大胡城主牧野大和守忠虎により神殿が造営される。天保３年(1832)３月６日神殿、社務所が消失し「大胡町誌」によれば天保６年(1835)11月、新殿新築と伝える。

入母屋造平入、屋根は銅板葺である。基壇に切石布基礎、土台が据えられている。本柱は丸柱、向拝柱は角柱である。軒は二軒繁垂木で、妻飾りは木連格子、蕪懸魚鰭付である。正面に両開桟唐戸が付き、側背面は板壁である。三方大床で脇障子、擬宝珠高欄、海老虹梁浮彫、木鼻、手挟など多様な彫刻も施されており、彫刻が床下の腰組に及ぶことから、本殿建造年代は江戸末期と推定する。

大胡城主から供米を奉納された神社であり、大胡地域の中心的な支柱である。本殿には多様な彫刻も施されており、近戸神社とも称され、二宮赤城神社から三夜沢赤城神社に向かう「御神幸」の休憩地であり、神事をおこなっている。

（佐藤　桂）

9　（月田）近戸神社〔（つきだ）ちかとじんじゃ〕

本殿

神社名	笳声神社	所在地	前橋市粕川町月田1261
旧社格	村社	主祭神	天己貴命、豊城入彦命
構造・形式	一間社流造(1.52m)、側面1間(1.82m)、柿葺		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

前橋市の東部旧粕川町の上毛電鉄膳駅北、県道前橋大間々桐生線の交差点を約1.5km北上する地点に位置する。境内は赤城山を背に南の鳥居から拝殿・幣殿・本殿（覆屋）と並び、西に社務所、東に手水舎、北に合祀した祠を配する。

創立は東国を鎮定した豊城入彦命の姫が宇丸山に勧請した社を延暦13年(794)に移築したといわれている。

本社は赤神社と同じく赤城山信仰による神社であり、例大祭に奉納される月田近戸神社の獅子舞（県指定重要無形民俗文化財）と華麗な近戸神社神輿（市指定重要文化財）を昇いで行われる御川除神事は、600年の伝統を誇り著名である。

現在の建物に関する棟札や古文書はないが、月田村明細帳の記述から寛延２年(1749)頃と推察できる。

一間社流造（1.82m）、側面１間（1.52m）神葺で正面に向拝を付し、瓦葺きの覆屋（当初茅葺）が覆う。階５級を備え、擬宝珠高欄付きの大床を三方に廻らし脇障子（板）が付く。軒は二軒繁垂木で、身舎柱は丸柱、向拝柱は面取り角柱で、柱上に出三斗、木鼻を備える。中備に蟇股、妻飾りは虹梁大瓶束となる。

（南雲啓二）

写８－１　全景

写８－２　本殿正面

写８－３　切石布基礎　腰組

写８－４　海老虹梁　木鼻

写９－１　全景

写９－２　向拝の木鼻

写９－３　海老虹梁

写９－４　妻飾り

10　(深津)近戸神社（(ふかつ)ちかとじんじゃ）

本殿

神社名	近戸神社	所在地	前橋市粕川町深津甲1437
旧社格	村社	主祭神	天忍穂命、豊城入彦命
構造・形式	神明造正面1間(1.78m)、側面1間(1.45m)、銅板葺(当初茅葺)		
建造年代（根拠）	明治前半期／建築様式	工匠	不明

前橋市の東部、県道前橋大間々桐生線の南、粕川の西に位置し、旧深津村の村社として地域に親しまれている。境内南の階段を上がった所の鳥居から拝殿、本殿が一列に並び、西に社務所後背地に境内林を配する。

本社の由緒は口碑に坂田大跨王の勧請した古社といわれる。神社明細帳には三夜沢赤城神社の分霊社の記述あり、本殿はそれにならった神明造と考えられる。

本殿の建造年代は、建築様式から明治前半期と推定される。拝殿は、扁額の明治39年(1906)４月と同じ頃の建築と推定される。

昭和38年(1963)１月１日社殿の修繕、昭和58年(1983)に社殿屋根の改修がおこなわれている。

本殿は正面１間（1.73m）、側面１間（1.45m）の神明造、銅板葺である。切石基礎、切石積基壇亀腹で、浜縁、階７級擬宝珠登高欄を備え、擬宝珠高欄付大床を四方に廻らす。軒は一軒繁垂木である。身舎柱は丸柱、切目・内法長押、腰貫を廻す。柱間装置は正面に両開き板戸、三方落壁である。

幣殿はなく、拝殿から独立しており、敷板１枚を掛けた状態である。三夜沢赤城神社を模した簡素な造りである。

（南雲啓二）

12　(横室)赤城神社（(よこむろ)あかぎじんじゃ）

本殿

神社名	赤城神社	所在地	前橋市富士見町横室甲55
旧社格	郷社	主祭神	豊城入彦命
構造・形式	[本殿]三間社切妻造(3.64m)、側面２間(2.71m)、平入、鉄板瓦棒葺		
建造年代（根拠）	[本殿]明治中期 [拝殿]改築昭和36年(1961)／棟札	工匠	[本殿]改築：小林忠造 [拝殿]改築大工：田村英一、橋本喜一郎

本神社は、前橋市北方に位置し、約300段を有する十二山山頂の削平した境内にあり、正面に鳥居、その奥に社殿を南北に配置する。創建は不明であるが、厩橋築城以来、城の鬼門として篤く保護されたと記録にある。本殿は三間社切妻造（3.64m）、側面２間（2.74m）、平入、鉄板瓦棒葺（後補）で三方切目縁を廻し、３段の木階を設け、柱間装置は桟唐戸両開を付、外壁は横板張素木造としている。内部は外陣と内陣に分れ、内陣は三間社造付の厨子とし、大きさは正面３間、奥行0.25間。中央１間に両開桟唐戸を付、彫刻入り小脇板、水引虹梁を設けている。両サイド２間の柱間装置に嵌折両開桟唐戸を設け、内部床、壁、天井共素木板張としている。外陣の床は畳敷で、壁は素木横板張、天井は棹縁天井を設けている。本殿の建造年代は「上野国神社明細帳」により明治中期と推定する。

拝殿は棟札に昭和36年(1961)改築と記述されている為その年を改築年代とする。また歌舞伎衣装は周辺町村の農村歌舞伎に多大な影響を与え県内の農村歌舞伎を考察する重要な文化財である。

（藤井宏典）

写10－1　全景

写10－2　本殿正面

写10－3　向拝柱

写10－4　浜縁

写12－1　全景

写12－2　拝殿から本殿正面

写12－3　本殿内陣正面

写12－4　歌舞伎衣装

16　(市場)八坂神社〔(いちば)やさかじんじゃ〕

本殿

神社名	八坂神社	所在地	伊勢崎市市場町1-1593
旧社格	郷社	主祭神	速素盞嗚命
構造・形式	一間社流造、向拝付、柿葺		
建造年代（根拠）	18世紀前半／建築様式	工匠	不明

旧赤堀町国道50号西久保交差点より南に700m。主要地方道伊勢崎大間々線沿いの西側に位置する。道路側の鳥居奥に覆屋社殿があり、本殿を納める。当社は、赤堀十郷の領主が定まった頃（江戸時代中頃）、郷民相謀って市場を創立するに当たり、市場守護神として創建したものという（社伝による）。

本殿は、一間社流造、向拝付、柿葺の小振りな社である。土台上に身舎丸柱と向拝角柱を立て長押を廻し、柱上に直に妻虹梁、丸桁を載せる。妻飾は虹梁笈形付大瓶束である。向拝は柱頭に水引虹梁を渡し、木鼻に象頭と獅子頭を付ける。柱上連三斗出組で丸桁と海老虹梁を受け身舎柱と繋ぐ。

当本殿は装飾性が少なく、身舎では虹梁の渦と離れている若葉の唐草絵様、大瓶束に付く笈形、脇障子の嵌込彫刻、大瓶束上組物（出三斗）のみに彩色がある程度で組物もない。向拝では水引虹梁のやはり渦と離れている若葉の唐草絵様、彩色された獅子と象の木鼻と三巴に雲の本蟇股程度である。海老虹梁の段差湾曲は小さく、唐草には渦のみで若葉はない。このような特性から、当本殿は創建当時の建築と考えられ、18世紀初期から中期の装飾性が高くなる以前の建築と推定する。古式を伝える貴重な建築である。

（栗原昭矩）

17　小泉稲荷神社〔こいずみいなりじんじゃ〕

本殿

神社名	小泉稲荷神社	所在地	伊勢崎市東小保方町155-1
旧社格	無格社	主祭神	宇迦之御魂命、大己貴命
構造・形式	三間社流造、側面２間、向拝１間、正面唐破風付、銅板平葺		
建造年代（根拠）	明治以降／建築様式	工匠	不明

社伝によると第十代崇神天皇の御代に豊城入彦命が勅命により大己貴命を奉じたのが始まりとされる。平安時代の末、山城国伏見稲荷大明神の御分霊を奉祀したと伝わる。慶長５年(1600)、領主であった久永源兵衛が社殿を修理して敬神の範を示した。江戸時代末期の祭礼日は参詣人で賑わう。明治43年(1910)の神社合祀により一時廃されるも、昭和４年(1929)に現在の地に奥の院（石宮）を建立して旧地に分離遷宮した。社殿前方には鳥居が278基、離れた所に高さ22mの大鳥居が立つ。

本殿は三間社流造である。屋内は内陣と外陣からなり、拭板張、両開戸等の開口部、布羽目、竿縁天井からなる。外周部は布羽目の上に板金がつく。基壇２段の上に、布基礎、土台があり、正面のみ切目縁で、高欄と登高欄がある。柱は角柱で、身舎には足元長押（正面は切目長押）と内法長押がつく。組物と中備は向拝にのみ大斗肘木がつく。

昭和36年(1961)に拝殿と幣殿が新築され、本殿も一体的に改築された。設計施工は佐藤建設株式会社（社長 佐藤源六）、棟梁は清水正三郎。それ以前は流造の本殿だけが高さ1.7mほどの階段のない基壇の上に建っていた。建造年代は装飾の少ない造り等から明治以降と推定する。

（島崎重徳）

写16－1　全景

写16－2　向背正面

写16－3　向拝側面

写16－4　身舎側面

写17－1　全景正面(拝殿)

写17－2　側面・背面

写17－3　正面

写17－4　向拝　唐破風

18　鹿嶋宮〔かしまぐう〕

本殿

神社名	鹿嶋宮	所在地	伊勢崎市田部井町1-1126
旧社格	村社	主祭神	建御雷命
構造・形式	一間社流造、側面１間、向拝１間、銅板本瓦棒葺		
建造年代（根拠）	江戸中期／建築様式	工匠	不明

JR 両毛線国定駅の南東に位置する。社殿は南面し、境内には地区の会議所や遊具がある。文治２年(1186)源頼朝の家臣安達藤九郎盛長が上野国守護となり太田市森田の吉沢に鹿嶋神宮の御分霊を奉遷し祠宇を創建した。その後、早川岸台、観音山などに移され、慶長(1596～1615)の頃和泉昭四郎氏宅地内に移り、寛文９年(1669)に現在地に遷立され本日に及ぶ。この地には本殿だけがあったが、後に拝殿と幣殿が建造された。拝殿に関しては明治11年(1878)に作られた佐位那波郡神社明細表に記載されているものが現在のものと同規模である。しかし、明治43年の神社の合祀の際に拝殿と幣殿が建造された可能性もある。昭和25年(1950)に拝殿を宣葺から瓦葺に改修し、本殿も修理をした。令和元年(2019)８月に本殿の傾きを修理し、床下の耐震補強をした。

本殿は一間社流造で、組物は身舎が出三斗、向拝が連三斗である。中備は身舎側面と向拝が板蟇股で、身舎正面と背面が実肘木付の間斗束である。妻飾は虹梁大瓶束笈形付で鰭付の拝み懸魚と、降懸魚がつく。虹梁の唐草紋様は17世紀代の特徴があるものの、海老虹梁の形態から建造年代は江戸中期と推定する。

（島崎重徳）

24　武内神社〔たけうちじんじゃ〕

本殿

神社名	武内神社	所在地	渋川市祖母島甲499
旧社格	村社	主祭神	建内宿彌命
構造・形式	一間社隅木入春日造(1.24m)、側面１間(1.02m)、向拝１間軒唐破風付、柿葺		
建造年代（根拠）	宝永８年(1711)／擬宝珠刻	工匠	不明

創建は文安年間(1444～1449)といわれ、明治２年(1869)に宿禰大明神から武内神社と改称している。

JR 吾妻線祖母島駅の西北西、石造と木造の二つの鳥居をくぐり石段を登ると、祖母塚という杉林に囲まれた小高い丘にほぼ南向きに社殿がある。拝殿は正面３間側面２間の入母屋造、正面に千鳥破風を付け向拝は軒唐破風とし現在の屋根は銅板葺である。幣殿と本殿の納まる覆屋が接続している。

本殿は、一間社春日造、向拝を軒唐破風とした柿葺である。組物は身舎を出組、向拝は連三斗を連続させて菖蒲桁を受け、虹梁上は太瓶束で唐破風の棟木を受けている。中備は身舎・向拝とも蟇股、背面妻飾は豕扠首、軒は蛇腹支輪、飛檐打越二軒繁垂木で軒を大きく出している。正面木鼻に獏の彫刻がある。三方に大床を回し、板脇障子と高欄が付き擬宝珠には「寶永八辛卯歳三月吉日」の刻みがある。全体が素木で造られ、海老虹梁は反りが小さく、手挟は大きいが彫りは少ない。虹梁の唐草絵様の渦・若葉の彫りも浅く簡素である。建造年代は前記の特徴から、擬宝珠刻みにある宝永８年(1711)と考えられる。本殿内には、宝永５年(1708)の宗源宣旨が納められている。

（林　美幸）

写18－１　拝殿正面

写18－２　背面と西側面

写18－３　本殿正面

写18－４　本殿海老虹梁

写24－１　全景

写24－２　本殿正面

写24－３　向拝

写24－４　海老虹梁・手挟

26　(川島)甲波宿祢神社（(かわしま)かわすくねじんじゃ）

社殿（本殿・幣殿・拝殿）

神社名	甲波宿祢神社	所在地	渋川市川島1287
旧社格	郷社	主祭神	速秋津彦命、速秋津姫命
構造・形式	権現造［本殿］1間社流造、平入、1間向拝、銅瓦葺（当初茅葺）［幣殿］正面1間、側面2間、両入造、銅板葺［拝殿］正面3間、側面2間、入母屋造、平入、1間向拝、銅瓦葺（当初銅平葺）		
建造年代（根拠）	［本殿］18世紀後期／建築様式 ［幣・拝殿］弘化2年(1856)／棟札	工匠	［本殿］不明 ［幣・拝殿］大工 松岡出雲正藤原宮盛／棟札

神社は県道35号線の新幹線高架近く山際に位置する。東入りの境内は杉林の中、社殿、神楽殿の建物と、多数の古造物が点在する。創立は宝亀２年(771)、浅間山噴火により天明５年(1785)現地に移転再建と伝わり、吾妻川沿い北原に旧跡が残る。上野国四の宮、「延喜式神名帳」に載る古社で、獅子舞と算額が市指定重要文化財である。

社殿は権現造、本殿の向拝は、水引虹梁上の蟇蒲桁と拝殿内の彫刻兎毛通と共に、軒が唐破風であった造構を残す。身舎は丸柱、組物間に小斗を連ね、蟇股、蛇腹支輪、妻は二重虹梁大瓶束などを配す。三方縁に彫刻脇障子を置き、唐戸脇、側背面、縁下壁などを彫刻で飾る。拝殿は、本殿より装飾が簡素で、木鼻、海老紅股、脇障子などに彫刻を配する。拝殿造営は、棟札（市誌）より、大工に二代目出雲、彫工は小林丑五郎正路他とある。同誌には棟梁岸舜興が地相書を残すとあり、棟札と共に今回確認出来ず残念である。内部天井絵画に、弘化３年(1846)（吉沢）絢齋芳秀画の墨書が書かれている。

（貝磯博子）

27　(下南室)赤城神社（(しもなむろ)あかぎじんじゃ）

本殿

神社名	赤城神社	所在地	渋川市北橘町下南室311
旧社格	村社	主祭神	豊城入彦命
構造・形式	一間社流造(1.28m)、側面1間(1.04m)、向拝1間、板葺、覆屋		
建造年代（根拠）	文化元年(1804)／棟札	工匠	［本殿］棟梁：星野幸右衛門安信、他5名

本神社は、渋川市の東、赤城山南西麓の傾斜面に位置する。創建は、大同２年(808)に前橋市三夜沢の赤城神社より勧請したと伝えられている。

鳥居を潜ると、正面に拝殿、裏の覆屋に本殿が鎮座し、社殿東に平成18年(2006)再建の神楽殿がある。春の例大祭に奉納される下南室太々御神楽の養蚕の舞は県重要無形民俗文化財に指定されている。

本殿は、棟札により文化元年(1804)に建造された一間社流造板葺。５級の木階を設け、組高欄付の三方切目縁を廻らし、脇障子をたてる。身舎柱は、胡麻殻捩の丸柱を立て、腰・縁・切目・内法長押、頭貫で固め、向拝柱は几帳面、地紋彫の角柱を立て虹梁で繋ぐ。身舎組物は三手先、中備は本蟇股、向拝組物は、出三斗連三斗積上変形で中備は彫刻とし、海老虹梁で身舎と繋ぐ。柱間装置は正面桟唐戸、横板壁の上に彫刻が嵌込まれている。軒は二軒繁垂木で、妻飾は二重虹梁大瓶束、虹梁間は本蟇股、彫刻支輪とする。軸部の木鼻（獅子・象）、海老虹梁（龍）、胴羽目彫刻（竹林の七賢人）は素木であるが、蟇股、手挟（花・木）、支輪（波・雲）、小脇板彫刻（鯉の滝昇）に彩色が施されている。本建物は禅宗様を基調とした折衷様で、19世紀初期の神社建築を理解する上で貴重である。

（難波伸男）

写26－1　全景

写26－2　本殿向拝組物

写26－3　本殿側・背面彫刻

写26－4　拝殿向陵・天井

写27－1　全景

写27－2　正面

写27－3　右海老虹梁

写27－4　左側面胴羽目彫刻

写27－5　右側面胴羽目彫刻

34　（新井）八幡社（（あらい）はちまんしゃ）

本殿

神社名	八幡社	所在地	北群馬郡榛東村新井674
旧社格	村社	主祭神	品陀和気命
構造・形式	一間社流造、側面１間、向拝１間、銅板葺		
建造年代（根拠）	弘化４年(1847)／握宝珠刻銘	工匠	[飾師]西村和泉守（握宝珠刻銘）

嘉禄２年(1226)桃井遠江守義胤が相模国、鎌倉の若宮八幡宮を勧請して本社を創建。応永34年(1427)に洪水のため流失。永正10年(1513)に再建。明治35年(1902)12月に本殿、拝殿、神楽殿、抜殿が全部焼失。県道26号線より西、榛東中学校と相馬原駐屯地の中間に位置し、八幡ホタルの郷に鎮座する。東より鳥居をくぐると長い参道が続く。石段を上ると右手に神楽殿、その奥に社務所を配す。さらに石段を上ると正面に拝殿・幣殿・本殿、本殿の後ろには金比羅宮を祀る。

本殿は明治41年(1908)に江戸時代の建物を倉賀野から移築、倉賀野河岸大杉神社から譲り受け落成。明治42年(1909)10月遷宮式。本殿左側銅製握宝珠に弘化４年(1847)の刻銘。本殿は拝殿・幣殿より高く、素木で階見付、向拝柱、水引虹梁（前面・背面）、地覆、腰長押、脇障子など随所に地紋彫を施す。外部組物は三手先、妻飾は二重虹梁大瓶束、彫刻板支輪、斗が並び力股に彫刻を施す。内部の壇にも地紋彫があり、組物は出組。建造年代は弘化４年建築様式からもその時代と判断する。太々神楽や獅子舞は村指定重要無形民俗文化財であり、今も受け継がれている。

（森田万己子）

35　（長岡）大宮神社（（ながおか）おおみやじんじゃ）

本殿

神社名	大宮神社	所在地	北群馬郡榛東村長岡481
旧社格	村社	主祭神	武烈天皇
構造・形式	一間社隅木入春日造、側面１間、向拝１間、板葺		
建造年代（根拠）	寛政４年(1792)／棟札	工匠	不明

欽明天皇３年(542)大伴森多は、祖父金村が仕えた「武烈天皇」を祭神として創建。12世紀合併の宮姫大神は官衛を守護する神として、西御門（西帝）を守護していたと伝わる。県道26号線長岡の信号より南西に鎮座する。石段を上り鳥居をくぐると右手に社務所、左手に手水舎、武烈天皇が腰かけたと伝わる石が鎮座する。境内を進み石段を上ると正面に拝殿・幣殿・本殿（覆屋内）、左手に文庫蔵を配す。

本殿の虹梁、木鼻は朱塗に金の絵様、組物は装飾が少なく素朴である。向拝虹梁や建具、長押等に金物が付く。向拝柱に地紋彫。内部の厨子は素木で簡素である。建造年代は本殿にあった棟札より、寛政４年(1792)である。

拝殿は正面３間、側面２間、入母屋造、平入、千鳥破風付唐破風屋根、銅板葺。大正６年(1917)の暴風雨で倒壊、新築許可を受け、大正10年(1921)に落成。向拝木鼻は牓から正面を向く獅子、蟇股、兎毛通、懸魚に彫刻があり、水引虹梁背面に彫物師の刻銘「武州熊谷町　飯田芳雄」がある。

当社所蔵資料の中には、天正13年(1585)12月関白秀吉からの寄進状の他貴重な文書や修繕の棟札も残る。今後の調査を待ちたい。

（森田万己子）

写34－１　全景

写34－２　向拝

写34－３　正面見上

写34－４　海老虹梁

写35－１　全景

写35－２　向拝

写35－３　全景

写35－４　向拝正面

36　大山祇神社〔おおやまづみじんじゃ〕

本殿

神社名	笑山祇神社	所在地	北群馬郡榛東村新井2855
旧社格	無格社	主祭神	大山津見命
構造・形式	一間社入母屋造(0.94m)、側面1間(0.96m)、平入、向拝1間付、板葺、覆屋付		
建造年代（根拠）	19世紀中期／彫刻墨書	工匠	彫工 関左膳藤原正義(彫刻墨書)

創建は不詳。通称「十二社」と呼ばれ、笹熊地区の鎮守様として崇敬されてきた。高崎渋川線清野町の信号より南西の丘陵地に鎮座する。境内は「ろうばいの里」として整備され、憩いの場・交流の場となる。高崎・前橋方面が一望できる。長い参道を進むと石段と鳥居があり、左へ進むと「ろうばいの里」、正面を進み石段を上ると拝殿・幣殿・本殿（覆屋内）がある。参道脇に社殿社地整備記念碑が立ち、社殿右後方に境内社を祀る。

本殿は向拝水引虹梁に彫刻レリーフ、海老虹梁に絵様。正面の木鼻は破損し、側面に象の彫刻が付く。組物は二手先、手挟（花）、柱に地紋彫を施す。身舎外部の組物は三手先、尾垂木、正面中備に彫刻（龍）、斗が並ぶ。木鼻は獅子、彫刻板支輪。腰組は三手先、三方に縁が廻り、持送、脇障子が付く。側面の胴羽目彫刻裏に「利根郡 沼田住人 彫工 関左膳藤原正義」の墨書がある。関左膳藤原正義は沼田の三光院本堂、須賀神社境内社松尾神社本殿に彫物師として関わっている。建造年代は様式より19世紀中期と推定する。なお、幣殿・拝殿は大正２年(1913)の建造で、大工棟梁は板札より小暮万作源正策である。

（森田万己子）

39　瀧泉神社〔たきいずみじんじゃ〕

本殿

神社名	瀧泉神社	所在地	北群馬郡吉岡町上野田甲950
旧社格	村社	主祭神	弥都波能賣神
構造・形式	一間社流造、側面1間、向拝1間、柿葺、覆屋付		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

高崎渋川線バイパスと伊香保街道が交差する野田宿の信号より北西に位置する。水田を水害から守り豊作となるよう、弥都波能賣神を上野田の鎮守として祀った。創建は不詳。正五位泉矢明神が船尾滝から流れる滝沢川のほとりに祀られたので、瀧泉大明神と称するようになった。南より参道入口に古木の鳥居杉が立ち、杉並木が続く。その先に石の鳥居があり、正面に拝殿・幣殿・本殿（覆屋内）を配す。社殿は樹木に囲われた境内にあり、後方には袂石が鎮座する。別当寺は当社より東に位置する東福寺である。

本殿は彫刻が少なく、素木で素朴な造りである。向拝に板蟇股、連三斗、拳鼻が付く。北群馬郡の神社本殿に多く見られる地紋彫はない。身舎の桟唐戸、高欄に金物が付く。三方に縁が廻り、脇障子が付く。建造年代は建築様式より、18世紀中期と推定する。

拝殿は正面３間（5.78m）、側面２間（4.54m）、入母屋造、平入、向拝１間付、鋼板葺。設計書より大正10年(1921)の建造である。図面に森田庸二の名を記す。森田庸二(1884～1952)は上野田森田家（野田宿）の一族である。拝殿外部に漆喰で造られた額を奉納。

（森田万己子）

写36－１　全景

写36－２　正面

写36－３　向拝

写36－４　彫刻

写39－１　全景

写39－２　内部

写39－３　全景

写39－４　向拝

41　(上)八幡神社（(かみ)はちまんじんじゃ）

本殿

神社名	八幡神社	所在地	北群馬郡吉岡町南下180
旧社格	村社	主祭神	品陀和気命
構造･形式	一間社流造、側面１間、向拝１間、柿葺、覆屋付		
建造年代（根拠）	18世紀後期～19世紀初期／建築様式	工匠	不明

鎌倉時代に藤原八郎が桃井荘の地頭となり、桃井性を名乗ってこの地を治めた。その後新田氏の子孫である尚義が元八幡（新屋敷）に源氏の氏神である八幡宮を勧請。高崎渋川線バイパスの東、桃井城跡の南に鎮座する。桃井城跡は「城山みはらし公園」として平成31年(2019)に整備された。西に金剛寺が建つ。南より参道を進み石段の途中に鳥居、さらに進むと正面に拝殿・幣殿・本殿（覆屋内）がある。大蔵獅子舞は町指定重要無形民俗文化財。保存会があり子供達に継承されている。

本殿は明治末年に石祠を木造の神殿に造りかえたと伝わる。向拝は出組、虹梁に絵様、蟇股に龍、木鼻（獅子・像）が付く。身舎は出組、内法長押に地紋彫、蟇股（鳥）、彫刻板支輪、脇障子前面に彫刻。上部に彫刻はあるが比較的少ない。建造年代は建築様式より18世紀後期～19世紀初期と推定する。

拝殿・幣殿・覆屋は旗額より明治中期の建築である。前身鳥居に残る部材に「森田安五郎 世話人岸岩吉 明治参拾七年第拾月吉日」とある。昭和42年(1967)改修、請負人 遠藤利雄、大工 生方参行、板金 工高橋春吉。なお、拝殿・幣殿・覆屋は平成31年12月老朽化のため解体され、令和２年(2020)３月地元住民の尽力により新築された。

（森田万己子）

42　(下)八幡宮（(しも)はちまんぐう）

本殿

神社名	八幡宮	所在地	北群馬郡吉岡町南下848
旧社格	村社	主祭神	誉田別命
構造･形式	一間社入母屋造、平入、千鳥破風付唐破風屋根、向拝１間、覆屋付		
建造年代（根拠）	18世紀後半～19世紀前期／建築様式	工匠	不明

鎌倉時代、嘉禄元年(1225)足利義胤が桃井荘の地頭となり、源氏の氏神である八幡宮をこの地に勧請した。元禄９年(1696)９月16日創建。石祠を祀っていた。旧県道高崎渋川線、田中の信号より東に鎮座する。南から参道を進むと鳥居、正面に上屋及び拝殿が建つ。東に社務所、北東に公会堂、北に町指定重用文化財である鬼面の石祠を配す。古木のけやきは落雷により空洞となる。

本殿は素木で一部極彩色、向拝は出組、蟇股に飛龍、木鼻に獅子と獏、柱上部と虹梁に地紋彫。身舎は三手先、尾垂木、桟唐戸の脇に彫刻、脇障子の彫刻は正面に植物、背面に動物を施す。建造年代は建築様式より、18世紀後半～19世紀前期と推定する。

上屋及び拝殿は正面３間（6.62m）、側面５間（8.5m）、入母屋造、平入、鉄板葺。昭和44年(1969)、南下の棟梁･飯塚吉五郎により改修。建造年代は拝殿の絵様から19世紀前期と推定する。文化12年(1815)の桃燈・桃燈箱、嘉永時代の奉納木札、梅園重信謹書の奉納歌額が見つかった。梅園重信は上野田森田家（野田宿）の中興の祖である。獅子舞は一時途絶えていたが、昭和51年(1976)世話人が中心となり復活を遂げており、現在も継承されている。

（森田万己子）

写41－１　全景

写41－２　正面

写41－３　向拝木鼻

写41－４　側面上部

写42－１　全景

写42－２　内部

写42－３　正面

写42－４　向拝

43　野田神社〔のだじんじゃ〕

本殿

神社名	野田神社	所在地	北群馬郡吉岡町下野田996
旧社格	村社	主祭神	宇迦之御魂命
構造・形式	一間社流造、正面(0.73m)、側面1間(0.60m)、向拝1間付、板葺、覆屋付		
建造年代（根拠）	18世紀末期～19世期前期／建築様式	工匠	不明

稲荷社は永正年間(1504～1521)華蔵寺開山本山法印の観請創建。大社であった椿名神社は明治初年より村社野田神社となる。明治40年(1907)三狐神社に伊勢神社、山王社、八幡宮を合併、同41年(1908)に旧椿名神社を合併し、稲荷社を野田神社と改称した。旧県道高崎渋川線より東、下野田の華蔵寺隣に鎮座する。東より鳥居をくぐると灯籠、石段を上ると狛犬、正面に拝殿、覆屋内に本殿を祀る。社殿背面に境内社を配す。享保12年(1727)正一位を賜った宗源宣旨など年代を示す古文書が残る。

本殿は一間社流造、向拝1間付、向拝は出組、蟇股、木鼻（獅子・象）が付く。水引虹梁に彫刻レリーフ、海老虹梁・手挟に絵様。身舎は扉脇に彫刻（竹）、二手先、尾垂木、彫刻板支輪（波）、脇障子（狐）が付く。内部は天井表し。建造年代は建築様式より18世紀末期～19世紀前期と推定する。

拝殿は昭和７年(1932)旧椿名神社の拝殿を移築。基礎は切石、向拝はなく、組物は平三斗、素朴であるが重厚な存在感を示す。建造年代は虹梁の絵様など建築様式より、19世紀中期と推定する。

覆屋は文化年中(1804～1818)に建替えられた。

（森田万己子）

53　鏡宮神社〔かがみのみやじんじゃ〕

本殿

神社名	鏡宮神社	所在地	高崎市小八木町14
旧社格	村社	主祭神	天照皇神、岩凝命
構造・形式	正面1間、側面1間、一間社流造、切妻造、榑板葺き、向拝1間		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	笠原右膳／棟札

聖武天皇の神亀２年(725)太白星が真昼に輝いたので、そこを掘り下げてみたところひとつの古鏡を発見した。村人はそこに社殿を建立し二柱の神を祭り古鏡をご神体とした。その後長久年間(1040～1044)に地震が起き諸所に亀裂が生じたがこの境内だけ異常もなかった事で鏡宮神社と尊称された。高崎市西部、関越道前橋ICよりR17を南へ1.5km、小八木町北の交差点を右に300m程進み右手。道に面した木造朱塗りの鳥居を潜り石畳を進む左手に手水場あり、右には由来を記した看板、その奥に社務所がある。拝殿、幣殿、本殿と一体に建つ。裏は高木が並び、石造の小宮が安置されている。本殿は、明和６年(1769)笠原右膳により建築と伝えられているが、今回棟札の確認はできていない。拝殿中備の彫刻や、身舎の木鼻、虹梁支輪、脇障子などに彫刻。また、組物の形などは、禅宗様を表して、腰部の組物には連三斗、鬼斗などの様式により建造年代は18世紀後期と推定する。

（福田峰雄）

写43－1　全景

写43－2　側部

写43－3　正面

写43－4　向拝

写53－1　全景

写53－2　本殿

写53－3　向拝水引虹梁彫刻

写53－4　海老虹梁

54　（上並榎）日枝神社（〈かみなみえ〉ひえじんじゃ）

本殿

神社名	日枝神社	所在地	高崎市上並榎町1150
旧社格	村社	主祭神	大山咋命
構造・形式	一間社流造、切妻鉄板葺き、向拝１間		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

貞観年間(859～877)に天龍護國寺の鎮守として近江国坂本（現 滋賀県大津市坂本）日吉大社から勧請したと伝えられる。御祭神である大山咋命の名前の「くい（くひ）」は杭のことで、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者の神を意味し、山の地主神であり、また、農耕（治水）を司る神とされる。なお、大山咋神は里山に鎮まるとされることから、「古事記」の「日枝山」とは、比叡山全体というより、里山である八王子山（比叡山の一部）を指すとする説もある。上並榎町旧中山道より80m。その両脇には杉の大木が残る。天龍護国寺の西に隣接する。拝殿、幣殿も残る。近くにご神木のイチイがある。本殿は鉄板葺（改修前柿葺）である。建築様式特に虹梁などから18世紀後期と推定。ペンキ塗装直しが施され、内部を筋替えの鉄筋で構造補強をしている。本殿の建造年代は年代指標に欠くが、向拝や水引虹梁、妻飾りの豕扠首、比較的水平に近い海老虹梁、上向きの木鼻などの建築様式から18世紀後期と推定する。

（福田峰雄）

55　若宮八幡宮〔わかみやはちまんぐう〕

本殿

神社名	若宮八幡宮	所在地	高崎市下豊岡町甲1428
旧社格	村社	主祭神	大鷦鷯命
構造・形式	[本殿]正面１間、側面１間、一間社流造、切妻造銅板葺、向拝１間		
建造年代（根拠）	寛文２年(1662)	工匠	不明

永承６年(1051)源頼義・義家父子が建立したと伝えられる。その後、役が勃発、頼義、義家勧命を奉じ奥州安倍氏の反乱を鎮圧する途次、豊岡に仮陣屋を設け暫く逗留、軍勢を集め、戦勝を祈願するため建立、帰還の折りに再び立寄り戦勝を報告、額を奉納したという。寛文２年(1662)、幕府代官諸星惣左エ門政明らにより、社殿を大修築。高崎市の西、R18に環状線が合流する交差点「上豊岡町」から旧中山道を東へ進み右にある。参道を入ると随神門。更に東からの参道に合流し新しい鳥居の正面奥に社殿。境内西に社務所、その東に土俵が残る。代官諸星惣左エ門政明らにより社殿を大修築したとあるが詳細は不明。拝殿、幣殿、本殿の順に並び建つ。本殿の建造年代は、虹梁や木鼻などの唐草絵様、また、海老虹梁の反り具合や蟇股の形状から17世紀後半から18世紀前半と推定する。令和元年(2019)６月に外部、向拝等塗装がされている。

（福田峰雄）

写54－１　全景

写54－２　本殿西面

写54－３　向拝水引虹梁組み物

写54－４　厨子のご神体

写55－１　全景

写55－２　社殿全景

写55－３　本殿側面

写55－４　本殿水引虹

59　石上神社（いしがみじんじゃ）

本殿

神社名	石上神社	所在地	高崎市倉渕町三ノ倉1925
旧社格	無格社	主祭神	不都御霊命
構造・形式	一間社流造千鳥破風、向拝１間破風付・柿葺		
建造年代（根拠）	明治８年(1875)／棟札	工匠	不明

奈良県天理市の石上の分霊を勧請した神社といわれているが創建は不明である。明治時代の初め、民家から火災が発生し、類焼した為、明治８年(1875)12月に再建された。更に南側に県道が引かれた為、もとは北側から入っていた入口を南側から入るようになった。県道406号線を進んだ先に当神社がある。

本殿は一間社流造、千鳥破風、向拝１間破風付で屋根は柿葺である。間口３間奥行４間１尺、向拝角柱で水引虹梁には唐草模様が描かれ、正面木鼻は獅子、側面には獏が付す。また、水引虹梁の上には龍の浮彫彫刻が描かれている。海老虹梁には若葉の彫刻が施されている。身舎丸柱、組物は三手先。四方廻縁を廻らせ脇障子を立てる。身舎壁面には彫刻を施さず、簡略な様式から棟札にあるように明治初期の建築の特徴を現わされている。

長く倉渕村下郷鎮守の神社として地域の人々に慕われ、かつては子供たちが太鼓を叩いてお祭りをしていたという言い伝えがある。また、第二次世界大戦中まで獅子舞が盛んに奉納されていたという。

現在でも年２回の祭り（４月15日春祭り、10月15日秋祭り）が続いており、地域の人々が集まって境内の手入れなどを行っている。

（堤　雅之）

61　（川浦）諏訪神社（（かわうら）すわじんじゃ）

本殿

神社名	諏訪神社	所在地	高崎市倉渕町川浦1304
旧社格	無格社	主祭神	建御名方神
構造・形式	［本殿］一間社流造、側面１間、柿葺、千木大床３方縁、脇障子、親柱：逆蓮柱　［向拝］角柱面取り、水引虹梁、海老虹梁		
建造年代（根拠）	［本殿］万延元年(1860)／『倉渕村誌』	工匠	不明

神社の場所は、高崎市へ合併後に新設された英語村の前である県道より1.5mほど上に上がったところが境内地である。石の鳥居をくぐれば拝殿である。社殿左手の奥には神社関連（境内末社４社）の祠がある。本殿は一間社流造、側面１間、屋根柿葺きで東面している、正面に１間の向拝を設け大床は背面を除く３方に回し、脇障子を設ける。親柱は逆蓮柱、軒は正面、側面ともに、二間繁垂木。創立として戦国時代、武田氏に仕えた紋助、紋兵の兄弟がこの地に帰農し土着した。信仰の熱い２人は　諏訪神社の社を建築すべく発起人になり、努力して社殿を造る。時に元和２年(1616)。その後のことは、初代氏子総代、宮下茂雄氏によれば長野県上田市にある生島足島神社の分祠として４軒の宮下を名乗る住民により現在まで運営が保たれている。

一方、明治45年(1912)編の『烏淵村郷土誌』は当諏訪神社について、「大字川浦字堀ノ沢ニ在リ、建御名方命ヲ祭ル本殿、幣殿、ノ二宇アリ、万延元年(1860)ノ建立ニシテ……」とある（『倉渕村誌』昭和50年12月25日発行1038Ｐによる）。この記述を考慮しつつ、本殿および拝殿の建物は万延元年(1860)の建立とする。

（城田富志夫）

写59－１　全景

写59－２　本殿屋根

写59－３　木鼻

写59－４　向拝彫刻

写61－１　全景

写61－２　本殿向拝

写61－３　本殿妻飾

写61－４　拝殿

64　月波神社〔つきなみじんじゃ〕

本殿

神社名	月波神社	所在地	高崎市箕郷町善地1641
旧社格	村社	主祭神	大山津見神
構造・形式	一間社流造、鉄板葺		
建造年代（根拠）	18世紀初期／建築様式	工匠	不明

人皇27代安閑天皇の元年(531)３月創紀し、(『箕郷町誌』昭和50年８月発行より)その後平安時代初期（794年以降）車の三郎が勘解由使に命じられ車持神社を建てた。これが月波神社の前進であるという。本社棟札によると天正８年(1580)に車持大明神本社再建とある事から、その頃には本殿が建造されていたと考える。県道126号線を榛名方面へ向かうと鳥居「月並神社」があり、その先に本殿がある。

現在の本殿は江戸中期以降に再建されたものであり、一間社流造で向拝１間が付く。向拝は三ツ斗で水引虹梁の上には龍の彫刻がある。海老虹梁には若葉の彫刻が施され、身舎に水平に掛け、古式なところもみられる。壁面には背面に至るまで彫刻が多様に充填されており、建造年は建築様式からは18世紀初期とみられる。特に本殿左右の彫刻はケヤキ板に浦島物語が描かれており実に見事なものであるが、彫師の系譜は不明である。組物は向拝平三斗で身舎は出組、正面側面に三方切目縁を廻し、手摺の端には擬宝珠高欄がつく。また背部には脇障子を立てる。

誠に榛名神社の参道にあり、かつては榛名神社の月並祭に礼拝していたという風格を現わしているようである。現在は毎年秋に例祭が行われている。

（堤　雅之）

65　赤城若御子神社〔あかぎわかみこじんじゃ〕

本殿

神社名	赤城若御子神社	所在地	高崎市箕郷町柏木沢1261
旧社格	村社	主祭神	豊城入日子命、他３祭神
構造・形式	一間社流造、正面千鳥破風付、向拝１間軒唐破風付、棰板上仕上柿板葺（当初柿板葺）		
建造年代（根拠）	天明２年(1782)／棟札写	工匠	大工 関口文治、彫工 関口仙治他２名

神社は箕郷町の東部、県道広馬場の交差点より南に位置する。境内は南入、「覚満大明神」額が掛る石鳥居を潜り、両脇に石灯篭を見て社殿となる。北に石宮と石碑が多数置かれる。大化年間(645～650)豊城入日子命を祭神とし、柏木沢字鼓塚に創立、その後現在地に移り、三祭神を加えて宮を造り、「覚満大明神」と称すと伝わる。明治６年(1873)赤城若御子神社と改め、大正８年(1919)村社となる。

本殿は一間社流造、向拝は刻線彫柱上に連三斗と彫刻木鼻、水引虹梁上に彫刻を置き、籠彫の手挟２対と桁受、海老虹梁を配す。身舎は刻線彫の長押、胡麻幹決り丸柱上部に三手先と木鼻、尾垂木を四方に置く。正面扉脇、両側・背面胴羽目、脇障子に中国詩人図の彫刻を配し、上部に彫刻蟇股、三重の軒支輪、桁・母屋隠が取付く。本殿築造は社伝『神社記念書類』の棟札写に天明２年(1782)とあり、『大工棟梁建築一代記』（県史資料編10）では、安永10年(1781)、大工　田沢の関口文治、彫工　息子仙治と門人２名と記されている。前掲載書の持主は棟梁青山数馬の生家である。昭和初期増築の拝殿向拝の彫刻裏には、「彫工　熊谷源太郎八代孫　新井松雲」の刻銘がある。

（貝磯博子）

写64－１　全景

写64－２　幣殿・本殿

写64－３　本殿

写64－４　本殿側面　彫刻

写65－１　全景

写65－２　拝殿　向拝彫刻

写65－３　本殿

写65－４　本殿　向拝組物

66 （稲荷台）稲荷神社（(いなりだい)いなりじんじゃ）

本殿、拝殿

神社名	稲荷神社	所在地	高崎市稲荷台町347
旧社格	郷社	主祭神	宇迦之御魂神
構造・形式	[本殿]一間社流造柿葺、側面1間、唐破風、千鳥破風 [拝殿]正面2間、側面3間入母屋瓦、平入		
建造年代（根拠）	[本殿][拝殿]19世紀前半／建築様式	工匠	[本殿]不明 [拝殿]不明

稲荷神社は高崎市稲荷台町にある。前橋市元総社町の隣接地である県道10号線上の稲荷台町の交差点を北上、神社の目印は隣接地にある高さ4.5mもある大国主命の石碑。稲荷神社の鳥居は拝殿の正面にあり、本殿は拝殿と一体となっている覆屋の中にある。江戸時代初期総社藩主秋元候の命により、藤井八左衛門を先に22軒にて稲荷台に入植し、稲荷神社を勧請し代を継ぎ護持してきた。祭神の「宇迦」は五穀豊穣、稲の霊を指すが、やがてその地を守る屋敷神や商業神として祭られるようになった。本殿向拝の木鼻正面は獅子、側面は獏。水引虹梁中備、蟇股は彫刻。海老虹梁の形は江戸後期の特徴がある。組物は連三斗、身舎の腰組は四手先、周縁は三方切目縁。一部壊れている部分があるが高欄は擬宝珠高欄、妻飾は二重虹梁大瓶束、軒支輪。彫刻は腰組部より各壁面から妻壁面まで施されている。

拝殿は正面2間、側面3間入母屋瓦葺1間向拝付。木鼻は獅子頭、手挟、虹梁蟇股は彫刻で飾られている。建立時期について境内看板によれば元禄15年(1702)となっているが、本殿の建築様式から推定すれば19世紀前半が妥当と思う。

（城田富志夫）

72 （秋葉）諏訪神社（(あきば)すわじんじゃ）

拝殿

神社名	諏訪神社	所在地	藤岡市東平井1108
旧社格	村社	主祭神	建御方神
構造・形式	正面3間、側面4間、入母屋造、妻入、向拝1間、瓦葺		
建造年代（根拠）	安永9年(1880)／棟札	工匠	斎藤神蔵寿任 関口文治郎

藤岡市西南に位置し、鮎川右岸で平井城址の東北鬼門の位置に在る。通りに南面して鳥居があり参道を北に進むと随神門があり、さらに左に神楽殿、右に社務所、正面に拝殿、奥に本殿となる。

社伝によると、天長元年(824)7月信濃国小県郡上田領下の郷諏訪神社より勧請し村の氏神とし、延長6年(928)3月社殿を建立遷座する。応永28年(1421)関東管領上杉憲実の平井城鬼門除神として7月27日遷宮されたとされる。その後明治43年(1910)6月27日、秋葉神社、雷電神社を合祀し現在に至る。

拝殿は正面3間、側面4間、入母屋瓦葺で妻入瓦葺向拝付。向拝部分は唐破風銅板葺とする。身舎は円柱で向拝柱は角柱である。四方に高欄の無い縁を廻し、水引虹梁上の龍、手挟、木鼻、板支輪、尾垂木など見事な彫刻が施されている。彫刻の作者は勢多郡上田沢村の関口文治郎有信と福田源次郎禎訓であり、大工は黒熊村の斎藤新蔵寿任他十名であることが棟札から分かっている。また建造年も同じく棟札や向拝礎石に刻まれた文字から安永9年(1780)であることが分かっている。

（羽鳥 悟）

写66－1 全景

写66－2 本堂向拝

写66－3 本堂妻飾

写66－4 拝殿向拝

写72－1 拝殿全景

写72－2 虹梁 手鋏

写72－3 内部彫刻

写72－4 礎石刻文字(安永9年)

74　鬼石神社〔おにしじんじゃ〕

本殿

神社名	鬼石神社	所在地	藤岡市鬼石721
旧社格	村社	主祭神	伊邪那岐命、伊邪那美命、磐筒男命
構造・形式	[本殿]一間社流造、銅板葺		
建造年代（根拠）	[本殿]19世紀前期／建築様式	工匠	不明

鬼石市街県道13号前橋長瀞線から西面に折れたところに鳥居があり、その参道を30m程にある石段を登ると境内となる。右に神楽殿、正面に拝殿、奥に幣殿さらに本殿と続く。

社伝によると、文明年間(1469～1487)年頃奥州磐城の国、乱起こりて没落し、上野国鬼石の地に落ちて居住し岩城明神として社を構えたとされる。元禄16年(1703)５月15日に宣旨があり正一位を授けられた文書が残っている。

本殿は一間社流造、１間向拝付銅板葺屋根で身舎は丸柱、向拝柱は角柱とする。浜縁浜床四方高欄付の大床を廻し、脇障子を付ける。向拝水引虹梁は浮彫の梅が彫られ、中備に龍の彫刻で、虹梁先には正面に獅子、側面に獏の彫刻が付く。全体に花鳥の彫刻で満たされている。

建造年を証明する棟札は不明であるが、建築様式から、19世紀初めの建造と推定される。

拝殿は正面３間、側面２間、入母屋瓦葺、１間向拝付き平入で軒は二軒半繁垂木とする。彫り物は水引虹梁に絵模様、上に龍、獅子鼻が彫られている。建築様式から、建造年代は江戸末期、19世紀後期とみる。

神楽殿は切妻銅板屋根、唐破風で妻入り、軒は半繁垂木で、虹梁に絵模様で彩色されている。建築様式から建造年代は19世紀中期とみる。

（羽鳥　悟）

写74－１　拝殿全景

写74－２　拝殿　虹梁

写74－３　本殿側面

写74－４　本殿正面

76　（譲原）愛宕神社〔（ゆずりはら）あたごじんじゃ〕

本殿

神社名	愛宕神社	所在地	藤岡市譲原2451
旧社格	村社	主祭神	大国主命
構造・形式	一間社流造、板葺		
建造年代（根拠）	18世紀後半／建築様式	工匠	不明

鬼石市街から国道462号線を神流町方面に向かい、左に下久保ダムを見る右手の石垣の上に在る。石段を手前に３m程登ると石製の鳥居があり、さらに数段の石段の奥に覆屋があり、四つの末社とこの本殿がある。創建、社歴等は定かでない。

本殿は一間社流造、板葺で身舎向拝共方柱で三方に高欄付、彫刻の入った脇障子と大床を廻す。正面は浜縁と浜床を持ち、向拝の水引虹梁には若葉と渦巻模様が彫られており、中備に蟇股を載せる。木鼻は単純な形状で、正面を向いて獅子鼻が付く。向拝の組物は連三斗と出組である。海老虹梁には、渦と若葉が彫られているが反りは極端ではない。身舎は地長押と内法長押を廻し、正面に桟唐戸を設け、柱間装置は横板の組込みである。中備は正面のみ蟇股の痕跡がみられ、妻飾は虹梁と大瓶束で、身舎の組物は無く持ち送りのみである。彩色は全体に朱色に塗られ、垂木、渦若葉の中を黒色としている。丸桁と内法長押に菱形模様が彩色されている。

棟札等建造年代の資料は見当たらないが、建築様式から、18世紀後半の建築と推定できる。

（羽鳥　悟）

写76－１　本殿全景

写76－２　組物　虹梁

写76－３　組物　海老虹梁

写76－４　脇障子

79 （富岡）諏訪神社〔(とみおか)すわじんじゃ〕

市神様（旧本殿）

神社名	諏訪神社	所在地	富岡市富岡1130
旧社格	村社	主祭神	建御名方命、八坂刀實命
構造・形式	一間社流造、側面１間、向拝１間銅板葺軒唐破風、千鳥破風付、背面軒唐破風		
建造年代（根拠）	19世紀前期／建築様式	工匠	矢崎豊前、善司、房之進(大隅流)

国道254号線と主要地方道前橋・安中・富岡線が交わる交差点の北東で、宮元町通りの北方向に位置する。境内南の鳥居から参道が真っ直ぐ中央を北へ延び、その先に拝殿・本殿を配す。左手県道側に手水舎・旧拝殿、右手に住宅、社務所が並ぶ。本殿北の境内は一部駐車場で中央から西へ末社を祀る。市神様（旧本殿）は境内の北西の隅の県道際に位置する。慶長17年(1612)宮崎代官中野七蔵が、富岡新田開発の先掛けとして、同郡宮崎村から遷座し、上町・中町住民の鎮守として信仰を受け、神社の祭礼を中心として市が開かれ、開市の神「市神」として崇敬された。

当建物は大隅流矢崎善司制作といわれ、40年程前に彫刻が盗難にあったという。現在、境内の北西に市神様として設置されている。屋根は正面・背面共に唐破風とした流造である。身舎は三手先の組物とし、木鼻に象、壁、支輪に見事な彫刻を施している。また、向拝の水引虹梁、透かし彫り海老虹梁、木鼻に象・獏の彫刻もまた見事で見ごたえがある。しかし、はめ板彫刻が盗難のため欠損してしまっている。

（野口忠男）

写79－１　外観：正面・側面

写79－２　側面：三手先組物

写79－３　向拝正面：唐破風

写79－４　背面：三手先、唐破風

83 伏見神社〔ふしみじんじゃ〕

本殿

神社名	伏見神社	所在地	富岡市妙義町下高田甲1312
旧社格	無格社	主祭神	建御名方神
構造・形式	正面0.87m、側面0.72m、入母屋流造瓦葺、１間向拝付		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

大正２年(1913)10月２日、旧鹿島宮、旧諏訪神社、旧磨墨神社、旧加茂神社を合祀し伏見神社と改称した。大正３年(1914)10月30日、旧鹿島宮（高田村大字下高田字久原）の本殿、拝殿を現所在地に移し、祝詞舎を新築した。旧磨墨神社は宇治川合戦の先陣争いで梶原景季が乗馬した名馬（磨墨）が祀られていた珍しい神社であった。妙義町重要文化財に平成17年７月19日指定された大絵馬が拝殿に掲げられている。また、拝殿の格天井の彩色画も馬の絵である事から、旧磨墨神社の信仰をよく残している神社である。平成18年(2006)に覆屋が新築され、その中に本殿が納められている。

本殿は一間社流造、側面１間、柿葺、二軒繁垂木、正面に軒唐破風、千鳥破風、大棟に千木と堅魚木、千鳥破風の棟に千木と堅魚木を載せる。正面に浜床、正面側面の三方に大床を廻し、脇障子を付ける。建造年は不明であるが、反りが大きい海老虹梁、透彫の手挟、彫刻がはみ出た蟇股、透彫の脇障子、向拝柱、長押に彫られた地紋彫などから18世紀後期と推定する。

（久保田和人）

【参考文献】
『妙義町誌（下）』妙義町　平成５年

写83－１　全景

写83－２　唐破風／兎毛通／木鼻

写83－３　向拝・海老虹梁

写83－４　本殿内部

92　砥沢神社〔とざわじんじゃ〕

本殿

神社名	砥沢神社	所在地	甘楽郡南牧村砥沢277
旧社格	村社	主祭神	柿本朝臣人麿、品陀和気命、大日靈命
構造・形式	一間社流造、側面1間、向拝1間、柿板葺、千鳥破風、棟に置千木・鰹木		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

県道下仁田・臼田線が砥沢に入った道路の南側、南牧川との間に位置する。道路より石段を下りると中段に鳥居があり、そこから本殿はさらに石段を下りた平地に建つ。昔は鳥居のところを道路が通っていたそうである。末社は鳥居の脇に位置する。本殿・末社は覆屋により覆われている。旧称、人麿社と云う。往古南牧の五社（下仁田の地戸・青倉の羽黒・小沢の熊野・月形の赤岩八幡・尾沢の人麿）として、白鳳年間（７世紀後半）既に世に知られた名社と云う。明治12年(1879)12月27日、人麿神社、赤岩八幡神社と大字砥沢字日向の神明神社を合祀して、砥沢神社と改称する。本殿は鎌倉北条氏の時、青砥藤綱がこの地に来りて創建す、と伝える。身舎の柱頭・中備は、三手先組物ですべて覆われているのが特徴である。縁を三方に廻し、腰組・柱間装置は簡素な造りであるが、水引虹梁上部の龍の彫刻は相当手の込んだものである。以上の構造様式から建造年代は18世紀後期と推定する。高欄の架木・脇障子板の欠損、内法長押の剥離が見られた。末社は規模が本殿よりさらに小さく、簡素な造りである。側面・背面の板壁に彫刻が見られる。

（野口忠男）

写92－1　外観：正面

写92－2　側面・背面：三手先

写92－3　向拝：浜床、腰組

写92－4　末社：正面・側面

95　小幡八幡宮〔おばたはちまんぐう〕

本殿、拝殿

神社名	小幡八幡宮	所在地	甘楽郡甘楽町小幡1
旧社格	村社	主祭神	応神天皇
構造・形式	［本殿］一間社流造、側面1間、向拝1間唐破風付　［拝殿］正面3間、側面2間、切妻瓦葺		
建造年代（根拠）	［本殿］19世紀前半／建築様式 ［拝殿］19世紀前半／建築様式	工匠	［本殿］不明 ［拝殿］不明

小幡の県道197号線沿いの第１区住民センター北側に社号標があり、参道を東に進んだところに位置する。門前の鳥居があり、神門の石段を登り抜け、更に石段を上に上がると正面に社殿があり拝殿・本殿と連なる。覆屋により本殿は全て覆われている。又境内南側奥に神楽殿がある。

織田家が、正保２年(1645)一社を創建し、領内の高田村（現富岡市妙義町）字新光寺より八幡宮を勧請し産土神として之を尊崇した。その後三代将軍家光が社領七石を寄進したと伝わる。

本殿は向拝の水引虹梁・海老虹梁龍彫刻・中備龍彫刻・獅子鼻・象鼻・唐破風懸魚彫刻・手挟、身舎の正面・側面・背面壁彫刻脇障子彫刻、全て素木、彫刻師不明であるが海老虹梁龍の透彫彫刻は見ごたえがある。

拝殿は西向きで、外装は朱塗主体で一部役物に極彩色、内部の格天井の天井画は中央大枠に龍、周りに小枠が90ある。36の小枠に藤原公任撰による「三十六歌仙」極彩色の肖像画に歌及び名が記されている。その他54の格間には、花鳥・人物・動物類が画かれている（小幡八幡宮拝殿の天井画　町重文）以上のことから、両建物の建造年代は建築様式から見て江戸後期と推定する。

（久保喜由）

写95－1　正面：向拝

写95－2　向拝：海老虹梁

写95－3　側面：壁脇障子彫刻

写95－4　拝殿：格天井画

100 （上川田）砥石神社（(かみかわだ)といしじんじゃ）

本殿

神社名	砥石神社	所在地	沼田市上川田町2251
旧社格	村社	主祭神	倭建命
構造・形式	一間社流造板葺、覆屋あり		
建造年代（根拠）	享保４年(1719)／市史棟札写	工匠	不明

県道235号線沿い沼田台地と利根川を挟んで対岸に位置し、背面を杉林に囲まれ南向きに鎮座する。これより北に向かうと発坂峠を越えて名胡桃城址に至る古い街道である。文明２年(1470)倭建命　東夷御征伐の際に剣を研がれたと言われる砥石を、御神体として地頭の寄付により創建された。現在まで地域の人々により受け継がれている。沼田名木百選「川田砥石神社のスギ」が境内にある。

南より数段の石段を登り、石鳥居を潜ると右に舞殿（現在は社務所）正面に拝殿・本殿覆屋が続き、左奥に蔵がある。覆屋内部には一間社流造、正面向拝１間付、正面1.8m側面1.6mの本殿がある。本殿は享保４年(1719)建造で、以前の社殿は慶長17年(1612)に一度焼失、その後再建されている。身舎は、切り石の上に石場建で丸柱を立て根がらみは貫で固める。柱上を出三斗実肘木付きとし、頭貫・内法長押を配し、三方に縁を廻し高欄脇障子は無い、妻には虹梁を渡して大瓶束笈形付を置く、屋根は板目葺で二軒吹寄せ垂木である。向拝は柱上に連三斗を置き、中備は板蟇股、虹梁・海老虹梁が渡されている。全体に朱で塗られていて、彫刻は懸魚に花文様、木鼻・虹梁・蟇股に唐草文様が見られる。

（櫻澤　斉）

101 大原神社〔おおはらじんじゃ〕

本殿

神社名	大原神社	所在地	沼田市利根町大原字東宿1224
旧社格	村社	主祭神	日本武尊
構造・形式	[本堂]一間社流造本瓦棒葺、側面１間、覆屋あり		
建造年代（根拠）	[本殿]江戸末期／建築様式	工匠	[本殿]不明

明治40年(1907)８月８日諏訪神社、天静神社、愛岩神社を武尊神社に合併し、大原神社と改称した。

沼田市東部旧利根村大原字東宿に位置する。境内南側に鳥居を配し、中央に拝殿、幣殿、本堂があり、北側が旧会津街道に面している。御輿を安置する蔵もあり、御神木を含めた、樹木で囲われている。

本殿は覆屋内に鎮座し、一間社流造銅板瓦棒葺、軸部は丸柱方柱、海老虹梁水引虹梁があり、組物は出三斗、手挟である。軒は、向拝二軒繁垂木、背面二軒垂木である。彫刻は、虹梁、高欄、蟇股、木鼻、拝懸魚、降懸魚に施されている。年代指標に欠くけれども背面に彫刻がなく、反りの大きい海老虹梁、手挟、虹梁に見る唐草絵様から、江戸末期と推定する。雨や風の影響が少なく、きれいな状態で保存されている。

（三代一佳）

写100－１　神社全景

写100－２　正面

写100－３　妻飾り

写100－４　向拝組み物

写101－１　全景

写101－２　本殿正面

写101－３　彫刻

写101－４　高欄

103　(日影南郷)武尊神社〔(ひかげなんごう)ほたかじんじゃ〕

本殿

神社名	ふりがな 武尊神社	所在地	沼田市利根町日影南郷166
旧社格	村社	主祭神	日本武尊命
構造・形式	[本殿]一間社流造銅板本瓦葺、側面1間、覆屋あり		
建造年代（根拠）	江戸末期／建築様式	工匠	不明

武尊神社は沼田市の東部、旧利根村南郷地区に位置する。沼田大間々線に面した敷地で、すぐ北側には、しゃくなげの湯の構内である。南側から鳥居を抜けると拝殿、幣殿、本殿と連なる。西側には、忠魂碑があり、その奥にはお堂がある。敷地内は、樹木で囲われている。

武尊神社は、もともと各地にあった神社を屋敷添、武尊神社に合併し、さらに明治45年(1912)３月８日根利の赤城神社、諏訪神社、大山祇神社、武尊神社を合併し、武尊神社になったのである。雨や風の影響も少なく、良好な保存状態である。

身舎の壁、脇障子に彫刻はないが、海老虹梁、蟇股（龍）、木鼻（獅子、獏）、懸魚（鶴）の彫刻が見事である。三手先の組物、二手先の腰組、浜床の腰組など重厚な作りとなっている。

（三代一佳）

105　白佐波神社〔しらさわじんじゃ〕

本殿、八幡宮

神社名	ふりがな 白佐波神社	所在地	沼田市白沢町高平字一本木154
旧社格	村社	主祭神	日本武尊命
構造・形式	[本殿]一間社流造板葺、側面1間、覆屋あり [八幡宮]一間社流造板葺、側面1間、覆屋あり		
建造年代（根拠）	[本殿]19世紀中期／建築様式 [八幡宮]19世紀中期／建築様式	工匠	不明

沼田市旧白沢地区、国道120号線沿い白沢小学校東側うつぶしの森の中に位置する。南側の入り口から鳥居を抜けると、拝殿、幣殿、本殿と連なる。境内は樹木で囲われている。

白佐波神社は、明治41年(1908)19社祭神43座を、村社武尊神社へ合併し、白佐波神社と改名した。軸部は素木で角柱、丸柱、海老虹梁、水引虹梁、内法長押。

組物は、一手先。彫刻は、海老虹梁、水引虹梁、木鼻（獅子）懸魚、蟇股（龍）に施されている。向拝柱の上に皿斗、虹梁に見る波模様の唐草絵様、蔓若葉の建築様式から19世紀中期と推定する。

八幡宮の構造は、正面1.7尺（0.52m）一間社流造板葺、側面2.5尺（0.76m）、覆屋あり、軸部は素木で角柱、海老虹梁、水引虹梁、組物は大斗肘木、出三斗である。軒は二軒垂木、装飾は虹梁大瓶束、蟇股、大斗肘木、彫刻は、海老虹梁、水引虹梁、木鼻、懸魚、蟇股に施されている。虹梁の蔓若葉の特徴から、19世紀中期と推定する。

（三代一佳）

写103－１　全景

写103－２　外陣・内陣

写103－３　外陣欄間彫刻

写103－４　内陣欄間彫刻

写105－１　全景

写105－２　彫刻、獅子

写105－３　正面

写105－４　正面

108　（土出）諏訪神社（（つちいで）すわじんじゃ）

本殿

神社名	諏訪神社	所在地	利根郡片品村土出2017
旧社格	村社	主祭神	建御名方神
構造・形式	一間社流造、向拝、唐破風		
建造年代（根拠）	文化元年(1804)再建／棟札	工匠	[棟梁]吉野杢之進藤原光秀

『片品村史』によると永保３年(1083)７月創立、明治10年(1877)に村社となった。

石段を上り境内に入ると石造鳥居の先には入母屋造鉄板平葺の覆屋があり、その中に本殿が安置されている。西側に倉庫、鳥居と覆屋の間に石灯籠が一対配置され、道祖神などの石塔が３基並んでいる。

本殿は手斲加工の石畳上に切石の基壇、亀腹を設置し、それ以外は全て木製である。屋根は寄棟部、平部共板屋根丸棒桟葺とし、軒付には軒先瓦の唐草絵様が施されている。軒は二軒繁垂木とする。身舎（丸柱）は三手先、妻二重虹梁、木鼻殳、詰組とし、妻飾は大瓶束及び琵琶板（彫刻）とする。腰組は三手先とする。向拝（角柱）は唐破風で、組物は三段積上げ、蟇股、詰組とし、海老虹梁で、身舎に繋ぐ。身舎丸柱には、護摩柄決りを施し、向拝角柱を、地紋彫りとしている。側面背面には彫刻板が嵌め込まれている。組高欄を四方に廻し、逆蓮宝珠柱にて留める。以上の建築様式及び棟札から、年代を19世紀初頭と推定する。

側面、背面にある彫刻板の彫は深い。組高欄は四方、向拝の宝珠柱で留める。宝珠の型式は禅宗様の蓮華宝珠としている。

平成11年(1999)に修理の記録があり、組高欄、登高欄、階等にその痕跡がある。

（石坂孝司）

109　（針山）稲荷神社（（はりやま）いなりじんじゃ）

本殿

神社名	稲荷神社	所在地	片品村針山108
旧社格	村社	主祭神	保食命、日本武尊命
構造・形式	一間社流造柿板葺千鳥破風付、側面１間、向拝唐破風付、覆屋あり		
建造年代（根拠）	万延元年(1860年)／棟札	工匠	不明

稲荷神社は、片品村針山地区の中心から北西に２㎞山に入った武尊山の末端尾根の、崖下の岩穴を背に、小さな平地に穴観音と並んで、鎮座している。

明治41年(1908)武尊神社を蚕影神社に合併して稲荷神社（蚕稲荷神社）と改称した（『片品村史』より）。

本殿内部の棟札には、万延元年(1860)正遷宮とあり、創立はもっと古いと考えられる。

本殿の軸部は、丸柱、海老虹梁、水引虹梁、組物は、出組、連三斗、三斗、手挟である。軒は、三間繁垂木、二軒繁垂木、彫刻は、虹梁、高欄、唐破風、木鼻、腰組肘木、向拝角柱に地紋彫りが施されている。壁面の彫刻が厚肉彫、海老虹梁が段違いになっていることから、江戸時代末期と推定できる。

（三代一佳）

写108－１　全景

写108－２　正面

写108－３　側面壁板彫刻

写108－４　向拝柱頭

写109－１　全景

写109－２　本殿正面

写109－３　彫刻

写109－４　棟札

124 （相俣）日枝神社（(あいまた)ひえじんじゃ）

社殿、神楽殿

神社名	日枝神社	所在地	利根郡みなかみ町相俣1457
宗派	村社	主祭神	大山咋命
構造・形式	[本殿]正面2.91m、側面3.40m、三間社入母屋造板葺 [神楽殿]正面9.10m、側面6.73m、入母屋造鉄板葺 [覆屋]正面6.56m、側面7.53m、入母屋造、鉄板葺		
建造年代（根拠）	18世紀後半～19世紀初期／建築様式	工匠	不明

由来は、鎌倉幕府が開かれた建久３年(1193)年３月中の申の日に創建し、祭神は、又吉と言う村の若者が、建久４年(1194)癸玄の年に日枝山に登り分霊し山王大権現と申奉したと言い伝えられる。その後、明治10年神社合併時に日枝神社と改称、明治42年赤谷地区の冨士新田浅間神社と合併し指定村社となる。

旧街道より長い階段をあがり４本の杉の大木と石の鳥居をくぐると正面に社殿の覆屋、右に神楽殿を配す。覆屋の中に鎮座する本殿の構造は、三間社入母屋造で、切石基壇と石造亀腹、腰羽目板には波模様の透彫、胴羽目板には松竹や牡丹の彫刻、脇障子は透彫の鷹、木鼻には獅子や獏、向拝柱上には、海老虹梁と手挟、正面扉にも文様を彫込み両脇にはあやめの彫刻、唐破風の兎ノ毛通しには鶴の彫刻、木鼻の獅子、羽目板の波や松などの彫は力強さが感じ取られる。

神楽殿は、赤谷川流域にいくつかあった神楽殿の特色で、舞台が左右に移動し奥から別の舞台がせり出して使用する造で、長さ４間半、巾２尺、厚さ２寸の歩板を渡して花道にしていた板が、床下に保存されている。

（増田久美子）

写124－１　社殿正面

写124－２　海老虹梁

写124－３　神楽殿

写124－４　覆屋

129 羽根尾神社〔はねおじんじゃ〕

本殿

神社名	羽根尾神社	所在地	長野原町大字羽根尾字宮原100
旧社格	村社	主祭神	建御名方命
構造・形式	一間社流造、側面１間、向拝１間、板葺、覆屋		
建造年代（根拠）	文政３年(1820／棟札	工匠	不明

旧草津街道と旧信州街道の交わる交通の要衝で栄えた羽根尾宿の東端部に位置し、杉林で囲まれた境内に西向きに鎮座する。天明３年(1783)の浅間押しでは流出を免れた。本社は建御名方命を祀る諏訪神社と称していたが、明治41年(1908)に諸社を合祀し羽根尾神社と改称した。春期祭典では海野氏支配時代（16世紀）から続くと伝わる町重無民の獅子舞が奉納され、地区を練り歩く。

社殿は拝殿、幣殿、本殿覆屋の権現造形式を取る。覆屋内には本社の諏訪大明神のほか２社が祀られている。本社は一間社流造の間口・奥行共に３尺弱の小さな規模で、切石基壇に据えられた欅・素木造の社である。身舎軸部の組物（出組）、木鼻及び彫刻（妻飾・支輪）は端正な表現とされ、向拝木鼻丸彫、胴羽目は肉厚の彫刻とされている。本殿覆屋内には十数枚の棟札及び祈祷札が納められている。本社は明和３年(1766)に建造され、その後、文政３年(1820)再経営の願いで建造（棟札には造立と記載）された。建物は江戸後期の特徴を示している。また、同年及び翌年に浅間・白根大明神と天満宮が建立されている。両脇の社がこの浅間白根社と天満宮であると推測される。

（岡田敦志、小池志津子、長井淳一）

写129－１　本殿(中央)、摂社(両脇)

写129－２　身舎側面彫刻

写129－３　向拝木鼻彫刻

写129－４　向拝正面見上

130　養蚕神社〔ようさんじんじゃ〕

本殿

神社名	養蚕神社	所在地	吾妻郡長野原町大字与喜屋字萩原314
旧社格	村社	主祭神	保食命他二十二柱
構造・形式	一間社流造、側面1間、柿板葺、覆屋付		
建造年代（根拠）	寛保3年(1743)／棟札『吾妻地方の文化財』	工匠	棟梁　横尾忠右衛門

与喜屋は三原荘に属し地名は源頼朝に由来するとも伝わる。慶長年間(1596～1615)に荒神神社として与喜屋の総鎮守とする伝承があるが、創立は不詳である。地元では荒神さんと呼ばれ、天明3年(1783)泥流の逆流に境内地と桜が残ったと伝わる。

社殿は拝殿、幣殿、本殿覆屋の権現造形式を取る。本殿は一間社流造の小さな社である。彫刻は向拝の木鼻と手挟、蟇股にみられるのみで、他の部位は拳鼻を基本とした、簡素でおとなしい意匠である。塗装においても朱塗とされ、刻線部に黒を差す程度としている。こうした特徴は、棟札の建造年代を裏付けている。拝殿は入母屋造平入・唐破風の向拝付である。簡素な佇まいに茅葺屋根をのせた姿が地域性をうかがわせる。

昭和53年(1978)県調査『吾妻地方の文化財』に掲記の棟札によれば、当本殿は明治42年(1909)に合祀された与喜屋の萩原諏訪神社の本殿とする。全体的に江戸中期の特徴がみられ棟札の寛保3年(1743)でよいといえる。養蚕神社への改称は萩原秋水による。5月15日例大祭の太々神楽は、日本神話を題材にしたもの9座が奉納され、神輿は繭型、平成30年(2018)まで投稿による俳句が本殿前の木製鳥居に掲げられていた。

（岡田敦志、小池志津子、長井淳一）

131　（狩宿）諏訪神社〔（かりやど）すわじんじゃ〕

本殿

神社名	諏訪神社	所在地	吾妻郡長野原町大字応桑1305－1
旧社格	なし	主祭神	建御名方命、健甕槌命
構造・形式	二間社流造、側面1間、榑葺、向拝2間軒唐破風付、覆屋付		
建造年代（根拠）	元文3年(1738)／棟札	工匠	大工　竹渕音三郎

旧信州街道万騎峠を越え下った狩宿集落から左に折れ、ほどない山中林間に鎮座する。建久年間(1190～1199)の源頼朝浅間野狩猟の狩屋、諏訪大神を奉斎に由来をもつ神社である。

社殿は拝殿・幣殿・覆屋が権現造の形式になり覆屋内に本殿がある。間口4尺2寸・奥行5尺、二間社流造の小さな社で、諏訪大明神と浅間大明神を祀っている。一見欅の素木造とみられるが、塗装痕跡から往時は朱塗りであった。また、羽目板、軒等、各所に修理跡がみられ丁寧に修繕しながら今日まで引き継がれてきた様子がうかがえる。全体的に意匠が簡素であり（組物／出三斗、木鼻・虹梁／唐草文様）、具象彫刻がみられず、海老虹梁も直線的である。建造年代は棟札が残され元文3年(1738)である。建築的特徴から妥当と思われる。

本殿覆屋と拝殿はかつて茅葺きであった。古道脇の山中にひっそりと佇む姿は今も悠久の地勢を示している。平成7年(1995)には都内劇団による野外公演が奉納されている。

（岡田敦志、小池志津子、長井淳一）

写130－1　本殿正面側面

写130－2　本殿向拝木鼻彫刻

写130－3　本殿側面見上

写130－4　拝殿正面

写131－1　全景

写131－2　本殿　正面

写131－3　本殿　側面

写131－4　本殿　向拝正面見上

132 （応桑）諏訪神社（(おうくわ)すわじんじゃ）

本殿

神社名	諏訪神社	所在地	吾妻郡長野原町大字応桑新田16
旧社格	村社	主祭神	建御名方命、八坂刀売命 他
構造・形式	一間社流造、側面１間、板葺、向拝１間、覆屋付		
建造年代（根拠）	江戸中期／建築様式	工匠	不明

参道鳥居は旧国道146号に面し旧狩宿関所跡より西200m程に位置する。応桑は往古に狩宿村の新田であったという。狩宿村にも諏訪神社が置かれている。村誌、郡社寺録とも由緒は詳らかでない。境内には合社や末社群が祀られ、延享４年(1747)の灯篭も据えられている。南西の小高い尾根には愛宕社がある。

社殿は拝殿、幣殿、本殿覆屋の権現造形式を取る。本殿は間口３尺１寸の一間社流造の小さな社である。三方に大床を付け、組物を出三斗、二軒繁垂木とする。向拝の虹梁は直線的で、木鼻、組物は簡素な形式である。全体的におとなしい意匠（木鼻・虹梁／唐草文様）であり、具象彫刻は中備の蟇股にみられるだけである。全体的に朱塗が施されている。建造年代は棟札等なく不明であるが、隣接する狩宿諏訪神社の形式と類似しており同時期の建造年代（江戸中期）と推測される。

集落の旧狩宿茶屋本陣は国登録有形文化財、境内には明治期に入植した旧館林藩の秋元氏別荘（別荘では北軽井沢最古）を移築し社務所とする。境内に杉と欅の合体木があり、近年縁結の神社として参拝者が多い。

（岡田敦志、小池志津子、長井淳一）

139 白鳥神社〔しらとりじんじゃ〕

本殿

神社名	白鳥神社	所在地	吾妻郡東吾妻町奥田967
旧社格	村社	主祭神	倭建命
構造・形式	一間社隅木入春日造(1.17m)、側面１間(0.95m)、向拝１間、銅板葺（当初板葺）		
建造年代（根拠）	18世紀前期／建築様式	工匠	不明

創建は不明であるが、村誌『あがつまあずま』では貞享３年(1686)の奥田村検地水帳に「宮建有之白頭明神境内別当仙光院」とあり、前橋藩家老高須隼人の奥書きがあるとしている。また、正徳２年(1712)正一位白頭大明神の宗源宣旨が存在している。名称は幾多の変遷をして明治12年(1879)には白鳥神社と改称している。東吾妻町役場東支所から南に400mほど入った丘陵地に東向きに鎮座している。参道入り口から切石の階段を登って境内に入ると正面が拝殿で背後に幣殿と覆屋が一体として配置されている。

本殿は、一間社隅木入春日造で組物は身舎が出三斗、向拝は連三斗で中備は身舎向拝共に彫刻を配した本蟇股である。妻飾りは二重虹梁、蕪懸魚、大瓶束笈形付で、軒は二軒繁垂木である。大床は三方に樽縁を廻し、板脇障子と跳高欄を設けている。海老虹梁は大きく反っているが、他の虹梁と同様に唐草絵様は渦の巻きが少なく若葉は簡素である。木鼻は身舎に拳鼻、向拝に象鼻を付けているが、いずれも同様に渦の巻きが少ない。町指定重要文化財の彫刻（扁額）の制作時期や唐草絵様の様子から建造年代は18世紀前期であると推定する。

（宮田賢二）

写132－１　全景

写132－２　本殿正面

写132－３　本殿正側面

写132－４　本殿側面妻見上

写139－１　全景

写139－２　本殿正面

写139－３　向拝水引虹梁・象鼻

写139－４　海老虹梁

140　鳥頭神社（とっとうじんじゃ）

本殿、拝殿

神社名	鳥頭神社	所在地	吾妻郡東吾妻町矢倉899
旧社格	村社	主祭神	大穴牟遅神、宇迦之御魂神
構造・形式	[本殿]一間社隅木入春日造(1.95m)、側面1間(1.57m)、柿葺　[拝殿]正面3間(6.56m)、側面2間(4.72m)、入母屋造平入鉄板葺		
建造年代（根拠）	[本殿]18世紀中期／建築様式 [拝殿]19世紀前期／建築様式	工匠	不明

創立は不詳、『吾妻郡社寺録』によれば、本殿は建久年間(1190～1199)の建立で明和元年(1764)に建替えたとされている。元禄7年(1694)正一位鳥頭大明神の宗源宣旨が存在している。JR吾妻線矢倉駅の東、国道145号線の脇に、天明3年(1783)の浅間山大噴火で被災し空洞となった神代杉がある。その脇の参道を入ると境内の中央に拝殿があり、背後に覆屋が接続して本殿が鎮座している。

本殿は一間社隅木入春日造柿葺で、向拝を軒唐破風としている。組物は三手先と連三斗で腰組は二手先である。切目縁と跳高欄を四方に廻し、嵌込彫刻の脇障子を設けている。木鼻は丸彫で獅子と象である。総欅の素木で堅実な装いであり、虹梁や木鼻の唐草の様子から建造年代は18世紀中期と推定する。拝殿は、正面3間、側面2間、入母屋造鉄板葺で軒唐破風を付け、軒は二軒繁垂木で彫刻の板支輪を設けている。組物は出組と連三斗で中備は本蟇股と龍の彫刻である。木鼻は丸彫の獅子と象で、水引虹梁の上に龍、兎毛通には鳳凰の彫刻を配している。虹梁や木鼻の唐草の様子から建造年代は19世紀前期と推定する。

（宮田賢二）

写140－1　全景

写140－2　本殿上部

写140－3　本殿下部

写140－4　拝殿正面

144　（川内一丁目）赤城神社（かわうちいっちょうめ）あかぎじんじゃ

本殿

神社名	赤城神社	所在地	桐生市川内町1-甲552
旧社格	村社	主祭神	大穴牟遅神、倉稲魂命他
構造・形式	正面1間、側面1間、向拝1間、1間1戸流造、カラー鉄板葺、平入		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

桐生吾妻山の尾根を西に降りた川内町一丁目を南北に走る道路の東側に位置する。道路から東に向かう石段を22段目の石鳥居を潜り、再び44段登った広場正面に拝殿、そのまま石畳の通路を超え階段を3段上ると屋根だけの覆屋の中に本殿が鎮座する。田原太郎成家（智明上人(1173～1248)）が雨乞いのために赤城沼の明神を勧請したと云われている。寛延年間中(1748～1751)現在地に遷座し、維新まで薗田氏が代々祭祀を務めた。明治5年(1872)村社となり、明治41年(1908)には吾妻神社、その末社稲荷神社、琴平神社を合祀した。本殿は1間1戸流造、カラー鉄板葺、平入とする。コンクリート打べた基礎に丸柱4本、向拝柱は角柱2本の構成で、組物は連三斗実肘木付、一手先、向拝は連三斗実肘木付とする。中備えは蟇股、軒は二軒繁垂木、妻飾は妻虹梁、猪目懸魚とする。大床は三方切目縁組高欄を廻し脇障子を立てる。彫刻は側面壁に（鶴と亀、付と兎）脇障子（登窓と波、瀧と波）の透彫が嵌め込まれていたと云うが現在は破損している。塗装も白を基調に朱・黒・緑を彩色した痕が残る。村の歴史を語る重要な建物である。

（飯山　繁）

写144－1　全景

写144－2　本殿

写144－3　向拝

写144－3　虹梁、組物

145　(川内五丁目)赤城神社((かわうちごちょうめ)あかぎじんじゃ)

本殿・幣殿・拝殿

神社名	赤城神社	所在地	桐生市川内町5-2352
旧社格	無格社	主祭神	大穴牟遅神、大山津見神、大雷神
構造・形式	正面1間、側面1間、向拝1間、1間1戸流造、木賊葺、平入		
建造年代（根拠）	江戸末期／建築様式	工匠	彫工：岸赤八

県道338号線を北上し、川内五丁目上勇進会館北に位置する。県道から西、鳥居を抜け石段を上ると正面に社殿があり、拝殿→幣殿→本殿（覆屋内）と連なる。背後は急峻な裏山の崖が迫り、崩れそうである。社殿はほぼ東向きで、建物の南側に石幢・八坂社・琴平社・蚕影社の石宮を置く。本殿は1間1戸流造木賊葺とし、自然石亀腹石に土台を廻し丸柱4本、向拝は角柱2本の構成である。組物は拳付出三斗尾垂木付二手先実肘木付であり、向拝は拳付出組連三斗実肘木付とする。中備は彫刻付蟇股とし、妻飾りは二重虹梁太瓶束に力持ちの彫刻、懸魚とし、軒は二軒繁垂木とする。大床は三方切目縁に組高欄を廻し、脇障子を付ける。正面、側面、背面壁・建具、脇障子に透彫彫刻を嵌込む。正面木鼻（獅子）、水引虹梁（松）、海老虹梁（龍丸彫）、手挟（松透彫）、木鼻（獏）等の彫刻を多用し、見ものである。彩色は白色の塗装痕が残り一部朱色を用いているが素木を基本とする。赤城神社の創建は定かではないが、仁田山城の築城と関係があると云われており、城を守る神として要害を兼ねたもので、地域の人々から信仰を受けているものである。

（飯山　繁）

147　(新川)雷電神社 ((にっかわ)らいでんじんじゃ)

本殿

神社名	雷電神社	所在地	桐生市新里町新川1876
旧社格	無格社	主祭神	大雷命（おおいかづちのみこと）以下11神
構造・形式	一間社流造(0.88m)、側面(0.77m)、板葺		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

桐生市西部の旧新里村、上電新川駅と清里駅の中間部にある雷電山に位置する。雷電山の東から参道を上り、鳥居を抜けて石階段を上ると社殿正面にでる。社殿は、本殿、拝殿からなり、幣殿はなく高低差を階段により繋いでいる。本殿は、覆屋により保護されている。

『御大礼記念　群馬県勢多郡神社誌』（大正5年(1916)5月31日発行）には、現在の本殿覆屋及び拝殿の写真が掲載されている。『上野国郡村誌3　勢多郡』に明治10年(1877)10月の位置の記述がある。

本殿は、一間社流造、板葺である。自然石積み基壇に据える。向拝柱は丸柱で、水引虹梁・海老虹梁の先に木鼻を設ける。虹梁の絵模様は、渦若葉である。向拝の上部の透かし彫りと片方の木鼻に極彩色が施されている。三方大床、脇障子、階5級が付く。組高欄の木口にも朱の彩色がある。

本殿内の雷神彫刻の裏面に墨書で「新川村　宮田□□　大正13年(1924)」とある。

虹梁の渦若葉の絵模様、正面扉脇に彫刻がある、大床は三方にあり、後ろに廻っていないなどから、建造年代は、18世紀後期と推定される。

（西村良子）

写145－1　全景

写145－2　本殿

写145－3　向拝、虹梁彫刻龍

写145－3　彫刻虹梁

写147－1　全景

写147－2　虹梁、木鼻

写147－3　海老虹梁

写147－4　蟇股、虹梁大瓶束

148　(関)八幡宮（(せき)はちまんぐう）

本殿

神社名	八幡宮	所在地	桐生市新里町関381
旧社格	村社	主祭神	譽田別尊
構造・形式	一間社流造(0.91m)、側面1間(0.80m)、柿葺		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

桐生市西部の旧新里村、国道353号の北側斜面に位置する。市道から山間に入り、鳥居を抜け、65段の石段を上ると社殿（拝殿、本殿）がある。幣殿から木製階段を上ると覆屋に覆われた本殿がある。南面傾斜地にあり、かつては階段下の社務所で直会等を行っていた。今は無く、樹木が繁茂している。

鳥居は3基あり、1番目の鳥居に「正一位　稲荷大明神」石製額が掲げられ、支柱には安永八巳亥(1779)八月の銘がある。

本殿は、素木造で壁のない覆屋であるが保存状態がよく、地方の小木殿の形式を残している。氏子総代からの聞取によると、昭和37年(1962)5月に覆屋の屋根を銅板葺きに替え、平成31年(2019)4月に土台と拝殿の床の修理を行った。

一間社流造柿葺で、千木、勝男木3本が付く。基礎は乱組基壇の上に岩組となる。浜床擬宝珠登高欄、大床擬宝珠高欄があり、階5級が付く。向拝柱は角柱、水引虹梁、出三斗、海老虹梁、連三斗は、簡素である。身舎は丸柱であり、切目・内法長押、頭貫が付く。木鼻は拳であり、中備には蟇股がある。軒は二軒繁垂木で、妻飾は一重虹梁大瓶束、蛙股拝蟇懸魚である。

ほぼ水平の海老虹梁、簡素な虹梁の唐草絵模様から建造年代は、18世紀中期と推定される。

（西村良子）

150　赤城大明神(醫光寺境内)(あかぎだいみょうじん(いこうじけいだい))

本殿

神社名	赤城大明神	所在地	桐生市黒保根町上田沢浦丸326
旧社格	無格社	主祭神	大巳貴命
構造・形式	一間社流造、平入棧葺き、正面1.12m、側面1間(1.00m)、覆屋あり		
建造年代（根拠）	文化6年(1809)／棟札	工匠	不明

桐生市黒保根町上田沢浦丸山醫光寺境内に近接している。醫光寺の山門をくぐりすぐ右手の道を登り薬師堂を左に見て石段36段登ると覆屋に保護されて本殿がある。薬師堂を眼下に見て、さらにその下に本堂を見下ろす高台の狭い平坦地にある。

本殿は切妻造鉄板葺の覆屋の中に鎮座している。一間社流造で豊富な彫刻を施している。正面の扉・四周の壁・脇障子・三重の軒支輪・その他各所に透彫又は高肉彫の彫刻で埋め尽くされている。特に左右の海老虹梁に巻き付く登り竜・下り竜一対の丸彫彫刻の躍動感が素晴らしい。

向拝の化粧軒は三軒繁垂木、背面は二間繁垂木で屋根は棧葺にしている。腰組、二手先組（透彫肘木）、大床には擬宝珠高欄、本体上部は三手先組で三重の軒支輪が設けられ、比較的大きめの立派な社である。向拝中備の透彫彫刻、複雑な組物、二重虹梁彫刻充填、背面に回る大床、透し彫りの脇障子、手挟、透彫肘木を用いた二手先の腰組物、彫刻板支輪、外壁四面の彫刻、大きく反って段違いの海老虹梁、浮彫の唐草絵様、などのことから、19世紀前期の建築物の特徴を備えている。このことから、建造年代は棟札とおり文化6年(1809)の建造である。

（荻野　浩）

写148－1　全景

写148－2　正面

写148－3　側面

写148－4　浜縁、木階

写150－1　正面

写150－2　側面

写150－3　妻壁見上げ

写150－4　海老虹梁・手挟み

155　三柱神社〔みはしらじんじゃ〕

本殿、阿夫利神社

神社名	三柱神社	所在地	太田市押切町512
旧社格	村社	主祭神	豊受姫神、稚産霊神、大雷神
構造・形式	三間社流造(1.82m)、側面1間(1.36m)、向拝1間、銅板葺		
建造年代（根拠）	嘉永5年(1852)／棟札	工匠	武州妻沼村　宮大工　林門左衛門昌道

押切は利根川の大洪水により親村より分離、元亀2年(1571)に独立。この時村の鎮守として創建されたのが三柱神社である。衣食住農耕の神として村民の崇敬を集めてきた。

南北に細長い敷地の南中央に参道があり階段を上がった正面に拝殿。その奥に板塀に囲まれた本殿がある。参道西側には阿夫利神社（雨乞いに用いられた）、三柱の石宮。本殿北側に天神様がある。

本殿は、虹梁、手挟、壁面、脇障子、柱など随所に彫刻が施されている。龍が巻き付き一体で彫られている海老虹梁は見事である。建造当時の棟札を有し、宮大工・林門左衛門昌道の名が残されているが彫師の名はない。利根川対岸には国宝歓喜院聖天堂があり、宮大工が同じである事から彫師も聖天堂にかかわったものが手掛けたのではないかと推測できる。このことは村民の誇りであったという。

また、棟札より当神社の別当寺は東隣にある徳性寺で、地元名士中島知久平（現在の SUBARU の前身、中島飛行機創設者）の墓所がある。本殿前の灯篭は知久平の父、桑吉の奉納によるものである。

（久保田眞理子）

156　（岩松）八幡宮〔(いわまつ)はちまんぐう〕

本殿

神社名	八幡宮	所在地	太田市岩松町251
旧社格	郷社	主祭神	誉田別命
構造・形式	正面1間、側面1間、流造銅板瓦葺、向拝1間付		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

太田市の南西に位置する。南道路より境内に入る。石柱を進むと狛犬、木製の鳥居と続き、拝殿へ進む。拝殿と本殿は離れ、拝殿から一度地上に下り、門を抜け本殿に至る。本殿北に社、拝殿東に倉庫、南に社務所、西に新田神社、いぬま公園（旧宮司宅）がある。

新田義重が仁安年中(1166～1169)京都大番のおり、山城国久世郡男山より、小松を持ち帰りこの地に植え、石清水八幡を勧進し岩松八幡宮と称した。以来犬間（猪間）郷を岩松郷に改めたという。

本殿は、棟に置き千木一対・堅魚木5本を載せる。身舎組物は二手先、腰組は持送の上出組拳鼻付である。向拝組物は連三斗の上に6斗並ぶ。

彫刻は身舎に懸魚、降懸魚（雲、花）、笈形（雲）、蛇腹支輪、板支輪（雲・波）、中備（鳥・花）、尾垂木（龍・獅子）、虹梁、脇障子、腰持送（雲）、壁面に彫刻は無い。向拝は中備（龍の嵌込彫刻）、手挟（牡丹）、木鼻（獅子・獏）、水引虹梁（蔓草）、海老虹梁（波の刻線彫）は反りが強い。彩色は水引虹梁、海老虹梁、木鼻等に朱が残る。笈形、正面扉は黒く、軒支輪は彩色があったと思われる。以上の建築様式より、当建物の建造年代は18世紀中期と推定する。

（伊藤美保子）

写155－1　本殿正面

写155－2　海老虹梁

写155－3　壁面彫刻

写155－4　阿夫利神社

写156－1　全景

写156－2　向拝

写156－3　背面

写156－4　身舎組物

157 （尾島）雷電神社〔（おじま）らいでんじんじゃ〕

本殿

神社名	雷電神社	所在地	太田市尾島町169-1
旧社格	無格社	主祭神	大雷神
構造・形式	正面1間、側面1間、入母屋造、平入、柿葺、正面唐破風・千鳥破風付、向拝1間付		
建造年代（根拠）	寛政9年(1797)／『源緒録』	工匠	不明

太田市の南西に位置する。県道142から参道を北に向かうと境内に出る、南北に長い境内を東西の道路により2分され、北・南敷地それぞれに石鳥居がある。本殿は北敷地中央の覆屋の中にある。本殿南に拝殿、西に屋台蔵、北西に納札所、南東に建物がある。創立は不明。

建造年代は、金井家の「源緒録」に寛政9年(1797)との記載がある。建築様式より妥当と推定する。身舎組物は、三手先、腰組は持送の上出組拳鼻付、向拝組物は連三斗の上に6斗並ぶ。妻飾は大瓶束、虹梁（波）、組物（出三斗）、千鳥破風は、束、虹梁（若葉）、組物（大斗絵様肘木）。彫刻は建物全体に配され、兎毛通（鳳凰）、組物の尾垂木（鳳凰・龍・象・獅・龍・獏）、木鼻（獅子）、板支輪上（鶴・雲）、下（菊・波）、正面中備のみ蟇股（花）、正面柱間（鶴・竹）、壁東面（獅子・牡丹・松・瀧）、背面（老人と童・松・瀧）、西面（鷹・松・瀧）、脇障子右左（人・花・雲）、腰埋込彫刻（亀と波）、持送（雲）、亀腹の覆板（波）。向拝は妻飾（麒麟）、虹梁（若葉刻線彫）、中備嵌込彫刻（龍）、水引虹梁（梅浮彫）、海老虹梁（若葉刻線彫）、手挟（牡丹）、木鼻（獅子・獏）。柱・長押等は地紋彫である。極彩色と推測されるのは、2段の板支輪、向拝妻飾。朱は水引虹梁、海老虹梁、木鼻、組物部彫刻、頭貫、桁など屋根廻り。

（伊藤美保子）

写157－1　全景

写157－2　向拝

写157－3　背面

写157－4　腰組

159 貴先神社〔きさきじんじゃ〕

本殿・拝殿

神社名	貴先神社	所在地	太田市新田木崎町甲637
旧社格	村社	主祭神	須勢理比売命
構造・形式	［本殿］正面1間、側面2間、切妻造本瓦葺、妻入 ［拝殿］正面3間、側面2間、入母屋造本瓦葺		
建造年代（根拠）	19世紀中期／建築様式	工匠	不明

須勢理比売命は大国主命の后だった事から貴先という社名になったと云われ、貴先から木崎という地名が生まれた。明治初頭の神仏分離令までは神仏混合形式を取り長命寺が祭事を執り行っていた。境内は境内社や石祠、石碑、石灯籠等も数多く建立されている。「大正九年(1920)十一月二十六日明治三十九年勅令第九十六號ニ依リ神饌幣帛料供進神社ニ指定セラル」とあるが詳細な創立は不明。

形式は本殿と拝殿が一体となった社殿となっている。社殿全体は色彩が施されているものではなく素朴であるが、外部の彫刻は見事で、木鼻の龍や水引虹梁の絵様、懸魚の鳥の彫刻も凝っている。本殿背面の彫刻蟇股内に梟が存在するのも特徴的である。身舎組物は、舟肘木と大斗肘木、中備に蟇股を施す。

拝殿においては、本殿と一体で造られており、屋根葺き替え改修工事の形跡がある。彫刻等も見受けられ、身舎に懸魚（鳥彫刻）、手挟（鳥彫刻）、向拝に水引虹梁（中央まで伸びた唐草絵様）、海老虹梁（絵様）、木鼻（正面：龍　側面：龍）が見られる。以上の特徴より19世紀中期と推定される。

（山本和之）

写159－1　正面

写159－2　側面・背面

写159－3　妻飾　懸魚

写159－4　向拝　海老虹梁

160 （新田市）神明宮（（にったいち）しんめいぐう）

本殿（外宮・内宮）

神社名	神明宮	所在地	太田市新田市町3060
旧社格	村社	主祭神	天照大御神
構造・形式	［内宮］正面1間、側面1間、切妻神明造板葺、平入 ［外宮］正面1間、側面1間、切妻神明造板葺、平入		
建造年代（根拠）	19世紀中期／建築様式	工匠	不明

本殿の外宮・内宮は、覆屋の中に鎮座し、左手前が内宮、右手奥が外宮とされている。創立は不明。その他境内には末社として八坂神社等が存在する。

神仏分離以前より存在した敷地のため、境内に寺跡地が存在。その他奉納両宮御神燈があり「寛政五年癸丑九月吉日」と刻まれている。寛政5年(1793)内宮外宮共に覆屋に覆われているが、内部は一間社の切妻神明造の木造が存在するのみである。内部にご神体は無いが、内宮は須佐之男命、外宮は豊受姫命を祭神としている。

外宮内宮共に、正面1間、側面1間、切妻神明造板段葺、平入の形式をとる。棟持柱の存在と土台は存在するが、縁から高欄が存在しない。年代特定仕様には欠けるが以上のことより19世紀中期と推定される。

（山本和之）

161 （市野井）生品神社（（いちのい）いくしなじんじゃ）

本殿

神社名	生品神社	所在地	太田市新田市野井町1972
旧社格	県社	主祭神	大穴牟遅神
構造・形式	一間社流造、正面1間、側面2間、切妻造本瓦葺、妻入		
建造年代（根拠）	19世紀前期／建築様式	工匠	不明

創建は不詳。社伝によると肥沃の爾布太地に豪族と一族が土着し開拓、集落を経世し、祠を造営したとされる。平安時代の上野国神名帳には「新田郡従三位生階明神」として記載される古社である。主祭神は大国主（大穴牟遅神）であるが、平将門を祀っているという伝説もある。

元弘3年(1333)5月、新田義貞の鎌倉攻めの際に、旗揚げをした場所とされている。境内にはそれに由来する旗揚塚や床几塚があり、毎年挙兵日である5月8日には「鏑矢祭」が執り行われる。それ故、生品神社境内は国指定史跡に指定されている。

本殿は身舎、向拝共に虹梁、支輪、脇障子等に極彩色彫物が見事に施され、特に柱間装置には正面以外の三面に見事な彫刻が施された板壁が存在した痕跡が見受けられる。惜しくも現在は大半が剥がれ落ちてしまっているが、痕跡からも見事さは容易に想像できる。また、海老虹梁は段違い、縁が三方のみ、壁面が腰には存在しない。水引虹梁が単純であり、上部に彫刻極彩色の特徴より、19世紀前期の建築様式であると推定される。

（山本和之）

写160－1　内宮正面

写160－2　内宮内部

写160－3　外宮正面

写160－4　外宮内部

写161－1　全景

写161－2　側面

写161－3　正面

写161－4　向拝　水引虹梁

162 （大久保）赤城神社（（おおくぼ）あかぎじんじゃ）

本殿（覆屋）・幣殿・拝殿

神社名	蓁彧神社	所在地	太田市大久保町135-1
旧社格	村社	主祭神	大己貴尊
構造・形式	［本殿］正面1間、側面1間、向拝1間、1間1戸流造、柿板葺、平入		
建造年代（根拠）	19世紀中期～後期／建築様式	工匠	不明

太田藪塚IC の南西旧あかがね街道沿いに位置する。大久保村はかつて東山道が通り、保元の頃（1156～1159）この地に館を構えていた大窪太郎が創建したと伝えられているが、数百年間荒廃のままであった。幕府による足尾銅山の開発が進み、銅山奉行となった伊能景隆はこの地に人馬確保のため新しい村を創設した。寛文2年（1662）近隣の村から移住した人達により大久保村が誕生した。寛文5年（1665）この新しい村に赤城神社として鎮座した。境内は西南から入り右側の赤鳥居を潜り参道正面に拝殿・幣殿・本殿覆屋を置く。参道の西側道路に沿って由緒を刻む石碑があり、北側には八幡社のほか5つの石宮を置く。拝殿と幣殿は入母屋造瓦葺妻入、覆屋は切妻造瓦葺とする。本殿は大谷石の基壇上に1間1戸向拝1間流造柿板葺とし、身舎丸柱、向拝柱角柱である。縁は切目板擬宝珠高欄を廻し脇障子付とする。組物は出三斗、連三斗、中備は蟇股、胸飾は二重虹梁、蟇股、懸魚、桁隠とする。軒は正面二軒繁垂木、背面一軒繁垂木、支輪とする。彫刻は腰持送り、木鼻、水引虹梁上部龍、正面壁両脇、蟇股、桁隠に施され、彩色は珠・白・黒とする。

（飯山　繁）

写162－1　全景

写162－2　本殿

写162－3　向拝

写162－3　彫刻

164 （足次）赤城神社（（あしつぎ）あかぎじんじゃ）

本殿、拝殿

神社名	蓁彧神社	所在地	館林市足次町494
旧社格	郷社	主祭神	大己貴命、豊城入彦命、他八柱
構造・形式	［本殿］三間社流造（2.17m）、面面2間（1.68m）、平入、向拝1間、柿葺き　［拝殿］正面3間（3.67m）、側面2間（3.87m）入母屋造、平入、向拝1間、銅板葺		
建造年代（根拠）	［本殿］江戸末期／建築様式　［拝殿］19世紀中期／建築様式	工匠	［本殿］三村正利　［拝殿］絵馬の絵師：北尾重光

館林北部、旧矢場川沿いの自然堤防上に鎮座する。建仁2年（1202）、新田義重が勢多郡三夜沢の赤城本宮から勧請した。その数日後に義松が誕生し、これを喜んだ義重がさらに幸福を祈るため、新たに社殿を造営し新田家代々の守護神と称したという。明治6年（1873）八か村の郷社となった。

本殿は丸柱の身舎に越組で支えられた縁を四方に廻す。全ての柱頭に獅子頭を付し壁全面に彫刻を嵌め、背面の腰にムカデの彫刻を施す。文久2年（1862）の三村家文書には「文久二壬戌年」と仕様が記されている。

拝殿は向拝の手挟に鬼のような形相をした異様なムカデの彫刻が施されている。向拝虹梁の浮彫と身舎虹梁の刻線彫絵様に製作年代の差が見られる。天保3年（1832）奉納の大工絵馬には加工の様子が描かれ、頭貫木鼻は風蝕が少なく、刻線彫の巾も広いため19世紀中期の建造と推定する。

赤城信仰に関わりが深いムカデを多用しており、千匹ムカデ絵馬とムカデと梅樹絵馬（北尾重光筆）は市指定重要文化財である。

（小島恵理子）

写164－1　全景

写164－2　本殿

写164－3　拝殿向拝

写164－3　拝殿手挟

165　正田稲荷神社〔しょうだいなりじんじゃ〕

本殿

神社名	(疋田)稲荷神社	所在地	館林市栄町3-1
旧社格	無格社	主祭神	倉稲魂命
構造・形式	一間社流造(0.56m)、側面1間(0.50m)、向拝1間千鳥破風、軒唐破風付、桧皮葺		
建造年代（根拠）	天保年間(1830～1844)／三村家文書	工匠	[大工]羽生　三村正利(七代目)

館林駅西、城下町の南西部に鎮座する。現在は正田醤油㈱の敷地内にあり、正田稲荷神社と呼ばれている。寛文年間(1661～1673)に勧請されたという。目車町総鎮守として館林城小泉口門に祀られていたが、明治43年(1910)に郷社長良神社（代官町）に合祀された。それを機に正田家の所有となり移転、栄町と正田醤油㈱の守護神として祀られている。平成14年(2002)館林駅西口駅前広場の整備事業の際に再度現在地へ移転した。社殿は国登録有形文化財になっている。

平成14年移築の際に拝殿は旧材を活かし改修、覆屋は新材にて再建されている。移築前の拝殿は文政11年(1828)に建立された（棟札より）。

本殿は、天保年間(1830～1844)に羽生の宮大工三村正利が手がけたとされる。劣化が少なく土台の形状から移築前より室内に安置されていたと思われる。素木を基調とし要所に赤色を施す。一間社流造の小さな社であるが、向拝柱に巻きついた龍の彫刻が目を引く。身舎の柱頭に獅子頭を付し、背面の獅子頭は45度回転させ斜めを向く。浜縁下にキツネの彫刻が嵌められ、扉は宝尽くしとなっている。２月に初午を執り行うなど、今も大切に守られている。

（小島恵理子）

166　青梅神社〔あおうめじんじゃ〕

本殿、幣殿、拝殿、絵馬堂

神社名	菅稲神社	所在地	館林市本町2-8-22
旧社格	無格社	主祭神	菅原道真、素盞嗚命、猿田彦命
構造・形式	［本殿］一間社流造(0.75m)、側面1間(0.63m)、向拝1間、銅板葺　［幣殿］正面1間(2.72m)、側面2間(3.71m)切妻造、桟瓦葺　［拝殿］正面3間(6.79m)、側面2間(4.57m)入母屋造、平入、向拝1間、桟瓦葺　［絵馬堂］正面3間(6.37m)、側面2間(4.23m)入母屋造、平入、桟瓦葺		
建造年代（根拠）	［本殿］江戸末期／建築様式［幣殿・拝殿］文久2年(1862)／古文書［絵馬堂］寛政6年(1794)／棟札	工匠	［本殿］不明 ［幣・拝殿］大工：仙次郎、彫物官工：石原常八 ［絵馬堂］不明

館林駅の東方、城下町の南部に鎮座する。菅原道真が大宰府に左遷されたとき、梅枝の先に梅の実を刺し、それを東西南北に投げた。北は出雲国、南は讃岐国、西は筑前国大宰府天満宮の飛梅、東は当社になったという。

素木の本殿は向拝正面の木鼻と脇障子に獅子を彫り、目貫龍を入れるが、虹梁と木鼻に刻線彫を施す程度の慎ましい社である。発達した技巧から拝殿と同時期の建造と推察する。

幣・拝殿は文久２年(1862)に再建され、鼻(花)輪村・彫物官工・石原常八が手がけている（青梅神社文書)。向拝の龍や虹梁の持送り、透彫の手挟など随所に精巧な細工を残している。格天井の花鳥風月の一部は北尾重光画である。

参道の正面には朱塗りの絵馬堂が建っており、内法虹梁に渦と若葉が巾広く浮彫されている。安永７年(1778)の神号額が掲げられ、棟札から寛政６年(1794)建造と判明している。

（小島恵理子）

写165－１　本殿正面

写165－２　本殿向拝巻龍

写165－３　本殿妻飾

写165－４　本殿扉

写166－１　本殿全景

写166－２　拝殿正面

写166－３　拝殿向拝彫刻

写166－４　絵馬堂正面

167 （西本町）愛宕神社（にしほんちょう）あたごじんじゃ

本殿

神社名	愛宕神社	所在地	館林市西本町9-59
旧社格	無格社	主祭神	火産霊命、宇迦之御魂命、品陀和気命、大山祇命、八衢比古神、久那斗神、八衢比売神
構造・形式	一間社入母屋造（1.05m）、側面１間（0.96m）、平入、千鳥破風付、向拝１間軒唐破風付、銅板葺		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

館林駅の北、城下町の西部に鎮座し、本殿は約４mの山上（愛宕山古墳）にある。文武天皇４年(700年)、修験道の祖といわれる役小角（えんのおづぬ）が山城国愛宕社の祭神火産霊命をこの地に勧請したという。文永10年(1273)執権北条時頼が当社を信仰して改めて社殿を造営、その後館林市中総鎮守と称したという。近世の領主らも深く崇敬し祈願所とした。徳川綱吉は自筆の芦鷺図を奉納している。

厚みのある持送り板の上に斗を組み緑を支え彫刻板支輪も組込む。軸部に地紋彫が施され三手先組物の木鼻は鳳凰である。蛇腹支輪は吹寄せられ、建物全体に朱と黒の塗が残る。各部に付された彫刻は修理時期の違いから製作年代の差が見られるが、大変優れている。長良神社文書の記録より、勧化が許された寛保元年(1741)から総本山聖護院より「御紙付紫幕」寄付のあった天明３年(1783)の間に今の形に修築されたと考えられる。その後も度々修復し保護されている。本殿北に県指定重要文化財の青石地蔵板碑があり、高さ182cmの県内でも最大規模で文永10年(1273)に造立したものである。

（小島恵理子）

169 （浅海）八幡宮〔（あざみ）はちまんぐう〕

本殿

神社名	八幡宮	所在地	みどり市笠懸町阿左美1175
旧社格	無格社	主祭神	誉田別神以下３神
構造・形式	一間社流造（0.78m）、側面１間（0.72m）、向拝１間、厚板葺		
建造年代（根拠）	19世紀中期／建築様式	工匠	不明

当神社は、通称「浅海八幡宮」として親しまれている。神社の資料によると、境内地は上野國神名帳に載る従五位上阿波明神の鎮座地であったと伝えられる。景勝の地であり、仁安年間(1166～1169)に新田義重が八幡宮を勧請し奥の宮と称し神田を寄進した。大正７年(1918)に付近の７社を合祀した。

JR両毛線岩宿駅東方、国道50号線バイパス沿い東邦病院北側、阿左美沼南に隣接した樹木に囲まれた丘の上に位置する。享保元年(1716)の銘文がある石造の鳥居をくぐり、木々の間の坂道を登ると社殿があり、左手に神楽殿がある。拝殿・幣殿・覆屋は昭和28年(1953)に改築されている。手洗石には嘉永４年(1851)の年号が刻まれている。

本殿は一間社流造、正面側面が三尺程度の小規模な造りであるが、破損等は少なく建造当時の様式を残している。身舎妻飾は二重虹梁の大瓶束、木鼻・蟇股は彫刻が少なく、海老虹梁は反りが大きく細身の造りで、手挟は波を模っている。向拝の組物は連三斗積み上げで長く延びた桁を支えている。板蟇股は高さより幅が広く脚も長い。全体的に簡素である。建造年代を示す棟札などは発見できないが、上記特徴から19世紀中期（江戸末期）と推定する。

（亀井直行）

写167－１　全景

写167－２　正面彫刻

写167－３　向拝木鼻

写167－４　海老虹梁

写169－１　全景

写169－２　本殿正面

写169－３　向拝

写169－４　身舎側面

170 （阿左美）稲荷神社〔(あざみ)いなりじんじゃ〕

本殿

神社名	稲荷神社	所在地	みどり市笠懸町阿左美1800
旧社格	無格社	主祭神	宇迦之御魂神
構造・形式	一間社流造(0.76m)、側面1間(0.67m)、向拝1間、栩板葺		
建造年代（根拠）	19世紀中期／建築様式	工匠	不明

創立年代は不詳。神社の資料によれば、数百年前当時の産土神として勧請し、大正7年(1918)境内の神明宮、愛宕神社並びに同地琴平宮を合祀し、大正8年(1919)付近の琴平宮を合祀している。

JR両毛線岩宿駅北西、国史跡岩宿遺跡内、稲荷山（191m）の山頂に位置する。遺構観察施設（岩宿ドーム）駐車場の道路反対側にある石造鳥居から長い階段を登ると廊門があり、その奥に覆屋と一体となった拝殿内部に本殿がある。北側斜面には市指定天然記念物カタクリの群生地があり、隣接する岩宿博物館も訪れる人が多い。

本殿は一間社流造、屋根は柿板より厚い栩板で葺いている。向拝柱上を二段重ねの出三斗で組み、水引虹梁上を高くとり龍の透かし彫刻を入れている。木鼻には獅子を彫り、手挟も花の彫刻で色彩が施してある。身舎の中備は蟇股の上に詰組が有る。妻飾は組物に虹梁を乗せ、棟の太瓶束に結綿・笈形、蟇股も付け、彫刻・色彩等多用し意匠を凝らした豪華な造りになっている。覆屋内で状態も良好である。建造年代を示す資料は発見できないが、彫刻色彩の特色から19世紀中期（江戸末期）と推定する。

（亀井直行）

171 （鹿）赤城神社〔(しか)あかぎじんじゃ〕

本殿

神社名	赤城神社	所在地	みどり市笠懸町鹿2693
旧社格	村社	主祭神	大穴牟遅神
構造・形式	一間社流造(1.07m)、側面1間(0.96m)、向拝1間、栩板葺		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

当社は、通称「鹿田赤城神社」と言われている。創建年代は不明。神社の資料によると、上野国神名帳に載る従三位大穴伏見神が前社。長保年間(999～1004)上野介源信頼信社殿修復、保元年間(1156～1159)新田義重赤城神社の分霊を合祀し、赤城大明神とする。一時期衰退したが、明治6年(1873)に村社となり付近の神社を合祀する。

JR両毛線岩宿駅西方、鹿田山の南西麓に位置する。鳥居の先山裾を切り取った僅かな平地に入母屋造の覆屋と一体となった拝殿がある。その中に本殿が鎮座する。参道には燈籠・狛犬があり、石造鳥居には享保9年(1724)の刻みがある。

本殿は一間社流造としては一回り大きいものである。組物や彫刻に色彩が施され強調されている。妻飾は頭貫に花挟間絵の彫刻に青白の彩色があり、蟇股・支輪・虹梁の上に束に代わり丸彫りの力神像が踏ん張り棟木を支えている。他には見られない面白いものである。本蟇股の火頭曲線はしっかりし、松、水と亀、鳥、の彫刻が見える。向拝虹梁上には厚彫りの龍の彫刻があり、海老虹梁の曲がりは大きい。建造年代を示す棟札などはないが、彫刻・彩色の範囲・細部の特徴等により18世紀中期と推定する。

（亀井直行）

写170－1　全景

写170－2　本殿正面

写170－3　海老虹梁・手挟

写170－4　妻飾

写171－1　全景

写171－2　本殿正面

写171－3　木鼻・海老虹梁

写171－4　妻飾

172　百品神社（いくしなじんじゃ）

本殿

神社名	百品神社	所在地	みどり市笠懸町鹿1210
旧社格	村社	主祭神	天六奉遷神
構造・形式	一間社流造、千鳥破風付(0.90m)、側面1間(0.87m)、柿葺		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

みどり市の南西部、国道50線の北約1㎞の平坦地に位置する。県道笠懸赤堀今井線を南に入ると神社境内前に出る。

境内の南、市道に面して鳥居がありその北側に拝殿と本殿覆屋が一体となった社殿を配す。社殿の東に社務所、北に合祀した祠が安置され、西にスギ等の境内林がある。

本社の由緒は詳らかではないが、天正19年(1591)の検地帳に記載があり、地侍の田村氏が祀ったものであろうと伝わる。

現在の建物に関する棟札や古文書はないが、屋根の千鳥破風、向拝部の唐破風、木鼻や虹梁の絵様等の建築様式から18世紀後期の建築と推定される。

一間社流造（0.90m）、側面1間（0.87m）、柿葺で、屋根に千鳥破風、正面向拝に唐破風を付し、瓦葺きの覆屋が覆う。浜縁付き階5級を備え、擬宝珠登高欄、高欄付きの大床を三方に廻し脇障子（板）が付く。軒は正面二軒繁垂木で背面は一軒繁垂木、身舎柱は丸柱、向拝柱は面取角柱で、柱上に連三斗、木鼻（獅子、獏）を備える。向拝および身舎の中備に蟇股、彫物を備え、妻飾りは虹梁大瓶束笈形付、妻側に蕪懸魚鰭付、正面に兎毛通を付ける。屋根以外を極彩色で彩る。

（南雲啓二）

174　（遠ノ久保）稲荷神社（（とおのくぼ）いなりじんじゃ）

本殿

神社名	稲荷神社	所在地	みどり市大間々町桐原589-1
旧社格	無格社	主祭神	宇迦之御魂神
構造・形式	一間社流造(0.99m)、側面(0.80m)、向拝1間、鉄板葺		
建造年代（根拠）	18世紀前半／建築様式	工匠	不明

国道353号線桐原宿の信号を北に向かう通称桐原通りの西側、約10mの崖上に鎮座する。道路側に神社名の入った石碑があり脇の階段を上がると正面石造の鳥居前に至る。3本の赤い鳥居を抜け再び石造の鳥居をぬけた正面に拝殿、その奥に幣殿覆屋に囲まれた本殿へとつづく。向かって右に大銀杏がありその根元に石碑。本殿裏北側に雷電神社を置く。

本殿は一間社流造、基礎の上に土台を廻し1mほどの高さの木材を組んだ上に本殿が乗っている。向拝虹梁の蟇股に鳥、両脇に象、正面に獅子の彫刻。水引虹梁、海老虹梁、妻虹梁に若草の絵様。本殿身舎や蟇股、脇障子に彫刻はなく簡素な造りである。建造年代は、向拝蟇股の形と彫刻の様子から18世紀前半頃と推測する。

『大間々町誌「基礎資料XI」大間々町の社寺』平成9年発行によると、笠懸町西鹿田の稲荷山にあった本殿を、明治30年(1897)に現在地へ移転したという記録がある。その後道路拡張に伴い、平成7年(1995)に現在の拝殿、本殿覆屋が作られたと石碑に刻まれている。拝殿向拝の彫刻は氏子の大工が彫ったという。移転が伴うたびに修復を重ね氏子が整備し大切に保管されている。

（久保田眞理子）

写172－1　全景

写172－2　向拝柱木鼻

写172－3　海老虹梁、手挟

写172－4　中備蟇股

写174－1　全景

写174－2　本殿

写174－3　海老虹梁と手挟

写174－4　向拝水引虹梁

175　八王子神社（はちおうじじんじゃ）

本殿

神社名	八王子神社	所在地	みどり市大間々町小平637
旧社格	無格社	主祭神	天忍穂耳命他
構造・形式	一間社春日造、柿葺		
建造年代（根拠）	延享４年(1747)／棟札	工匠	[大工]下野国　尾花清左衛門他

大間々町「小平の里」付近にある里山の頂上付近の岩の上に鎮座する。本殿は正面２間、側面３間半の覆屋の中にあり、覆屋の前は１間半ほどの拝殿の役割をしたテラスがあり、すこぶる眺めがよい。本殿は正面87㎝、側面78㎝、向拝80㎝ほどで大床が四方に廻っている。小ぶりではあるが群馬には珍しい一間社春日造と呼ばれるものである。

向拝の中備は龍の彫刻や斗組で埋め獅子頭や像頭の目には銅板が止められている。柱や各長押には地紋彫が施され、手挟、脇障子、支輪等、各所の彫刻は質も高い。

本殿には棟札が残されていて彫工の名はないが大工は下野の飛駒地区と判明した。東に山越えをすると桐生の川内・梅田地区から下野の飛駒地区に通じ、山間部をつなぐ道としても交流があった。

本神社が春日造になっていることからも、棟札に示す下野の大工を招いたことは明白で、交流関係をしめす貴重な建物でもある。

また、絵様、斗組等先取り感はあるが当地方の建築様式に矛盾はなく建造年代は棟札の通りであると推定した。

（下山　彰）

176　（長尾根）十二山神社（（ながおね）じゅうにやまじんじゃ）

本殿

神社名	十二山神社	所在地	みどり市大間々町長尾根244
旧社格	無格社	主祭神	大山津見神
構造・形式	一間社流造、板葺		
建造年代（根拠）	明和元年(1764)／絵馬型棟札	工匠	[大工]下仁田山田村・・浅原邑青山・・・[彫物師]下仁田山総村住人　新助

長尾根地区は大間々の浅原地区と桐生の川内地区を結ぶ街道にあり、本神社は長尾根地区のほぼ中央を北東の山に登ったところに鎮座している。

鳥居から続く石の階段を登り切ったところには３坪ほどの現代風覆屋がありその中に本殿がある。

本殿は正面77㎝、側面68㎝ほどで四方に大床を廻らし、前方には向拝を設けた一間社流造である。

向拝の中備えには梅の彫刻を施した蟇股、木鼻は獅子と獏、柱には地紋彫が施してある。身舎の妻飾りや入口脇、脇障子にも彫刻があり、虹梁や拳木鼻には18世紀中期の絵様が彫られている。

当神社には建物に関する絵馬型棟札が残されていた。それによると建造年代が明和元年(1764)、「大工　下仁田山邑　田村住人・・」「彫工　下仁田山邑　新助」とある。下仁田山邑は今の桐生の川内地区の一部である。

水引虹梁の唐草模様や柱の地紋彫りから建造年代は、絵馬型棟札の通りと推定した。

（下山　彰）

写175－１　全景

写175－２　本殿正面

写175－３　向拝の龍

写175－４　象頭と獅子頭

写176－１　本殿正面

写176－２　扁額裏の蟇股

写176－３　妻面　支輪と蟇股

写176－４　木鼻と柱の地紋彫

177　六合神社〔ろくごうじんじゃ〕

本殿・幣殿・拝殿

神社名	六合神社	所在地	みどり市大間々町上神梅634
旧社格	村社	主祭神	菅原道真 大山祇命　他
構造・形式	正面３間、側面２間、向拝１間、３間１戸流造、長板瓦葺、千鳥破風唐破風付、平入		
建造年代（根拠）	［本殿］19世紀前期～中期／建築様式	工匠	不明

国道122号線上神梅駅近くを斜め左、深沢宿北西に位置する。東から赤鳥居を潜り石段を147段上った広場の正面に拝殿・幣殿・本殿覆屋が続く。創立時期は不明であるが、明治36年(1903)に菅原神社を母体とした旧村社に付近の数社を合祀し六合神社とした。本殿身舎は亀腹石上に10本の丸柱を置き、向拝は２本の角柱の構成である。組物は拳鼻付出組、拳鼻付平組とし、中備はない。軒は二軒繁垂木とし軒支輪が付く。妻飾りは虹梁、太瓶束、笈型付とし、懸魚をつける。大床は三方切目縁擬宝珠高欄を回し、浜縁、浜床は拭板張とする。脇障子・正面壁・両開戸・向拝正面木鼻・軒支輪・手挟に彫刻が施され、木鼻・虹梁大床持送りには絵様が見える。長押釘隠・出隅角金物、建具角金物、長押繁八双金物等が施されている。板屋根は長板を用い、瓦棒葺とする。唐破風や反りの部分は削込みで、全体として堅固な印象のする建物である。覆屋・幣殿は切妻造カラー鉄板葺、拝殿は寄棟造桟瓦葺とし、外壁は波型カラー鉄板張とし、近年の改修である。覆屋軒高が高く方三間の間取りでゆったりしている。本殿の保存状態は破損もなく良好である。

（飯山　繁）

179　神梅神社〔かんばいじんじゃ〕

本殿・幣殿・拝殿

神社名	神梅神社	所在地	みどり市大間々町上神梅60
旧社格	無格社	主祭神	大己貴尊、大山祇命、菅原道真、大物主命
構造・形式	正面１間、側面１間、向拝１間、一間社流造、柿板葺、平入		
建造年代（根拠）	18世紀後期／建築様式	工匠	細工人 宮本元衛門

県道上神梅大胡線の旧上神梅小学校前から北へ向かう緩やかな上りの途中100m位置する。境内には、拝殿・幣殿・本殿覆屋と続き、本殿は覆屋内に鎮座する。創立は永仁６年(1298)とされ、上野國神明帳にある勢多23社の一つ、神前神社と云われたものが現在の神梅神社であり、鏑木家の神社ともいわれる。本殿は安永４年(1775)建造とし、一間社／流造／柿板葺／平入、身舎は４本の丸柱、向拝柱は地紋入角柱、身舎は三方切目縁、擬宝珠高欄を回す。側面の壁・脇障子は彫刻嵌込とし、組物は三手先組尾垂木付、中備は詰組、軒は二軒繁垂木、妻飾りは二重虹梁蟇股、猪目懸魚とする。向拝は水引虹梁上部に竜彫刻中備、海老虹梁、彫刻手挟、連三斗を組む。彫刻は白を基調とした彩色とし、緑、青、朱色とする。正面両開板戸彫刻嵌込等建物全体に施された彫刻と彩色は当時の傾向を顕著に表している。覆屋・幣殿拝殿は明治から昭和初期に造られたもので、屋根はカラー鉄板葺に改修されている。外壁は縦羽目目板打である。基礎は自然石切石並べた布基礎をものである。

（飯山　繁）

写177－１　参道

写177－２　全景

写177－３　本殿

写177－４　向拝、水引虹梁

写179－１　参道

写179－２　拝殿

写179－３　本殿

写179－４　向拝、虹梁彫刻龍

180 （浅原）菅原神社（(あさばら)すがわらじんじゃ）

本殿、神楽殿

神社名	菅原神社	所在地	みどり市大間々町浅原1263-1
旧社格	村社	主祭神	菅原道真
構造・形式	[本殿]一間社流造、平入、千鳥破風、軒唐破風袖蟇 [神楽殿]正面10.45m、側面 3.80m、入母屋造瓦葺		
建造年代（根拠）	天明７年(1787)／内陣の墨書 [神楽殿]19世紀中期／建築様式	工匠	本殿 [大工棟梁]遠藤金七・他 [彫工]尾池金蔵

浅原から小平向かう道の正面に鳥居が見え、道は右にカーブしている。鳥居をくぐると左（西）に神楽殿、正面には狛犬に守られた拝殿が見える。

拝殿から続く幣殿の奥に入母屋造りの覆屋が見え、本殿は覆屋内に鎮座する。本殿は正面97㎝、側面90㎝で四方に廻らせた大床はケヤキの板でできている。正面に千鳥破風、向拝は軒唐破風の一間社流造である。彫刻は向拝の龍をはじめ胴羽目、腰羽目には石原吟八郎所縁の唐子遊び等が彫られ、外壁のすべての面に高肉彫りの彫刻を施し、本殿全体を彫刻で埋め尽くしている。また妻面の二重虹梁大瓶束や尾垂木に龍、獅、等の丸彫りを彫刻にするなど18世紀末の手法を満たしている。墨書にある彫工の尾池金蔵は勢多郡前田原邑とあり、詳細は不明であるが今後の調査に期待する。

境内にある神楽殿には、上演の時は板戸を開いて「遠見」と称される舞台装置も備えその上の虹梁には19世紀中期の特徴ある唐草絵様が彫られている。建造年代は本殿が墨書通り、神楽殿は19世紀中期と推定した。

（下山　彰）

181 鈴香神社〔すずかじんじゃ〕

本殿

神社名	鈴香神社	所在地	みどり市大間々町浅原1601-4
旧社格	無格社	主祭神	蓬領姫之尊命
構造・形式	一間社流造(0.91m)、側面１間(0.76m)、向拝１間、板葺		
建造年代（根拠）	寛政３年(1791)／棟札	工匠	[大工]斎藤儀助家弥斗

県道小平塩原線から長尾根方面に曲がり、少し行くと左に小道があり、石鳥居に至る。鳥居をくぐった参道には、10体の庚申塔が並べられていて中には元文５年(1740)のものもある。正面に竹林を背にして、覆屋がかけられた本殿が鎮座している。

『大間々町誌８巻　大間々町の建造物』によると、本殿には延享５年(1748)と寛政３年(1791)の棟札が残されており、建造年は後者であると推定する。覆屋についても天保９年(1838)「雨屋再建……」と書かれた棟札がある。さらに昭和50年(1975)改築とある木札が残っており、状況からみるとその時、覆屋を改築し、本殿の修理も行ったと思われる。

本殿に礎石はなく、土間コンクリートの上に直接安置されている。本柱は丸柱（粽）で、組物を大斗肘木にし、妻飾は虹梁束立である。胴板などに胡粉が塗られた跡があるが、詳細は不明である。

屋根は厚板が張られており、軒は一軒繁垂木である。向拝の木鼻は拳で、向拝水引虹梁、海老虹梁共に唐草絵様となっている。

失われた部分が多くあり残念であるが、周りの山や畑との調和があり、ひっそりと建っていて魅力がある。

（板川多恵子）

写180－１　本殿正面

写180－２　正面　龍と飛龍

写180－３　腰羽目　唐子

写180－４　神楽殿

写181－１　全景

写181－２　屋根、向拝

写181－３　海老虹梁

写181－４　本柱上部

182 （長尾根）熊野神社（〔ながおね〕くまのじんじゃ）

本殿

神社名	熊野神社	所在地	みどり市大間々町長尾根372-1
旧社格	無格社	主祭神	伊弉諾尊
構造・形式	三間社流造(0.91m)、側面1間(0.48m)、向拝1間、板葺		
建造年代（根拠）	寛政7年(1795)／棟札	工匠	[大工]関口豊七

長尾根の集落から桐生に抜ける長尾根峠の道を外れたところに参道があり、正面高台に赤鳥居が見える。石段を迂回して赤鳥居まで行くと、壊れてしまった石鳥居（宝暦12年(1762)の刻）が置かれている。更に登ると四阿があり、本殿が鎮座している覆屋（昭和60年(1985)再興）に至る。本殿には寛政7年(1795)の棟札が残されていた（『大間々町誌8巻 大間々町の建造物』より）。

本殿は三間社流造の形式である。基礎は当初、切石で、覆屋改築の際にコンクリートの台の上に乗せたと思われる。本柱は円柱で屋根は板葺、軒は二軒繁垂木である。正面柱間を三間にして、それぞれ両開戸を入れている。組物は出三斗で中備は彫刻蟇股とし、妻飾は虹梁大瓶束で木鼻は拳である。虹梁、木鼻、海老虹梁、持送は唐草絵様であり、向拝水引虹梁上部には彫刻が嵌められている。海老虹梁は上下に多く湾曲していて若葉の動きも大きく、建造年代を表している。階、大床があり端部は擬宝珠高欄である。彩色は柱、虹梁、組物などは朱で刻線を黒に、両開戸も朱と黒である。手挟や中備などは極彩色であった。外壁、胴の部分や妻部分は白く胡粉が塗られた跡があるが、当初については不明である。建築様式から、寛政7年(1795)の建造と考える。

（板川多恵子）

写182－1　全景

写182－2　向拝

写182－3　海老虹梁、手挟

写182－4　虹梁大瓶束、蟇股

183 （間坂）神明宮（〔まさか〕しんめいぐう）

本殿

神社名	神明宮	所在地	みどり市大間々町桐原1040
旧社格	無格社	主祭神	天照皇大神
構造・形式	一間社神明造(0.77m)、側面1間(0.70m)、板葺		
建造年代（根拠）	寛政10年(1798)／棟札	工匠	[大工頭立]善八昌明

国道122号線桐生警察署大間々分庁舎南手前の信号を右に曲がり、すぐに右に曲がった道路を行くと当神社の参道と交わる。道路の南側は長い参道が続き、中程には「神明宮　源義寄」と刻まれた石の奉額がかけられた石鳥居（安永4年(1775)）がある。道路の北にも石鳥居があり、くぐって2対の石燈篭を過ぎると拝殿、弊殿、本殿覆屋に至る。境内には末社8社（石宮）がある。本殿には寛政10年(1798)の棟札が残されていた（『大間々町誌8巻　大間々町の建造物』）が、境内石造物の中には、享保や宝暦の刻がみられる。

当本殿の形式は神明造になっており、切妻造平入で左右の棟下に棟持柱を建てている。屋根は板葺で棟に千木、堅緒木を有す。軒は一軒繁垂木、破風の拝み左右に小挟小舞がついている。

柱は丸柱で土台に建ち、本殿は覆屋床板上に土台、階ごと置かれている。唐戸に飾金物がある。神明造の為、全体が素木で、彫刻・彩色等の装飾はないが丁寧な造りであり、覆屋に守られ、素木の美しさを損なわず残っている。建築様式から寛政10年(1798)の建造と考える。当地では一間社流造で彫刻を施した神社を数多く見かけるが、神明造は少ない。又、群馬県下においても江戸期の神明宮は数が少なく、大変貴重で価値がある。

（板川多恵子）

写183－1　全景

写183－2　側面

写183－3　屋根、千木、堅緒木

写183－4　正面

写183－5　下部

184　木宮神社〔きのみやじんじゃ〕

本殿

神社名	某宮神社	所在地	みどり市大間々町小平1197-1
旧社格	無格社	主祭神	久々能智神
構造・形式	一間社流造、千鳥破風、軒唐破風付棟葺		
建造年代（根拠）	文化４年(1807)／棟札	工匠	[大工]小金井直七 [彫工]星野甚内

小平地区を小平川に沿ってさらに奥に進むと左に木の宮橋が架かっている。橋を渡った左手が境内である。本殿は道路に面した鳥居を下り、さほど広くない低地に小平川を背負う状態でトタン葺の覆屋の中に鎮座している。祭神の久々能智神は木の神様であることから、霊水をたたえるために小平川の低地に建てられたと伝わる。

本殿は棟札により文化４年(1807)の建造である。

本殿は正面0.94m、側面0.82m、向拝0.72mの一間社流造で正面に千鳥破風、向拝は特徴的な軒唐破風になっている。彫刻は胴羽目に中国故事、腰羽目には唐子遊びの高肉透彫り、尾垂木には龍や唇の丸彫り、手挟みは牡丹の籠彫り、妻には棟を持ち上げる鬼束等、18世紀末から19世紀初頭の神社彫刻の特色を良く表している。

彫工の星野甚内は花輪彫刻師集団の星野政八の息子、星野慶助のことで、同時期に川場村の武尊神社、さらに晩年には桐生の皆沢八幡宮を手掛け、こちらは「東渓」の名で足跡を残している。

また絵師「星野東渓」として文化14年(1817)に利根村の徳応寺の天井に大龍を描いている。

（下山　彰）

185　杉森稲荷神社〔すぎもりいなりじんじゃ〕

本殿、拝殿

神社名	杉森稲荷神社	所在地	みどり市大間々町桐原341
旧社格	無格社	主祭神	宇迦之御魂神
構造・形式	[本堂]正面2.53m、側面3.20m、土蔵造、置屋根、瓦葺 [拝殿]三間社入母屋造、平入、カラー鉄板葺		
建造年代（根拠）	[本殿]慶応２年(1866)／棟札 [拝殿]明治43年(1910)／建築様式、町誌	工匠	[本殿]絵師　翠均道人 [拝殿]不明

旧あかがね街道、桐原宿のほぼ中央で、世音寺の山門脇の小高い丘の上に鎮座する。この丘は古墳跡で、戦後間もない頃は拝殿下まで入れたようである。現在は街道から石段を上がると凝った彫刻の拝殿があり、幣殿、本殿と続いている。

本殿は本殿自体が土蔵造りになっているが、入口は木彫の桟唐戸で窓に防火扉はなく屋根も置き屋根であることから、防火性より居住性や耐久力を高めた造りになっている。内部は奥に祭壇を設け柱の上には斗組、中央には蟇股まである。天井や祭壇下部の建具には絵画があり、「慶応元年(1865)、翠均道人」の署名が残されている。祭壇内には石宮が置かれ、柱には棟札が止められていた。

拝殿の向拝には幕末から明治期の完成された彫刻があり、墨書の類は見つからないが、彫工の力量はトップクラスで今後の調査に期待する。

建造年代は、本殿と幣殿の接続の状況や建築様式、町誌に建造年代が記されていたことから明治43年(1910)であると推定した。

（下山　彰）

写184－１　全景

写184－２　本殿向拝の龍

写184－３　胴羽目の彫刻

写184－４　妻面の鬼束

写185－１　土蔵造りの本殿

写185－２　本殿入り口の彫刻

写185－３　拝殿正面

写185－４　拝殿向拝の龍

189　三嶋神社〔みしまじんじゃ〕

拝殿

神社名	三嶋神社	所在地	邑楽郡明和町梅原262
旧社格	郷社	主祭神	大山祇命
構造・形式	正面4間(7.20m)、側面3間(4.50m)、入母屋造、1間向拝付、平入、瓦葺		
建造年代（根拠）	江戸末期／建築様式	工匠	建具職：下村君村孫七・文太郎

明和町役場から南方2㎞に位置。江戸時代末期の弘化3年(1846)、火災により社殿及び古記録の全てを焼失、創建年月の由緒は不詳。社伝では伊豆国三嶋大社から御神霊を勧請（お招き）した地方の古社と伝えられる（三嶋神社資料）。

神社南鳥居から参道に入る。左には厳島神社・羽黒神社・浅間神社等の末社および石塔、右には手水舎・神楽殿が位置し、正面には、拝殿、幣殿、本殿覆屋と続く。拝殿は南に開き、正面4間、側面3間、入母屋瓦葺、1間向拝付、平入。建造年は棟札より嘉永2年(1849)と伝えられている（現物未確認：三嶋神社資料）。三嶋神社は現代では群馬県を中心に、埼玉県や栃木県からも「勝負の神」「虎の神」と広く崇敬されている。本鼻彫物は正面・側面の彫が一体となり、近くの粟島神社や菅原神社も同様で、作者・年代が同年代の建物と推測される。蟇戸は江戸期のものを使用しており趣がある。拝殿に入ると、絵馬が壁面と2本の化粧梁を埋め尽くすように飾られており、浮世絵師北尾重光（江戸生、館林住）作ほかの絵馬と扁額が43点ほどある。嘉永4年(1851)北尾重光作の「三嶋神社祭礼図（ささら獅子舞図）」、明治32年(1899)梅園堂悦輝作「利根川堤防工事図」は当時の町の様子を知る貴重な資料となっている。

（荘司由利恵）

写189－1　全景

写189－2　向拝：海老虹梁

写189－3　向拝

写189－4　木鼻彫刻

190　粟島神社〔あわしまじんじゃ〕

本殿、拝殿

神社名	粟嶋神社	所在地	邑楽郡明和町川俣67-1
旧社格	郷社	主祭神	少毘古名命
構造・形式	［本殿］一間社流造、側面1間柿葺、1間向拝付、柿葺　［拝殿］正面3間(6.43m)、側面3間(4.55m)、入母屋造、1間向拝付、平入、瓦葺		
建造年代（根拠）	［本殿・拝殿］江戸末期／建築様式	工匠	［本殿］不明 ［拝殿］不明

社殿位置は江戸時代には「日光脇往還」の川俣宿に面していた。創建年月不詳。社伝によると当神社は享保年間(1716～36)火災により本殿・拝殿及び由緒など焼失した。当社の創建は天正(1573～92)以前という。明治5年(1872)11月栃木県下第70戸籍区内10ヵ村の郷社に列した。同41年(1908)9月神明宮を合祀した。

境内東にある鳥居より、右手に手水所、左手に神楽殿が配置され、東側に向いている拝殿から幣殿へと続き本殿（覆屋）が位置する。以前は南側の利根川の方から社殿に入っていたという。本殿は一間社流造、側面1間、1間向拝付、柿葺［覆屋］2間×3間（幣殿と本殿は同一建物に収まる）。拝殿は正面3間（6.43m）、側面3間（4.55m）、入母屋造、1間向拝付、平入、瓦葺。木鼻彫刻は正面・側面の彫が一体となり近くの三嶋神社も同様であり、向拝柱に彫刻された寄附者名より、建造年代は建築様式により江戸末期と推定する。

拝殿には、絵馬が数点あり、中の一つには、塩谷塩泉画と安政(1854～1860)の文字がかろうじて判読できる。このような絵馬は当時の人々のくらしを知ることができる貴重な資料である。

（荘司由利恵）

写190－1　全景

写190－2　拝殿向拝

写190－3　本殿正面

写190－4　本殿側面

192 （赤岩）八幡神社（(あかいわ)はちまんじんじゃ）

本殿、拝殿

神社名	八幡神社	所在地	邑楽郡千代田町赤岩1094
旧社格	村社	主祭神	誉田別命、大雷神、藤原長良
構造・形式	[本殿]一間社流造、側面1間、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺 [拝殿]正面3間(4.60m)、側面2間(2.87m)、入母屋造、平入、向拝1間軒唐破風付、瓦葺		
建造年代（根拠）	[本殿]18世紀後半 [拝殿]19世紀初期／建築様式	工匠	[本殿]不明 [拝殿]不明

当社は、千代田町の西に位置し、200m南に利根川が流れる。境内東側の鳥居を潜ると正面に拝殿・幣殿・本殿覆屋と続き、覆屋内の本殿は古墳の上に鎮座する。境内には神楽殿、八坂神社、稲荷大明神、社務所を置く。延宝3年(1675)堂山中腹を発掘し出た刀剣・甲冑を領主室賀下総守に差出すと、下総守から位官貴人の武具ゆえ、八幡大菩薩と勧請し所の鎮守とせよとの下渡しにより、延宝5年(1677)堂山に社殿を造営し村の鎮守としたと伝わる。

本殿は一間社流造柿葺に向拝軒破風と千鳥破風付の荘厳な造りで、彫刻や組物は見事である。彫刻は虹梁、手挟、中備の龍、木鼻、支輪、脇障子などに施し、全ての壁に彫刻を嵌める。腰の彫刻は稲作の作業を表現している。全体に彫刻を施しているが、象木鼻とし、虹梁の絵様は比較的簡素であるため、18世紀後半の建物と推定する。

拝殿は扉垂木とし、組物は平三斗。彫刻は虹梁の絵様、木鼻、手挟、兎毛通、向拝の中備に施す。建造年代は、向拝虹梁の絵様は年代的に新しい様式であることから、19世紀初期の建物と考える。室内の格天井には龍や花鳥が描かれ、作者の墨書・落款がある。

（小林則子）

写192－1　拝殿正面

写192－2　拝殿向拝

写192－3　本殿正面

写192－4　本殿　虹梁・組物

神社建築用語の解説

【あ】

厚肉彫　あつにくぼり

浮彫の中で、より厚みをもたせ立体感を強調したもの。高肉彫ともいう。透彫との併用の場合は「高肉透彫」と呼ぶ。

【い】

生彩色　いげさいしき

全面を漆下地から漆塗として仕上げ、さらに全面に金箔押を施した上に着彩する技法。

板蟇股　いたかえるまた

虹梁の上や斗栱の間などに置かれるもので、一枚の板でつくり、中を繰り抜いていないもの。蟇が股をふんばったような形をしている。

板支輪　いたしりん

軒裏において、通肘木と桁の間に取り付けられた平たい板。

板軒　いたのき

垂木を用いずに厚板を張った軒で、彩色や彫刻が施されていることがある。

豕叉首・豕扠首　いのこさす

叉首竿という左右二本の木材を合唱形に組み、さらに中央に立つ叉首束で支える構成で、妻飾りの架構法。

入母屋造　いりもやづくり

屋根の基本形の一つ。屋根の上部を切妻造とし、下部は四方に庇や屋根を廻した形態。

【う】

浮彫　うきぼり

部材表面に題材を浮かび上がるように周囲を彫ったもの。線刻陰刻の平彫に対して面的な彫刻。

内法材　うちのりざい

敷居、鴨居、内法長押などの造作材の総称。内法高は敷居上端から鴨居下端までの距離を指す。

腕木　うでぎ

垂木・庇などを支えるために、板や梁などから横に突き出せた横木。

兎毛通　うのげどおし

唐破風に設けられる懸魚を、特に兎毛通という。唐破風に中央及びその両側に懸魚を設ける場合、中央のものを兎毛通、両側のものを桁隠しという。

【え】

海老虹梁　えびこうりょう

高さが異なる柱を繋ぐ虹梁。海老のように大きく反っているものをいう。

絵様　えよう

彫刻または模様をいう。唐草や渦などの文様を彫った肘木は、絵様肘木という。

【お】

扇垂木　おおぎたるき

扇を開いたように放射状に軒の端部において取り付けられた垂木をいう。唐様と天竺様に用いられる。

大床　おおゆか

階段の上にある縁をいう。階段下の浜床に対す。

置上彩色　おきあげざいしき

文様を絵具で盛り上げて立体的に仕上げる技法。

尾垂木　おだるき

組物から屋外に斜め下方に突き出ている部材で、二手先組や三手先組などの深い軒をつくる組物に用いる。

筏欄間　おさらんま

細い桟（竪子）を櫛のように細かく並べた欄間。

折上天井　おりあげてんじょう

天井周りの縁から支輪などで湾曲させて、天井面を高くして仕上げた天井。格縁で画した場合は折上格天井という。なお、格縁と繁がる支輪状に湾曲した材は「亀の尾」、繁がらない材は「蛇骨子」と呼ぶ。

御霊屋　おたまや

偉人や貴人の死者の霊を祀るための建物。霊廟、廟ともいう。

【か】

蟇股　かえるまた

虹梁や桁など横架材と斗などの間に置かれ、重量を支える束材の一種。形がカエルが踏ん張った姿勢に似ている。板蟇股と本蟇股（透かし蟇股、刳り抜き蟇股ともいう）がある。

鏡板　かがみいた
板戸、天井、板壁などで框や桟、額縁、枠に嵌め込んで使用する大きな平滑りな一枚板あるいは剥ぎ目がわからないように仕上げた板。

鏡天井　かがみてんじょう
一面に板を張った平らな天井。唐様にみられる。

懸造　かけづくり
面に柱・梁を組んで、その上に建物を支える構造をいう。斜面の柱・梁の上に礼堂の床を舞台のように張り出して形成することが多く、舞台造とも呼ばれる。

籠彫　かごぼり
部材を篭状に彫り抜いて、立体的に表現するもの。

錺　かざり
錺とは金属板を叩いて造形する鎚起（ついき）のこと。

笠木　かさぎ
鳥居、門、板塀などの上に渡す横木。

頭貫　かしらぬき
柱と柱の上端部を繋ぐ横材。柱の頂部を切り抜き、そこに落とし込んで柱と柱を結んだもの。

春日造　かすがづくり
神社の社殿形式のひとつ。切妻造の妻入の前面に本屋と同じ幅の庇が向拝として付いた形。春日大社本殿が代表例。

冠木　かぶき
柱を貫く成の高い水平材

冠木長押　かぶきなげし
中央間の柱間にある長押で、両側の内法長押より一段高く渡したもの。

冠木門　かぶきもん
門柱とその上部を貫く冠木からなる門

框　かまち
窓や障子などの周囲の細長い枠。または床に段差がある場合、高い床の末端に取り付ける横木をいう。

亀腹　かめばら
建物の基礎廻りや鳥居の根元に補強のために、饅頭形のように盛った土壇や石盤部分をいう。

唐戸面　からどめん
部材の出隅を削り取る面取りの一つで円形（4分の1）をしたもの。「丸面」ともいう。

唐破風　からはふ
中央部は弓型に起り、左右両端が反り返った曲線状の破風。門、玄関、向拝の屋根や軒先などに用いる。

唐門　からもん
唐破風の屋根をもつ門。唐破風が正面を向いているものを向唐門、側面を向いているものを平唐門という。

【き】

階　きざはし
階段や梯子の古語で「きだはし」ともいう。

几帳面　きちょうめん
部材の出隅を削り取る面取りの一つで尖頭形または四角形にしたもの。

狐格子　きつねごうし
入母屋造において破風の内側の妻面に設ける格子。木連格子（きつれごうし）ともいう。

木鼻　きばな
虹梁、頭貫、肘木などの端が柱の外側に突き抜けた先端部分。握り拳、象・獅子・獏などの彫刻が施される。

擬宝珠　ぎぼし
高欄の親柱の頂部を葱の花状（宝珠）にした形の飾り。

擬宝珠高欄　ぎぼしこうらん
高欄形式の一つで端部等の親柱に擬宝珠頂部に載せたもの。なお、禅宗様の建物は擬宝珠の代わりに逆さの蓮花を載せた逆蓮柱とする。

切妻造　きりづまづくり
屋根の基本形式の一つ。棟の前後に流れる二つの斜面からなる。最も簡単な屋根構造。神社建築に多い。妻側に入り口を設けたものを妻入、妻と直交する面に入り口を設けたものを平入という。

切目縁　きりめえん
縁の長手方向と直角に縁板の小口が見えるように張った縁をいい、「木口縁」ともいう。

金襴巻　きんらんまき
柱頭部分に金襴を巻き付けたように彩色や金物で施す装飾を指す。金襴は金糸や細く切った金箔を織り込んで、紋様を表出した布地のこと。

【く】

宮殿　くうでん
仏教の本尊や祖師像などを収める厨子の一種。「厨子」との区別は必ずしも明確でないが、寺社建築の内部安置する宮殿風の厨子のこと。

組入天井　くみいれてんじょう

古くは通肘木などの構造材の内側に格子を組入れて造られた天井。水平強度を高めて建物のねじれを防止する役目も果たす。平安末期以降の構造体と独立している格天井は格間が狭い場合を組入天井、格間に小型の格子を組み込んだものは小組格天井と呼ぶ。

組物　くみもの

斗と肘木の総称。柱など軸部と小屋組みの梁、桁などの間に設けられ、上部の荷重を軸部にスムーズに伝えるもの。斗栱、斗組（とぐみ）ともいう。

榑縁　くれえん

縁の長手方向に縁板を張った縁。

【け】

懸魚　げぎょ

屋根の妻の破風に頂部から垂下してに設けられる装飾材の一種。桁の鼻を隠して風化から守る部材を装飾材としたものであり、火災を避けるシンボルとして魚を象徴している。

外陣　げじん

神社本殿や仏寺本堂の、内陣の外側で、人が坪む場所。

化粧垂木　けしょうだるき

下から見えるように設けられた垂木。

化粧屋根裏　けしょうやねうら

天井を張らず、梁や垂木をそのまま見せるものものをいう。仏堂の外陣は化粧屋根裏にすることが多い。

桁隠　けたかくし

建物の端の桁を風化を防ぐために隠し、桁の鼻に取り付けられる部材。化粧を兼ねることが多い。

桁行　けたゆき

小屋梁に直角で桁が通っている方向をいう。

間斗束　けんとづか

束の上に斗が乗っているものを斗束といい、組物（斗栱）の間に中備えとして置かれた斗束を間斗束という。主として和様で用いられる。なお、束の下方が開いた撥形の束は「撥束」と呼ぶ。

【こ】

高欄　こうらん

縁廻りや階段の縁に沿って手摺状に設けられたもの。特に伝統的様式なものを指す。勾欄とも書き、擬干ともいう。

向拝　こうはい

参拝人の礼拝のために、仏堂や社殿の正面の中央に張り出して設けた庇。向拝の大きさは、柱間の間数で示す。

虹梁　こうりょう

柱間に掛け渡した化粧された虹のような曲線の梁。虹のように反っているので、このように呼ばれる。

虹梁蟇股　こうりょうかえるまた

妻飾の一つ。虹梁の上に蟇股を置いてその上に蟇股を置いて棟桁を受けるようにした形。二重虹梁蟇股を簡単にした形式。蟇股が大きくなることが多い。

虹梁大瓶束　こうりょうたいへいづか

妻飾の一つ。虹梁蟇股の蟇股を置くところに大瓶束を置いたものであり、唐様に用いられる。

柿葺　こけらぶき

柿板で葺いた屋根。柿は鱗のことで、柿板は厚さ1分（3㎜）、長さ7寸～1尺3（21～40㎝）、幅3寸（9㎝）程度の薄い板をいう。杉・椹などを用いる。

小組格天井　こぐみごうてんじょう

格天井の格縁の間に目の小さい格子を入れたもの。

腰組　こしぐみ

腰は建物の構造や壁面仕上げが異なっている場合の下部の壁面を指す。腰組は縁下の組物を指す。

胡麻殻決　ごまがらじゃくり

柱の表面に付ける決の一つで、断面が菊花状のもの。

拳鼻　こぶしばな

組物に組み込まれて突き出た拳状の木鼻。

小屋組　こやぐみ

屋根を支えるために組み立てられた骨組み。小屋を造るときと似ているためにこのように呼ばれる。

権現造　ごんげんづくり

神社の社殿形式のひとつ。前方に拝殿、後方に本殿を置き、これらを石の間または相の間で繋いだもの。

【さ】

笹刳り　ささぐり

角を曲線状に削った面取りを笹刳りという。肘木の上辺の角を笹刳ることよって、曲線に見せる。

挿肘木　さしひじき
和様では肘木を斗の上に置いて支持するが、天竺様では、肘木を柱に直接挿し込んで取り付ける。これを挿肘木という。

皿斗　さらと
柱の頭に置く皿形の斗、上に大斗が載る。

桟唐戸　さんからど
扉の一種。框のなかに桟を縦横に渡して組み、その間に障子や鏡板を入れた唐戸。

山門　さんもん
寺院の門をいう。二重門で造られたものを山門と呼ぶことが多い。禅宗寺院では三門と呼ぶ。

三門　さんもん
禅宗寺院の二重門。三解脱門（空門・無相門・無作門）の略。上層に仏像を安置し、両脇の山廊から階段で登れるようになっている。

【し】

繁垂木　しげだるき
垂木の間隔が狭く密集して並んでいるものをいう。垂木が二段の二軒のとき、二軒・繁垂木という。なお、垂木の明きを垂木の高さと幅の和くらいの場合は半繁垂木という。

沈め彫　しずめぼり
木地面より余白を彫り下げて、主題を浮彫にするもの。

地垂木　じだるき
垂木を二段の二軒にする場合、一段目（下側）の垂木を地垂木という。

四天柱　してんばしら
仏堂の中心に設けられた四本の柱を四天柱という。特に、五重塔、三重塔、多宝塔など塔婆建築の初層の四本の柱をいう場合が多い。四天柱は中央の須弥檀を囲むように配置され、仏像や文様などが極彩色に描かれることが多い。

地紋彫　じもんぼり
沈め彫で幾何学的な紋様を彫ったもの。

須弥檀　しゅみだん
仏像を安置する仏壇のこと。和様と唐様とは、欄干などが異なる。

菖蒲桁　しょうぶげた
軒唐破風、入母屋破風などの左右の指桁をいう。

鐘楼　しょうろう
梵鐘を吊るための建物。国宝指定の例はない。「しゅろう」とも読む。

支輪　しりん
軒裏や折り上げ天井の斜めに立ち上がる部分に並列する弧状やＳ字状に湾曲した部材をいう。

神明造　しんめいづくり
神社の社殿形式のひとつ。切妻の屋根を持ち、高床式で「平入」という横長の部分を正面に持ってくる造り。

素木造　しらきづくり
樹皮が付かず塗装も彩色されない造り。

【す】

透かし彫　すかしぼり
題材の余白となる部分を彫り抜いて輪郭を表現するもの。背面側が透かして見える。

繞破風　すがるはふ
身舎の軒先から突き出た片流れの破風をいう。

【せ】

線状彫　せんじょうぼり
陰彫の一種で題材の輪郭を線（線的陰刻）で彫るもの。刻線彫ともいう

【そ】

袖切　そでぎり
虹梁端部の柱が取り付く位置で、薄く削り欠き取られた部分をいう。

反り増し　そりまし
垂木や桁などで先端にいくにつれて反り上がり成も大きくなる状態。「照り増し」ともいう。これは中世の建物見られ、近世にはほとんど見られない。

【た】

大虹梁　だいこうりょう
虹梁のひとつ。内陣などにおいて、長く掛け渡されているものをいう。

大社造　たいしゃづくり
神社の社殿形式のひとつ。切妻造、妻入の最も原始的な形。出入り口を向かって右側に寄せて形成し、屋根を付けたものが多い。

大斗　だいと
組物を構成する部材の一つで最も大きい斗。柱上に直接または台輪や皿斗を介して置かれ、肘木や巻斗を載せて構成する。

大塔　だいとう
多宝塔のうち、初層の裳階の柱間が五間で、内部に身舎（もや）の円形平面を残すものをいう。

大斗肘木　だいとひじき
組物形式の一つ。大斗の上に肘木を載せ、その上に直接、桁を据える。

大瓶束　たいへいづか
瓶のような形をした束。虹梁の上に用いられ、上部に斗を載せ、下部に結綿と呼ぶ彫刻が施される。

台輪　だいわ
柱頂部及び頭貫（かしらぬき）の上にある水平材をいう。

手挟　たばさみ
向拝の柱の内側などにおいて、肘木と垂木の間に設けられる三角形の材。装飾彫刻が施されているものが多い。

多宝塔　たほうとう
下層を方形、上層を円形とする二重の塔であり、下層の屋根と上層の間に白漆喰の亀腹が設けられている。上層の頂部には相輪が立っている。

垂木　たるき
屋根の野地板などを支持するために棟から桁にかけて斜めに架けられる材。

【ち】

力肘木　ちからひじき
肘木のなかでも、特に荷重を受ける肘木。桁と垂直な方向に長い材として使用される。

千木　ちぎ
屋根の妻側の端部において斜め上方へ突き出した一対の部材。

千鳥破風　ちどりはふ
切妻破風を葺き降ろしの屋根に直接置いたもの。

粽　ちまき
円柱の柱の上下端または上端において、角を落として丸めたもの。唐様（禅宗様）に特徴的な意匠。

【つ】

繋虹梁　つなぎこうりょう
虹梁のひとつ。外陣などにおいて、内側の柱と外側の柱とを繋ぐ短い虹梁。

妻入　つまいり
大棟に対して平行な妻側の方向に入り口のあることをいう。

妻飾　つまかざり
切妻造、入母屋造の屋根の妻側の三角形空間に組物・懸魚・笈形・大瓶束などの架構による装飾を妻飾という。

詰組　つめぐみ
柱の上の組物と次の柱の上の組物の間において、梁や桁の上に、和様では間斗束や蟇股などを置くが、唐様では組物を置く。

連三斗　つれみつど
三斗組の変形で、肘木の一方を二手だけ伸ばし、巻斗を一つ加えて並べたもの。桁の外側が下がらないように外方向に延ばすことが多く、向拝に多くみられる。

【て】

出組　でぐみ
組物の一形式。深い軒を支えるため、持送式に組物を前に挺出させたもの。

出三斗　でみつど
三斗組の一つ。大斗の上に枠肘木を載せ、中央に方斗を、四方に巻斗を置いたもので、一つの肘木が壁から突出する。例えば、壁方向で桁を、手先方向で繋虹梁を受ける。

照り　てり
上方が凹の弧形をいう。

【と】

通肘木　とおりひじき
組物と組物を連結する横材。斗にのり、組物を繋ぐ水平材。

【な】

内陣　ないじん
神社本殿や仏寺本堂の、神体または本尊を安置した場所。仏寺本堂の場合、堂内を奥の内陣と手前の外陣とに分けている。

中備　なかぞなえ
柱上の組物と組物の間に置かれる荷重支持部材であるが、装飾的に用いられることが多い。間斗束、蟇股などが使用される。

流造　ながれづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻造、平入の、前の軒を流れるように延長して向拝としたもの。千木、堅魚木は設けない。正面の柱間の数によって、一間社流造、三間社流造などと呼ばれる。

長押　なげし

柱面に釘付けされた横木で長が押しの略。土台に接する地長押、縁板に接する切目長押（縁長押、足元長押）、窓下の腰長押、出入口や窓の上部の内法長押、内法長押と天井の間の蟻壁長押、天回縁下部の天井長押（回縁長押）などと、位置によって種々の名称がある。

【に】

二重虹梁蟇股　にじゅうこうりょうかえるまた

妻飾の一つ。虹梁の上に蟇股を置き、その上に虹梁を架して、さらにその上に蟇股を置いて棟桁を受けるようにした形。

二重門　にじゅうもん

二階建ての門で、二層ともに屋根があるものをいう。

【ぬ】

拭板　ぬぐいいた

平滑な床板をいう。

貫　ぬき

柱を貫いて、柱と柱を繋ぐ横材。建物の強度を増すための部材であり、柱に穴をあけて貫を通し、楔を差し込んで固定する。柱の頭に通す貫を頭貫という。

【の】

軒唐破風　のきからはふ

唐門の屋根に用いられ、主屋の軒の一部に取り付けたものをいう。

野垂木　のだるき

下から見えない隠れた箇所に設けられる垂木

【は】

拝殿　はいでん

祭員が礼拝するための殿舎をいう。

秤肘木　はかりひじき

肘木の一種であり、十字に組まれていないもの。天秤のような形状からこのように呼ばれる。三箇所に巻斗を載せる。

箱棟　はこむね

箱形の大棟（おおむね）をいう。大棟は屋根頂部において水平に走る棟を指す。

撥束　ばちづか

間斗束（台輪や頭抜きの上に並ぶ斗栱間にあって上部に斗を載せた形の束）で、下方が開いた撥形の束のことをいう。

八幡造　はちまんづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻造の三間社を、平同士で前後に連ね、両殿の屋根の接するところに共通の樋をかけ、その下が合ノ間となった形。

鼻隠板　はなかくしいた

垂木の先端（鼻）を隠すために、垂木の先端間に架け渡して取り付けられる板。

花狭間　はなさま

花飾りのように美しい華奢な透かしを花狭間という。扉の上部などに用いられる。

花肘木　はなひじき

肘木に斗が融合して一体になったものをいう。

刎高欄　はねこうらん

高欄の一つ。親柱上部に擬宝珠を載せないで、架木（はこぎ）を反らせて突き出すもの。跳高欄とも書く。

浜床　はまゆか

大床（おおゆか）に対するもので、向拝階段の下部にある板張りの床をいう。本来は異なるが浜縁も同義で使われている。

羽目　はめ

板を幅方向に繋いで張る壁をいう。

破風　はふ

屋根の切妻に付いている合掌形の装飾板。あるいはその破風板が付いている部分をいう。屋根に飾りとして形成される。

梁間　はりま

建物の大きさを示す指標のひとつ。梁方向（棟と直行する方向）での柱間距離をいい、柱間の数で表す。「梁行き」ともいう。

【ひ】

庇　ひさし

身舎の外側に屋根を葺き下ろした部分。

肘木　ひじき

組物を構成する部材の一つ。斗と組み合わせて上部の荷重を軸部に伝えるもの。枠肘木と秤肘木が

ある。

一手先組　ひとてさきぐみ

組物形式の一つで、出組ともいう。壁面から肘木を一つ飛び出させたところに三斗組を乗せ、桁を一段持ち出して支える。

平入　ひらいり

大棟と直角方向の長手側に入口があること。

平彩色　ひらざいしき

置き上げを施さず、漆下地面に絵具を着彩色していく技法。

平三斗　ひらみつど

三斗組の一つ。大斗の上に肘木を載せ、その上に三つの巻斗を置き、桁を受ける組物。巻斗の上に実肘木を置くこともある。

檜皮葺　ひわだぶき

檜皮で葺いた屋根。檜皮の寸法は長さは２尺～３尺５寸（61～106cm）程度、幅は３寸５分（11cm）以上である。

【ふ】

双斗　ふたつど

肘木の上に斗を二つ置いた組物。例は少なく、中備として使用される。二斗とも書く。

二手先組　ふたてさきぐみ

組物形式の一つ。壁面から斗組を二段に張り出させ、桁を二段に持ち出して支える。二手先が虹梁の場合と、尾垂木の場合がある

舟肘木　ふなひじき

組物形式の一つ。柱の上に肘木を置き、この上に桁を受ける。肘木が舟のような形に形成されるので、この名がある。組物で最も簡単なもの。

【へ】

平行垂木　へいこうたるき

切妻屋根では、垂木は平行に配置されるが、寄棟屋根や入母屋屋根において、隅木の部分まで平行に配した垂木を特に平行垂木という。

幣殿　へいでん

参詣者が幣帛をささげる殿舎。本堂と拝殿との中間にある。

別当寺　べっとうじ

仏教諸宗派の管轄下にある神社を運営するために設けた寺院。神社境内または隣接して構える場合が多く、明治の神仏分離により分割される。

扁額　へんがく

鳥居・門戸などに掛ける横長の額。社号・寺号などが記される。

【ほ】

宝珠　ほうじゅ

頭部が尖り、左右から火炎が燃え上がっている状態にかたどった玉。如意宝珠を表したもの。

方丈形本堂　ほうじょうがたほんどう

禅宗の方丈にならった平面形式の本堂。県内では内部を前後２列３室の計６室に分け、中央前後２室を仏間、前を外陣・後ろを内陣する場合が多い。その類似形として、数は少ないが前後２列２室の計４室、前後２列４室の計８室も見られる。

方斗　ほうと

組物を構成する斗の一種で、肘木の上に載せて使用される。二方向の肘木あるいは桁を受ける斗。

本墓殿　ほんかえるまた

墓殿のひとつ。内部を透かし彫りなどして刳り抜いたもの。組物間の中備などとして荷重のかからない部位に装飾材として用いられ、構造材の機能は損なわれている。

本瓦葺　ほんがわらぶき

屋根葺きのひとつ。平瓦を並べ、平瓦の端部間の上に断面半円の丸瓦を重ねた葺き方。本格的な瓦葺。

本殿　ほんでん

神霊を安置する殿舎をいう。

【ま】

巻斗　まきと

組物を構成する斗の一種で、肘木の上に載せて使用される。一方向のみで肘木あるいは桁を受ける

斗　ます

組物を構成する部材の一つ。柱の上、あるいは肘木の上に載せて使用され、別の肘木や桁を受ける。「大斗」「巻斗」「方斗」などがある。

疎垂木　まばらたるき

垂木の間隔が広く、疎らに並んでいるものをいう。垂木が一段の一軒のとき、一軒・疎垂木という。

眉欠き　まゆかき

虹梁・破風板など端部の袖切の脇に見る眉形の繰形をいう。「弓眉」「弓決り」ともいう。

丸彫　まるぼり
部材を題材の実物の形通り立体的に彫るもの。線の平彫、面の浮彫に対して立体的な彫刻。

【み】

水引き虹梁　みずびきこうりょう
向拝正面の虹梁。

三斗組　みつどぐみ
組物形式の一つ。大斗肘木の上に三つの巻斗を載せ、桁を受ける。平三斗、出三斗、連三斗がある。

三手先組　みてさきぐみ
組物形式の一つ。壁面から斗組を、一手先、二手先、三手先と、三段に張り出させ、桁を三段に持ち出して支える。軒の出を長くすることができる。

蓑束　みのづか
間斗束の一種。束の上部に装飾を施したもの。

【む】

起り　むくり
照りとは反対に上方が凸の弧形を指す。

棟木　むなぎ
根を作る部材の一つで、母屋や桁と平行に、屋根の最も高いところに配される横材。

棟札　むなふだ
建物の上棟や竣工の時、建物名、工事の由緒、年月日、施主、建築工匠などを墨書で木札に記し、棟木・棟束などに打ち付けたものをいう。それらに打ち付けず保存するものは置札と呼ぶ。新築のみならず修理の際にも作成される。通常は細長く上部を尖頭形（駒型）とする。近世になっても見られるが、時代が遡ると棟札の内容を墨で棟木や梁などに直接書いており、棟木に書かれたものは「棟木銘」、梁に書かれたものは「梁銘」、などと呼ぶ。また、曹洞宗建築において、必要事項を記した長い板を梁下打ち付ける場合がみられるが、これは「上梁銘」と呼ばれている。

【も】

身舎　もや
下屋に対して家屋の主体となる上屋部分をいう。

身舎柱　もやばしら
家屋の主体となる部分を支える柱

【や】

八脚門　やつあしもん
一階建ての門であり、四本の本柱の前後にそれぞれ控柱を設けて屋根を支える。控柱が八本あるので、八脚門という。三間幅で中央が出入り口となる三間一戸の門になる。

【よ】

寄棟造　よせむねづくり
大棟から四方に葺きおろす形式の屋根。大棟の両端に隅棟が寄った形になる。

四脚門　よつあしもん
一階建ての門であり、二本の本柱の前後にそれぞれ控柱を設けて屋根を支える。控柱が四本あるので、四脚門という。「しきゃくもん」ともいう。

【ら】

来迎柱　らいごうばしら
仏堂において本尊を安置する須弥壇の左右の柱。

欄間　らんま
長押の上の壁に相当する部分を開口にしたもの。格子を入れた格子欄間、格子の桟が二重の吹寄格子欄間、菱格子を入れた菱格子欄間、菱格子の桟が二重の吹寄菱格子欄間、波連子を入れた波連子欄間などがある。

【ろ】

楼門　ろうもん
二階建ての門で、一層目に屋根がないものをいう。

【わ】

脇障子　わきしょうじ
神社建築の流造などにおいて、三方を囲む縁の突き当たりに設けた壁板をいう。

鰐口　わにぐち
古くは金鼓と称し、金属製の円形、中空で下方に細長い口をあける。仏堂・社殿の前に吊り下げ、参拝者は前に垂らした津名でって鳴らす。

藁座　わらざ
桟唐戸の吊元軸を差し込む孔のある部材。

割拝殿　わりはいでん
社の拝殿の一形式。中央が通路となって建物が左右に分割されたようになっている。中央の通路の上に軒唐破風があるものが多い。

群馬県近世寺社総合調査報告書
―歴史的建造物を中心に―
《神 社 編》

令和４(2022)年３月４日　印刷
令和４(2022)年３月18日　発行

▪編集・発行　群馬県地域創生部文化財保護課
〒371-8570　群馬県前橋市大手町１丁目１番１号
TEL 027-223-1111（代表）

▪印　　刷　朝日印刷工業株式会社